て見つけられた時、兩親に其娘を熱愛して思ひ切れぬから、御心のまゝに我身を處分してもらひたいと宣言するか、或は型通りに、『奴隷の中に加へられたい』と申し出る。そして兩親の承諾を得ると、其家に留まつて、其家族員となり、兩親の爲めに働らく。其場合、子供らは母親に附くが、若し後に結納金を支拂へば自分の方へつける。かうして段々と、公開婚又は如上の諸婚姻形式と同樣、子供らに對する全權を有つことになる。

（四）セレベス島及び近周諸島

セレベス島では、バリイ語を操るトラジャ族の間に、新郎が新婦の家庭内に入る規制がある。結納金は豫め定められるが、普通にはずつと後まで支拂はれない。結納金は子供らを男に引取る權利を得る爲めでもなく、また妻を連れ歸る權力を作る爲めでもない。たゞ自分を子供らの父親と認め、子供らの出生を合法化し、自分の兄弟姉妹に子供らを養子として育てさせるだけのものである。こゝでは養子は共通慣習となつてゐる。しかし、若し娘の兩親が結婚を承諾せず、しかも娘はどうしても結婚しようと思へば、駈落より外に道はない。娘の家族は駈落と同時に家族の紐帶が破れ、新夫婦は夫の家族員となり、そして出來るであらうところの子供らは夫の家族に編屬せしめられるであらうことを豫想して、それを大痛手と感ずるに相違ない。事實上、駈落は稀だが、それは家族の紐帶が極めて堅い爲めである。或地域では謂はゆる『嫁入』の結婚形式さへあるが、これは新婦を新郎の家に住み込ませるもので、結納金は勿論のこと、色々の贈物をして、新婦を其家から引張り出して自分の家に入れ、落ち着いてそこで暮らさせようとするのだから、なか〳〵費へが大きい。それ故、嫁入形式の結婚は富者の外は稀にしか行はれない。

セレベス島とフィリッピン群島との間の小諸島では、結納を拂つた上、新郎は新婦の家に入り、其家族の一成員となるが、離婚は屢〻行はれる。しかし、結納金を連續的に支拂はなければならぬから、よほどの富人でないと度々妻を取換へることが出來ない。タラウェル島で、妻の密通事件があつた時、其姦夫は賠償金を拂つたが、それは良人へでなく、兩親へであつた。離婚の場合、子供らは『泣かない方』へ行くことになつてゐるが、それは大方母に跟いてゆくことを假定したものである。しかし子供らが大きくなると、父方、母方どちらへ行つても差支ないとされてゐる。センギル島では、子供らは母親のカムポンに附く。カムポンといふのは家

族または家庭の義である。これらの嶋々で、妻に從はないで、自分の思ふ通りに振舞ふことの出來る除外例は、たゞラージャの子供達だけだといはれる。

（五）ボルネオ島の諸部族

ボルネオ島には起原の異つた色々の部族が住んでゐるが、通則として良人は妻に從ひ、子供らは母の家庭に殘るといふことが認められてゐる。しかし此規制は必ずしも普遍的ではない。カヤン族の間では、結納金を支拂つて、結婚式を擧げるが、其式の中には花嫁を掠奪する光景を象徴的に表はす。此處の慣習は、幾年かの間花聟は花嫁の家で暮らすけれど、遂には嫁を引き連れて我家に戻るもので、全く費用の多い舊來の結婚形式を避け、簡單に妻を我家に迎へ入れる新樣相を示唆してゐる。但し花嫁が首長の一人子である場合には、花聟は永久に妻の家に殘つて、首長たる岳父の後を襲はなければならぬ。

サラワクの海ヂアク族の間では、結婚に際しては新夫婦の住むべき場所を決めることが主要な問題となつてゐる。新郎が妻の親戚のものと宿所を定めるといふやうな話もある。此相談は娘がまだ子供の時から始められるといふが、唯だ子供の時ばかりではなく、何につけ彼につけ、宿所の決定には腦漿を絞るらしい。

一體ボルネオの土着民は、一時的にも永久的にも、外國の影響を受け、其本來的習俗が次第に改變していつたが、他の東印度諸島の如くに調査が進んでゐないから、統一のある慣習の記述などは出來まい。

（六）ニューギニヤのカイ族とヤビム族

これに反して、東印度諸島中の大島であるニュー・ギニヤに關しては、相當に用意の周到な記述がある。ニュー・ギニヤもボルネオと同じく、異系の部族が多く住んでゐるが、先づ南東海岸に占據してゐるメラネシヤ系統のものを瞥見しようにし、カイ族の間では、異腹でさへあれば、兄妹婚は禁ぜられてゐない。男の結婚する主たる楔機は、湯を沸かし、薪水を用意し、其畑を種耕するなど、働らく女を必要とする點にあるといはれる。さうした女を自分の家に連れて來れば、女の親戚は働き手を失ふことになる。それ故に、男は彼等に何らかの償ひをしなければならぬ。尙ほ人妻になる女にも條件がつく、即ち女と其所有物とは女の親類、特に母方の伯父と自分の兄弟とに編屬せしめられる。若し良人が妻と爭つて其厨具を破壞したとすれば、

規制上最も近い妻の親戚にそれを辨償しなければならぬ。そして妻が死ねば、其相續人たる妻の伯父と成人した兄弟とが妻の代償金を受取り、兩親は何物も得ない。しかし聟は妻の父親の爲めに働かなければならぬ。尙ほ通則として新郎は新婦を我家に引取り、妻の家に行かぬとしても、餘り遠方へ彼女を引き出すことは許されない。それは彼女の親戚がさうした隔離を承認しないからである。子供らは妻の財産で、妻の親戚に所屬し、父親の親戚には所屬しない。父親は子供らを懲治する權利をさへ有つてゐない。子供らが出生した時、彼等を活かして置くか殺してしまふかを決めるのは、妻の母親と姉妹とである。良人が死んだ場合、寡婦は一般に自分の兄弟の妻になり、つまらぬ空騒ぎなどはしない。兄弟は最初彼女が結婚する時、既に其身代金を分擔してゐる。尙ほ女は他人と結婚してもよいが、其男は最初の結納より少し小額の結納を收めなくてはならぬ。それで世間では之を貧乏人が廉價な妻を得る絶好の機會だといふ。女が再婚すると、其伯父や兄弟は其機に乘じて早速、初婚時代の子供らに對する權利を確立しようとする。男が死ぬと、其男の子らは彼れが生前栽植して置いた果樹を收受する。其外の彼れの財産、豚とか、身の廻りの品物とか、裝飾品とかは、彼れの兄弟と母方の伯父とが繼承する。只だそれらの繼承人がない場合にのみ、彼れの財産は男の子らの手に落ちる。娘らは何物をも相續しない。自分の息子らの次ぎに近い相續者は、死んだ姉妹の息子らである。各親戚にはそれ〴〵首長があり、あらゆる公事には其利益を代表するが、制馭、刑罰などの權力は極めて少い。それはカイ族が甚だ獨立的である爲めだ。權力は父子繼承し、子のない場合には姉妹の子に繼承せしめる。

如上の諸點から考察すると、カイ族は母權の狀態から出發して、次第に父權の要素を其社會組織の中に取り入れたことが知れる。妻が自分の家を出て、良人と共に棲むといふ事と、首長の位地が遺傳せられる事とは、特に其明證だと云へる。

カイ族は內陸の住民であるが、ヤビム族は海岸に侵入したメラネシア系民衆で、尙ほ母系繼承の規制を保持してゐる。然るに彼等の間でも、妻は良人と同棲し、只だ餘り遠方へ行つてはならぬといふ條件がついてゐるだけである。良人が妻の家に入り込むといふ例もないではないが、其場合妻の親類から何らかの方法で獨立した生活を營むことにする。娘の結婚問題を決定する最後の發言權は、彼女の母親の兄弟が握つてゐる。結納金は母方の伯父と、自分の兄弟と

が收め、兩親は何物をも受けない。また良人も妻と子供らとに對する權利を、ほんの少し許り要求するだけである。屢〻夫婦の爭議の種となるのは、父方で不順な子供を懲らさうと企てることである。父の財産は長子が繼承するが、若し長子が娘である場合には、彼女は大抵、幼い子供らが成人した後、其分前を彼等に與へることにしてゐる。しかし分配しなければならぬといふ規則はない。

（七）バーナロ族の社會組織

ずつと西方に進んで、ニュー・ギニヤのセピク河の支流、ケラム河溪谷で、近頃注目すべき社會組織の一形態がバーナロ族の間で發見せられた。こゝではそれを詳しく紹介する暇はないが、さりとて觸れないで通り過ぎてしまふわけにもゆくまい。

結婚はバーナロ族に取つては、姉妹の交換に過ぎぬものであるが、それは確かに父系繼承以前の社會に起つたと思はれる規制である。形式的な成年式と成人生活とが密緊に結合せられてゐることも亦た、此バーナロ族の特色である。新婦は先づ新郎の父親の友達（一世代前の年齢層）と交際することを求められる。此人を女は超自然的存在であるかのやうに信じ、それとの交際を續けて良人を除外し、ひたすら『魔子』と呼ばれる子供の生れるのを俟つ。そして子供が生れると、女は良人と同棲することになるが、一定期間內は祭禮の際、魔子の父親と同棲を續けることにしてゐる。其人が年をとつて、今一層上の年齢層に達し、此特權を撤廢してしまふと、今度は女は前述の如き機會に、良人の友達と同棲することにする。妻達の儀式的交換もまた他の祭儀と結びついて起る。かうして父性といふものはまだはつきり獲得されてゐない。魔子の場合を除いては、まだそれに到達してゐないと見なければならぬ。

此規制の發見者は、バーナロ族の社會機構は母性的か、父性的か、其不可思議な組織の起源はどこにあるかを知らうとして煩悶した。『魔との結合によつて生れた子は「魔子」と呼ばれる。其子は母親と共に暮らしはするが、母親の良人に養はれ、良人は末永くそれを教育し、實際上其養父として働らくといふ點から、これを母系繼承と見做すことは出來ない』とか『若し、私達が此繼承を吟味して見たならば、母系、父系、双方の影響が奇妙に結合されてゐることに氣附かずには居れまい。實際子供らは母親のものであり、其良人は母親と其子供らとを護る爲めに選ばれたゞけのものらしく見える。良人は單に妻の家族の保護者たるに過ぎない』とか、色

色の複雜な議論が、永い間、辛抱强く續けられた後、漸く到達したところの結論は、父系的なメラネシヤ族が侵入し來つて、通常は族内婚を行ふ母系的なパプア族と混淆した結果、發生したのが此駭くべき組織だといふ事である。此侵入と混淆とによつて、メラネシヤ族の長老政治は其力をパプア族の上に加へ、パプア族の原始社會はメラネシヤ族の組織を攝取することになつた。といふ穿鑿過程は、『アメリカ人類學協會報告』第三卷二六〇頁以下で知られる通り、頗る興味の深いものであるが、將來更に一段の深い檢討が行はれなくてはならぬ。

ニュー・ギニヤのやうに、多種の民衆が多數に住んでゐる大島嶼に於いては、各時代を通じて文化觸接が不斷に見られたから、社會制度の發展段階を發見することが期待されるわけである。若干部族は父系機構に到達してゐるけれども、先行した母權の影響を痕づけることが出來ない。さうした例の一つに、山岳住民のマフル族がある。彼等は本來ネグリトー種に屬するらしいが、パプア族やメラネシヤ族と混血し、今日ではパプア語を操つてゐる。かうした次第で、彼等の文化的環境と社會組織との十分の調査が要求せられてゐる。

（八）『處女』なきマダガスカル島

マダガスカル島の住民も多種、多系であるが、其根幹をなしてゐるものはマレイ種である。此島は多數世紀に亘つて、アラビヤ人の影響を多少共受けてゐる。其社會機構は大體父權的である。こゝは昔から淫蕩な場所で、ベツイミサラカ、其他の部族間には、『處女』といふ言葉がないといはれるほどだ。それだから一人ぐらゐ子を產んだ娘が、望ましい配偶と考へられる。子供は事實上、どこから來たかといふやうな氣むづかしい穿鑿をしないで、家族の一員として歡迎せられる始末である。離婚は容易に行はれる。それは、少くとも男の側では尋常茶飯事と考へられてゐる。しかし結婚に關する色々の制限がないではなく、それは父親の側よりも母親の側でやかましい。兄弟の子供ら同士の結婚は普通で、寧ろ最も固有の婚姻形式だと見做されてゐる。それは同族間で財產を保持することが出來るといふ理由に基づいてゐる。

兄弟の子供らと姉妹の子供らとの結婚は、輕い一定の儀式をさへ行へば許され、血屬婚といふ立場から觀てどんな故障もないと考へられてゐる。しかし姉妹の子供ら同士の結婚は、姉妹が同腹である場合には、それを恐ろしき近親婚と見做す。近親婚は嚴重に禁忌され、五世代を經なければ許されないことになつてゐるから、同腹姉妹の子供らの間の婚姻は許されない。

マラガシイ族は兄弟の子供らと、姉妹の子供らとを、殆んど自分の子供ら同様に考へ、伯父母を父母同様に考へ、彼等をごつちやに呼びかける。それはこれらの親族關係を言ひ表はす私達の言葉に匹敵する同義語が、一語すらもないといふ狀態だからである。此現象は親族を分類する社會組織の見られる場所では普通のものである。王族と貴族とは一般の實情に反して、其母系血統を重んじてゐる。何にしても大局から觀れば、實際の諸事實は、初めに母系親屬の規制が擴まり、追々從兄妹婚の慣習に移行していつたといふことは動かし難い傾向である。現にサカラヴ族の如きは、今日も尙ほ母系繼承を實行してゐるといはれる。

次ぎには視線を轉じて、インドネシヤの南東に向つて、南太平洋上に碁布してゐるメラネシヤの社會規制、婚姻、繼承、等々を覗つて見よう。

三、メラネシヤの習俗

（一）トルレス海峽諸島

オーストラリヤとニュー・ギニヤとの間にトルレス海峽があり、そこに多數の小島嶼が碁布してゐる。それらを初めニュー・ギニヤ、フィジイ島、ソロモン島、其他の島々を引括めて、集合的にメラネシヤと呼び慣らしてゐる。

メラネシヤの住民は大まかに二つに分けられる。其一つはニュー・ギニヤ及び其周圍の嶋嶼とトルレス海峽諸島とに占據してゐるパプア族で、他は東方の島々に占據し、且つニュー・ギニヤの海岸に移住したメラネシヤ族である。

トルレス海峽諸島の住民は父系繼承であるが、西部の諸島には母權の痕跡が殘つてゐる。傳ふる所によれば、母權ではありながら、氏族や家族は常に母系的血統を引いた男子によつて支配されてゐるといふ。此種の男子は長老で、父方の血筋を辿る父系民衆の間に政治的地位を占めて保護の任に當るものである。後にいはう如く、母系社會の間では、男と其母親の兄弟との關係は甚だ緊密で、男と其母親の良人との關係よりも遙かに深いと考へられてゐる。トルレス海峽諸島の社會は父系親族の型に依つて組織されてゐるにも拘はらず、母親の兄弟は絶大の感化力を有つてゐる。其親族關係を表はす用語ワドワムといふ言葉は相互的で、其中には母親の

兄弟も其姉妹の子も含められてゐる。それは分類的意義で用ひられるから、私達の親族表では親族と同一關係を認めないか、或は辛うじて親族としか認めない多數の人々をも含んでゐる。彼等はさほど近い關係を有つてゐないにも拘はらず、すべて女の系統で血が繋がつてゐるといふ一事で、他から區別せられてゐるといふことは大に注意すべきである。此間の微妙な關係を說明する爲め、シドニイ・ハートランドは英國に汎く行はれてゐる話、即ち叔父は甥の喧嘩を一言若しくは一擧手で止め得るが、其代り甥も亦た叔父の持物を自由に始末し得るといふ俚諺を引いてゐる。かうした慣習は叔甥間の關係の緊密さと信用の深さとを示唆するものである。慣習其他、退化的諸條件は、以前には母系繼承が擴がつてゐたといふことのみならず、近頃それが見られなくなつたといふことをも證明する。トーテミズムと母系氏族とは今尙ほ存してゐるが、漸く衰滅に近づいて、其代りに親族組織が地歩を占めつゝある。氏族外婚は同一島內だけに制限せられ、東方の諸島では非常に進歩が見られてゐる。土地の耕作が行はれ、氏族の地域的聚合が父系親族成立の結果として現はれ、氏族外婚を村落外婚に移行せしめた。トーテミズムは殆ど消失して只だ二三の怪しげな痕跡が殘つてゐるだけである。そして親族組織は追々單化の過程を辿りつゝある。

（二）マッシム部族のトーテム規制

ニュー・ギニヤ島は、東方からメラネシヤ族が侵入した結果、其東岸及び南東岸にはメラネシヤ系の住民があり、先住民であるパプア族と混血した。一般的に云へば、西方へ行けば行くほどメラネシヤの文化的性格が多樣であるが、それはパプア系との混血度が强い結果である。東方部族がマッシムと呼んでゐる部族は、今、母系繼承から父系繼承へ移行の狀態にある。社會組織と慣習とは、土地の異るに從つて細部が異るけれども、一般的には、民衆はいくつかの女の血統を引くトーテム氏族に分たれる。氏族は族外婚的であるが、或場所では其嚴格な規則が崩壞しつゝあるやうであり、他の場所では父系氏族に變りつゝあるやうである。其外の禁忌も同樣に變化を見てゐる。例へば或男は其父のトーテム動物を自分のトーテム動物と同樣に考へるが、他の場所、例へばウッドラーク島のムルアの如きでは、自分のもの以上、儀式的に避くべきトーテム動物を父のものと同樣に考へたりする。又自分の父に對すると同樣、母方の伯父に對しても從順であり、且つ援助を吝まないやうな男の現はれたのは、全く社會規則の推移

の結果である。かうした男は父や母方の伯父の財産を、許可もなく拒絶もなく、勝手に借用したり、收受したりするが、恐らく父の財産よりは伯父の財産の方を容易く始末するだらう。

（三）オーストラリヤの財産制度

オーストラリヤの土着民は、遺産を重要視しないほど財産が僅かばかりしかない。しかし、私達のやうに文明程度が進むと、財産が集積せられ、それを相續する指圖が優勢になる。直接な私用品は原始心狀に於いて一個人と關聯があるので、其人物の風格を體得するやうに思はれ、さてこそ私用品は人物の一部となり、所有者と一致せしめられるのである。かうした私有品は持主が死ぬと破棄せられ、又は副葬せられる。此習俗は非常に文化度の低い時に創められ、古代に於いて既に變化を起し、遂に殆ど全く棄てられるに至つた。他の財産は慣習のまに〳〵、氏族或は家族に繼承せられる。子供らに對する父親の關係が一層明らかになると、父親は其財産の一部を子供らに讓りたいといふ欲望を起すが、それこそ母權に對する最初の侵犯の一つである。父親は屢〻其生前に於いて、財産を子供らに分けて其欲望を充たした。其實例は後で述べる通り澤山ある。チュベチュベのマッシム族の間では、父親が死ぬと、其財産は二通りに分けられる。腕輪や頸飾や寶玉といひ得べき貴重品やは、彼れ自身の子供らに、其他は姉妹の子供らに分配せられ、格別の品物は遺言に從つて與へられる。重要食料の一つである豚も、時としては同樣の方法で分配せられる。しかし太鼓類、檳榔子を嚙む道具類、刳舟類、漁網類は、古い母系的慣習に從つて、姉妹の子供らの物となるが、若し姉妹の子供らがゐなければ、母方の伯父、或は自分の兄弟姉妹の物になる。また不動産ともいふべきもの、即ち園地とか、藪林の伐採權とかも、同樣の方法で相續せられる。家屋は一般に迷信的な理由から立ち腐れを待つか、或は取り壞しをする。そして母系相續人は事實上、たゞ遺跡のみを相續する。他の住居についても、類似の規則が應用せられは。

（四）バンクス島のモイエチイ組織

島嶼的なメラネシヤ族は、ニュー・ブリテン島、ニューアイルランド島から、フィジイ島、ニュー・カレドニヤ島、ロイヤルチイ諸島に至る間に弘がつて、樣々の社會的發達段階を表はしてゐる。其諸慣習は有能な探檢者達によつて調査、記載されてゐるが、それらの中で著名なのは故コドリントン監督と、リヴァーズ博士とであらう。リヴァーズ博士の『メラネシヤ社會

史』は、學徒の研究に値する良著であるが、彼れは其書に於いて、住民は先住民的下層と、其上に覆ひ被さつて、自分達の慣習を失はないでゐる二つ以上の移住民的上層とから成り立つてゐるので、不思議な社會制度の混淆が見出されることを結論してゐる。リヴァーズ博士の推論では、其社會の本來形は母權的であつたといふが、それは今尚ほ比較的純粹な形に於いて、特にバンクス諸島で見出されるのである。そこでは社會は二つの群、即ち半截社會（モイエチイ）に組織されてゐる。其半截社會はヴェヴェ又はヴェヴと呼ばれるが、共に『母』を意味する語で、其各々は更にいくつかの亞類に分たれてゐる。各半截社會は族外婚で、其男は自分の所屬しない半截社會で妻を見出さなくてはならぬ。ヴェヴェに於ける成員資格は、母親から傳承する。二つの半截社會は異つた性格を有つと信ぜられる。父子は食事を共にしない、それを共にするのは子が父の性格を得てから後のことである。然るに他面、男と其母の兄弟との間には非常に緊密な關係があり、叔父は父以上に敬意を表せられる。トルレス海峽諸島に於いては、姉妹の子が關係してゐる限り、男は戰爭を止めることが出來る。成年式に若者をスクヱ即ち男達の倶樂部の一種に紹介するのは、父親よりも寧ろ母方の叔父である。此スクヱの成員になると、初めて女達と一所に給養せられないやうになる。初生兒が生れると、其儀式が擧げられるが、子供の母方の叔父は其儀式で顯著な役を勤める。財産の相續の仕方は、島々でそれ〴〵異つてゐるが、一般的に云へば、古い世襲的な開墾地は姉妹の子に讓られる。また或男が自分の手で荊棘を刈つて墾耕した土地は、屢々其子供らに讓られる。或男の栽ゑた樹木の所有權は、其樹木の立つてゐる土地の所有權とは區別して、其子供らに讓渡される。モタ島では、或男は屢々新らしく植林した土地が子供の手に入るやうに、それを豫め登錄して置くことがある。さうした場合には子供は必らず植林の儀式に携はり、若し成熟して居れば、父親の肩に片手をかけて、父親の後に跟いて歩かなければならぬし、若し尚ほ幼ければ、父親が木を植ゑる時、父親の肩に載せられてゐなければならぬ。そこにはまだ生れない子供の爲めに木を栽ゑる慣習さへあり、それは乾いた椰子の實を栽ゑる手が持ち運ぶといふ仕草で代表せられる。土地以外の財産は子供らに移行するが、前述の姉妹の子の相續で例示されてゐる通り、彼れはどんな物をも選ぶがまゝに取つてもよいのに、若しそれが拒まれたら、何もかも取つても差支へない。首長の資格は、秘密社會に於ける身分に從うて展開するから、父親は息子を秘密社會に入れて、彼れの勢力を增す

やうな身分に進ましめようと配慮する。

（五）フイジイ島のマタンガリ團體

フィジイ島内部の山岳地域では、民衆は其住地の名を負うたいくつかの獨立體に分たれてゐる。そして其獨立體は又それ〴〵、マタンガリといふより小さい團體に纏められる。マタンガリは大抵父系的で、かすかながらもトーテム組織の痕跡を有つて居り、常に一時代前の母系繼承について疑ひを抱かしめる。フィジイ島ではどこへ行つても男と其姉妹の息子との間には、ヴァスといふ特殊の關係がある。それはトルレス海峽諸島で見出されるものと似てゐるが、それにも増してフィジイ島のヴァスは深刻である。父系的地域に於いてすら、男子は自分がヴァスであるところのマタンガリ即ち部族でタブーしてゐる動物を食べようとはしない。以前にはヴァスは其叔父のどんな所有品をも取ることが出來た。即ち叔父の栽木を根こじにし、また望みさへするなれば叔父のどんな豚でも殺すことが出來た。けれども今日では、恐らく英國の影響であらう、其權利はもはや認められてゐない。否、英領以前でさへ、其權利はぼつ〳〵制限せられかけてゐた。男子は、若し首長のヴァスならば、叔父の町へ入り込んで、欲するまゝにどんな女でも手に入れることが出來た。叔父は今尚ほ自分のヴァスを服從させる權利を有つてゐる。叔父は其甥の生活を監督し、甥に關する一切の儀式を整備したり、指揮したりする。以前には戰爭の技術を教へた。子供が死ぬと、其父親は母親の兄弟に賠償を拂はねばならなかつた。メラネシヤの此處彼處では、バンクス諸島に見られる相續の通則が、色々に變形して存在してゐる。尚ほ、どこへ行つても、死者の子供らに相續される傾向はあるが、死者の姉妹の子供ら、又は死者の屬した社會（母系）群に相續される慣習が先行してゐたといふ明證がある。然るに他面、首長權は父親から息子に繼がれる。メラネシヤ諸島の大部分は父系であるが、到る處に母系繼承の舊組織が殘つてゐる。かと思へば、父權の行はれ始めたことが、そこ〳〵の母系的諸島で見出される。息子は其父親のトーテム動物、又は父親の所屬する社會でタブーしてゐる動物を尊敬し、父子の關係は十分に認められ、結婚其他の諸權利は段々、氏族よりも血屬關係に基づくやうに傾いてゐる。呪的法式の所有及び使用は通常相續せられ、父親から息子に移される傾きがある。トロブリアンド島群に於けるが如く、母系繼承の行はれる場所では、呪的法式は二級に分たれてゐる。一級は祈年（としひ）の呪、雨請の呪の如く、既定の地域と結合して、

一定の場所で行はれるもの、また戰爭の呪術、漁撈の儀禮などの如く、或場所に屬した人々によつて行はれるものである。これらの呪禮はすべて母系に傳へられて、重要な階級を形成してゐる。他級は醫學的呪言、戀愛的呪術、及び樣々の他の目的を有つた呪言などで、父親から息子に傳へられ、動〻もすれば外來者にさへ傳へられる。これらの諸島に於ける氏族は特定の村落と一致してゐるらしい。女子は結婚する時、自分の村落を離れないといふことを表示せしめられる故に、ずつと居殘るのみならず、自分の成員たる資格と諸權利とを其子供らに讓るのである。

（六）ロツマ島のホアグ制

ロツマ島はフィジイ島の北方約二八〇マイルの海上にある孤島で、其住民はメラネシヤ族とポリネシヤ族との混血らしいが、そこでは各ホアグ（氏族又は家族）は自分達だけで村落に住み、一人のプレ即ち頭領の支配を更けてゐる。頭領は大抵、前任者の兄弟、若しくば血筋の正しいホアグの成員である。ホアグは族外婚を行ひ、結婚すると、新郎は其妻のホアグに入つて妻と同棲することになる。子供らは母親に屬する。大首長、即ち氏族長、または富裕なホアグに屬する男子は、其妻を自分のホアグに連れ歸ることが出來るが、其場合、双方のホアグのプレの承認を經なければならぬ。但し良人は妻の生存中、たゞ獨り妻のホアグに留まるが、妻が死んで、其棺が戸外に運ばれる時、戸外に走り出さなければならぬ。それは彼れがもはや其家にゐる權利を有たぬことを意味するものである。しかしながら、彼れの子供らは母親の傍に居殘る。土地は當分の間プレの手に歸するが、年々分劃されて、彼れの指揮下に、ホアグの成員が耕作する。土地の私有財産は知られてゐない。私有財産には、家畜とか、勞力によつて造られた物品とか、さうした種類が或點まで存在してゐる。これらのものは全然彼れの處分によつて、彼れの死後、親戚とか友人とか、生前彼れの面倒を見てくれたものに與へられるのを普通とする。

チコピヤ島では、氏族組織は大分衰へてゐるけれども尙ほ存在し、父系的家督及び遺産の相續、並びに首長の位地の繼承が行はれる。けれども母方の叔父の力が外延的に働らく。子供の母親は、分娩後十日にして、兩親の家に引取られ、十日を一期とする次ぎの期間が終るまで滯留する。これに似た産兒に伴ふ慣習はどこにでもあるが、それはいつも母系制度の殘物だと考

へられる。

四、ポリネシヤの諸規制

（一）ニュー・ジーランドの母本的婚姻制

私達がメラネシヤ族といつてゐる混血種族を構成した移住群の間で、最高位地を占めてゐるのは疑ひもなくポリネシヤ族である。ポリネシヤ族はハワイからニュー・ジーランドまで、太平洋の大部分に占據してゐるが、其血統が初めてヨーロッパ人に知られた時には、全く神怪なものだと思はれてゐた。しかし神々の多くは神格化された祖先であつた。子供が生れると直ぐ父親の神々か、母親の神々かに獻げられたが、其事が子供の屬する家族を規定して來たのである。然るに此頃の傾向では、子供は大方父親の神々に獻げられるやうになつた。其結果、血統繼承と社會處理とは獨立したものになり、過渡の狀態を視はすに至つた。本來の系統は母方を繼承するものであつたことは、諸島の慣習から見て明らかな事實である。格別に私達がニュー・ジーランドについて聞く所によれば、マオリ族の間では、子供は父親の家族よりは母親の家族に屬するものと考へられてゐた。母系繼承の特徴の一つは、最後的な試案ではないが、母本的結婚であるといへる。ニュー・ジーランドでは、少くとも高位の間に、暴力による新婦の掠奪が、妻を得る慣用手段であつた。實際、掠奪の擬態は結婚式の慣はしとなり、全員が心から成婚を希望してゐる時にすらそれが行はれた。いづれか一方の父親が簡單に求婚者に向つて、男が來て、娘と一所に住んでもよいといひ、そして男がさうしたら、女は立所に其男の妻となり、其義父と同棲した聟は義父の部族の一員即ちハプと考へられた。そして戰爭の場合には、屢〻自分の親類のものと戰ふべく餘儀なくせられた。實際、母本的結婚の慣習では、良人が妻の親類と一所に暮らすのを拒み、妻は良人を離れて親類へ歸つてゆくといふことも屢〻あつた。聟がかうした慣習を打破しようとした結果、妻を失つたといふことも語られてゐる。母本婚の子供らは母方の人々と共に住んで、母の家族若しくは氏族の一員となり、そして母の土地を讓渡される。若し子供に事故が起つたら、輕重に拘はらず、母方の氏族員は直ちに蹶起武裝して、武者修行のやうな扮裝で父親を訪ね、子供の安全を保障しないでもよいものかと、嚴しく其責

任を質し、血が出るほど父親を攻め立てたものである。何か强迫した事由で、父親が子供を殺した場合、父親は、子供の氏族の復讐を受ける覺悟がなければならぬ。良人が其妻を殺した場合も同樣である。良人や父親は其妻子を殺す權力を有つてゐても、復讐を免れることは出來ない。首長の制度と高位を尊敬する風習とは、ポリネシヤ族の間に十分發達して居り、どこへ行つてもニュー・ジーランドと同樣の狀態を呈してゐる。

(二) 首長の位地と土地の制度

首長の位地は母方の血筋に傳へられた。實際、首長の息子の位地は父親のそれよりも高いと考へられてゐた。息子にはもう一層立派な祖先があり、死を以て彼れの父を扞護したところのタブーが、ずつと古い時代から彼れをも扞護して來た。老年に及ぶと、首長は一般に其愛する長男に職權を讓ることになつてゐた。部族または氏族に附屬してゐる地域の土地は、共有が通則であるが、若し何人かゞ其一部を分け前として貰ふことがあつたとすれば、其人の死と同時に、其土地は以前の共有狀態に還元せられる。けれども此規則は追々衰廢しかゝつてゐるらしく、あらゆる土地は個人によつて要求せられてゐる。かうした事情の下に、臨終の床で遺言をして、自らの惠まうとする人々、即ち概しては息子達に土地を分配することが行はれ、其企圖が一般に重んぜられてゐる。若し婦人が土地を所有してゐたとすれば、それは其子供らに讓られ、子供らがなければ其兄弟らに讓られた。前述の如く、娘の結婚に際しては、父親の承諾が必要であるにも拘はらず、兄弟の承認を經ることは一層大切だとされ、兩親は寧ろ其事に關しては口を挾まないといはれるのはどういふ理由か。それは兄弟こそは、家督相續の分け前である姉妹を他に與へる權力を有つた唯一の人物であるからだ。ところが父親や兄弟の權力は、到底母權の上に出ることは出來ない。血屬の理由で結婚を禁忌するといふことは、まるで自家撞着である。一方に於いては、近親との結婚は文明人の間に於けるが如く、恐るべきことゝして騷がれるといふのに、他方に於いては、近親間の結婚が必らずしも稀れでない事が確められ、兄弟と姉妹とが夫婦として同棲してゐる場合すら報告されてゐる。けれども彼等が父親こそは同じけれ、母親が異つてゐるといふ事は有意義である。かうした風の結婚は、母系民衆の間では屢〻認められることだ。サンドウィッチ島民が近親婚を必ずしも嫌はないのは注意すべきことだ。マオリ族が氏族組織を有つてゐるのは不思議である。何にしても、母系氏族、從つてト

ーテミズムが、既にポリネシヤ全體で崩壞してゐたのは、ヨーロッパ人進出以前のことであつた。トンガでは、前世紀の初め、そこに捕虜になつてゐたマリナアに從へば、血統は母方を通じて繼がれたけれども、島の統治には首長が當つてゐた。其位地は多分近頃の征服によつて得られたものだらうが、それを繼承する規定は全く父系的であつた。

五、結　語

以上四章を費して、私は大東亞共榮圈の新代表たる南方廣域から、インドネシヤ、メラネシヤ、ポリネシヤの地域を選び、そこに占據する諸種族の社會規制を紹介した。社會規制とはいふものゝ、其性格は原始的で、婚姻、產兒、敎育、家督及び財產の相續、等々が文化民衆から甚だ隔絕してゐることを明らかにした。

さうした社會慣習は、勿論、瞥見すれば不合理に感ぜられるけれども、嚴密に檢討して見れば、遠古からの社會進化過程に於ける諸段階を表示してゐるもので、將來に於ける轉換、變化、昂揚は十分に約束せられるにも拘はらず、現在に於ける實存狀態を無視することは出來ないのである。文化程度の異つたものの眼には、非合理、不道德に反映することがあつても、それらの中に浸り、呼吸し、行動し、思想してゐる南方民衆それ自身に取つては、それらは祖先から繼承した物質・文化的遺產を徐々に改善しつゝあるのであるから、決して非合理、不道德ではなく、寧ろ最も合理的、道德的であるとさへ考へられてゐるに相違ない。かるが故に『處變れば品變る』の原理に從つて、南方民衆の習俗を尊重し、決してそれに戻るやうなことをしてはならないのである。改むべきものは勿論多々あらうが、それは長年月に亘る懇切なる指導によつて、彼等に自覺的に改めさせるに若くはない。

フィリッピン島民衆が、『アメリカの極樂よりも、自分達の地獄』と叫んで、米國の施す色々の施設を忌んで、祖先以來の自分達の文化に憧憬れ、一日として自主獨立を忘れることがないのは、アメリカの對比律賓政策が根本的に誤まつてゐたことを示すものである。また和蘭政府はスマトラの最爾たるアッチェー族住域を統治することが出來ず、多數の人命と巨額の軍費とを消費した末、漸く急激なる行政改革の錯誤を悟り、土着民衆の慣習に從ふことに其態度を改

めたといふ。

日本民族は初めから共存、共榮を目的として居り、アメリカやオランダのやうな利己的政策を採る虞れはないが、今後の對策は十分の檢討と周到な企畫とによつて、人類學的立場から堂堂たる相利共棲主義的綱領を定めなければならぬ。いふところの『生命網』の擴大と充實とを規準としてこそ、大東亞戰の初めに下された勅語の中の『萬邦の平和と繁榮』とが實現せられるのである。初めは先づ『鄕に入つては鄕に從』ひ、徐ろに風俗を改めた『鄕先生』の覺悟が必要である。特に戒めなければならぬのは、母系社會に父系習俗を强ひ、女子相續に男子相續を迫るなどの非傳統的干涉行政である。共榮圈に於ける行政は、飽くまでも日本的な『知らす』の原理に基づいた『生命協同』でなくてはならぬ。それについては他日機會を待つて述べることにしたい。

第十二章　稻作から觀た東亞共榮圈

一、緒言——『瑞穗國』

大東亞共榮圈建設の提唱者であり、護持者であり、指導者でもあるところの我日本は、昔から其美稱を『豐葦原の瑞穗國』といひ來つた。ミヅとは『めでたい』とか、『立派な』とか、『美くしい』とかいふ意であり、ホとは『稻の穗』のことに相違ない。然らば日本は昔から稻作を以て國本とした農業立國主義の國家であつたと觀なければならぬ。

今、大東亞共榮圈內に入れるやうに一般から考へられてゐる廣域の民衆生活を觀ると、勿論多少づゝの差異はあるけれども、經濟的に一つの一致點を見出す。それは稻作を以て基本的生產經濟を立てゝゐることである。アメリカが玉蜀黍を以て、ヨーロッパが小麥を以て代表せら

れる如く、アジヤは稲を以て代表せられるが、とりわけ東アジヤに於いては、稲作は主要な生活資源の獲得手段として尊重せられ、或場合、或地域、或民衆に於いては、米を神聖視する時、處、人さへもあることを忘れてはならない。

さほどに稲作は東亞諸民族の經濟生活に於いて、重要なる位地を占めるものであるから、各民族の間にそれ〴〵それに伴ふところの儀禮、風俗、慣習が伴つて、土俗學的觀點から見ても輕視し難い重要性を有つてゐる。こゝで私はさうした土俗學的觀點から取扱ふ暇はないが、最も直接な耕作手段を技術學的觀點から窺ふことにして見たい。其事はやがて大東亞共榮圏といふものが、一つの稲作ブロックでもあるといふ見解に讀者諸君を導くであらうことによつて、一層興味多く、意義深くおもはれるのである。

二、雛段耕作が東亞の特徴

大東亞共榮圏は稲作に於いて共通性を有つてゐる如く、其耕作法が我邦で謂ふところの『棚田』即ち『雛段耕作』であることも亦た一致してゐる。勿論、低地に於いては雛段がないけれども、さうした場所では區劃式水田を營み、溝によつて灌漑することにして居り、そしてそれは雛段の一進化型式であることに疑ひの餘地がないから、雛段耕作こそは大東亞共榮圏の稲作型式であるといふことが出來るのである。

雛段耕作とは山腹の傾斜面に隴堰を作つて、そこをいくつかの區劃にわけ、溪谷の水を堰きとめ、溝によつてそれを區劃された耕地に灌漑するものである。日本では此方法は極めて古い時代から採用されてゐたらしい。かの神話に現はれてゐる『天の狹長田』とか『天の平田』とかいふものは、皆な此雛段耕作をさしたものである。

我邦で有名な雛段耕作地は信濃の更級で、そこに名立たる『田毎の月』は、區劃せられた田圃毎に中秋の月影を宿して、それを一段と高い山地――姨捨山から眺めると、如何にも美くしいといふので、名所の一つに計へられるに至つたものである。

かうした耕作法を採用するに就いて注意すべき點は、それが一家族や二家族では出來ない事であるのみならず、一村落や二村落が協同したとて、なか〳〵目的は達せられさうにもない。

もつと大きな、廣い區域、即ち上流から下流に亘る廣域が一體となり、協同して堰を作り、溝を掘り、畝を造り、溪水の引入と汚水の排出とを計畫して初めて雛段耕作は出來るわけである。かうした設計と實施との勞力は大したものであるが、それを古くから實行したといふことは、如何に農村が協同一致の精神に富み、相互扶助の思想に豐かであつたかを語るものである。

一體、シナノといふ國名は何から起つたかといふに、本居宣長もいつた如く、シナとは『級』のことで、『坂』又は『段』を意味するから、それにノがつけば『段のある野』の義で、あの山國の傾斜地に雛段耕地がずら〳〵と並んでゐたから起つた名であると解しなければならぬ。またサラシナといふ地名も、やはり同じことで、シナは『段』のこと、サラは朝鮮語のサルと等しく『米』のことであるから、『米の段』といふ義で、結局は『棚田』をさしたものに相違ない。して見ると、信濃の雛段耕作はよほど古い起源を有つたものと考へなくてはならぬ。

然らば雛段耕作の中心はどこか、日本か、支那か、將た印度か。――此問に對しては誰れしも容易に答へられまい。われわれは先づそれの分布を見る必要がある。

三、雛段灌漑の地理的分布

ペアリイの研究に依ると、印度には汎く雛段灌漑が擴がつて居り、カシュミル、ネパール、ブータン、ヒンヅークッシュ山脈とヒマラヤ山脈との會合點であるギルギット溪谷や、パミールのフンザ溪谷やでもそれは見られるが、チョタ・ナグプルや、マドラスや、オリッサや、アッサムでは、非常に遠い土地から溝渠によつて水を引いて來る施設が行はれてゐる。

ビルマでもカレン族は、五呎乃至六呎の高さを有つた石垣で雛段を支持し、そこに溪水を引き入れて稻作をしてゐる。雲南省や貴州省でもやはり雛段耕作が行はれ、印度支那でもそれは若干見られるといふ。

太平洋中の島々はどうかといふに、スマトラのバタク族は雛段を作り、英領ニューギニヤ、スンヅ、ヅスム、ボルネオ、中部セレベス、フィリッピン、臺灣にも、立派な雛段耕作が行はれてゐる。

東印度諸島で代表的なのは西ジャワの火口原に於ける雛段灌漑で、山腹の傾斜面に細長い、狹い田圃の造られてゐる有樣はまるで繪のやうである。さうした景觀はフィリッピン群島でも見られるが、特にイゴロット族の雛段耕作は立派で、日本の更級のそれに匹敵してゐる。

インドネシヤ地域に於いては、ルマキッグといふものがボントック族に農耕の技術を敎へたといつてゐるが、彼等の耕作法は雛段灌漑で、其隴と堰とには多く石が用ひられてゐる。傳說によると、ルマキッグは天から降りて來てボントック族の婦人と結婚し、ボントック地域の中心であるチャオヰに住んでゐたといふ。そこには大きな平たい石が環を描いて立つてゐるが、それこそ彼れの家の基礎であつたらうといはれてゐる。ルマキッグは其義弟ファンタンガと、ボントックの北西にあるイシル山に登つた時、飲料がないといつてファンタンガがこぼしたので、ルマキッグは其劍で山腹を突いたら混々として水が湧き出した。ファンタンガが走り寄つてそれを飲み始めると、ルマキッグは制して『私の渴きが醫るまで待て』といつたルマキッグが飲み終つたので、ファンタンガは泉の傍にゆくと、ルマキッグは其手で强く彼れを山腹の土中に突込んだ。と、ファンタンガは岩になり、それから水が迸り出たといふ口碑がある。

これらの口碑や傳說から推すと、石を用ひる民衆が他から入り込んで來て、ボントック族に雛段耕作の方法を敎へたといふことが想像せられる。然らば稻作を齎らしたところのルマキッグは何ものか、どこから來たか。これに答へようと思つたら、先づ稻の原產地がどこであるかを知らねばならぬ。

四、稻の原產地は印度

日本の神話には高天ケ原でアマテラス大御神が御田を造らせられたとあり、『出雲國風土記』には、稻穗が天から降つた處を多禰（タネ）鄕といふとあつて、ちよつと考へると我邦が稻の原產地のやうにも思はれるが、植物學的には稻は熱帶的性質を有つて居り、日本よりもつと暑い國をそれに擬しなければならぬことはいふまでもない。

『栽培植物史』を書いたド・カンドルは、稻作は恐らく支那の方が印度よりも古からうが、支那で耕作せられる前、支那からベンガルに亘る南アジヤに存在してゐたに相違ないといふこと

は、印度・支那間の諸種族に、稻が單綴音の名稱で呼ばれてゐる事で分るといつた。此考へをクラウファードが受繼いで、米は南印度からペルシヤに輸入されたが、それをアラビヤ人がアルズと呼んだので、今日でもイスパニヤではアルロス、イタリヤではリソといふのだといつた。

ウィリヤム・ロクスバローは、印度の各地で稻の野生を見出し、それをテリンガ族がネワリイと呼んでゐることを指摘し、暗にシルカース湖畔の自然生を稻の原生であるやうに說いた。ネワリイは一にニワラとも呼ばれるが、前者は我邦のネバリ（粘）といふ語に類し、後者はワラ（藁）といふ語に類し、日印間の稻には深い關係があるやうにわれわれを想はしめる。

いづれにしても、叙上の諸記述で、稻の原産地が印度であることは疑ひを容れる餘地がないけれど、記錄の上ではいつ頃まで溯ることが出來るかといふのが興味ある問題である。古代印度語では稻のことをウリヒ（Vrihi）、或はアルニヤ（Arunya）といひ、常に大麥と並び呼ばれてゐた。いはゆる『四吠陀』の一つ『阿闍婆吠陀』は讃歌の類集であるが、其中に呪的藥用植物を稱へた讃歌が載つてゐる。其一つを譯出して見ると、

『植物の中では、アスヴッター（無花果の類）とダルバー。

供物や神饌の王はソーマ。
米と大麥とは治力ある不朽の天の寵兒。』

の如き一節があり、更に死の危險を免れようとする祈禱詞の中にも、

『米と大麥とは爾等に緣起よし。
それらは禍も起さねば、將た害をも加へざるべし。
それらの二つは病を禳ひ、また凶禍を除くならむ。』

といふ句があり、更に邪鬼、惡巫、及び怨敵に對する呪詛の中、カーヂラの木で造つた護符の德を頌めた句もある。それは

『護符は私に米と麥とを齎らし、
勢力と繁榮とを齎らす。』

といふので、不揃の齒が一對現はれ初めた時、贖罪の爲めに婦人の唱へる次ぎの呪文と似たところがある。

『爾等、食へよ米を。食へよ麥を。

豆と胡麻とをも食へ。
それは、おう齒よ、爾等の
肥やしにと積まれたる分け前なり。
賊はざれ、父と母とを。』

アスヴィンスの蜜鞭の讃歌といふのは、なか〳〵興味の深いものである。其句は

『七くさの鞭の蜜を知る彼れは、
豐かなる蜜持ちとなる。
婆羅吸摩那（ブラーフマナ）、王、牡牛、牡牛、米、麥、
及び七番目には蜜の七くさ。』

といふので、其頃、米は大體、悪鬼を攘ひ、病氣を癒やし、死の危險から免れしめ、勢力と繁榮とを來らしめるところの、蜜と共に甘美なるマジック的、醫藥的の力を有つものだと信ぜられて居り、まだ日常の食料として用ひられてゐなかつたことが知られる。

然らば『阿闍婆吠陀』の年代はどんなものが。それの結集について、ラプソンは紀元前一、〇〇〇乃至八〇〇年を擬したから、それの內容をなしてゐる思想は、大約紀元前一、二〇〇乃至一、〇〇〇年と見て差支ないわけである。

かうした次第で、稻の原生地に關する諸說、たとへばエチオピヤ、アマゾン、オーストラリヤなどの假定說は次第に崩壞して、デッカン半島を眞の原產地とするフッカア博士の說が一般に信ぜられることになり、今日ではもはや動かすことの出來ない確說となつてしまつた。然らば植物分布學上、稻が印度から諸地方へ擴がつていつたといふことは、絕對に否定が出來ないのである。

五、泰國に於ける稻作の狀況

アジヤの中でも米產國として有名な泰國の稻作狀況を知ることは、やがて大東亞共榮圈內に於けるそれを知ることにもなる。泰人は日本人と等しく、米を常食し、米に依存する民衆であるから、兩者の關係は將來一層親密、濃厚とならねばならぬ。それ故に日本の米作を泰人に、

泰のそれを日本人に、互に知らしめて、他の長所を取り入れると同時に自らの短所を捨てしめる手段に出ることは、兩者を接近せしめる强力な動因となるであらう。

泰人は一體勞働嫌ひで、商工業の如きは之を國内に在る支那人又は外國人の經營に一任してゐるけれども、農業だけは自分達で經營することにしてゐるから、本來的に農耕民族だといふことが出來る。泰の主要産物は米で、政治も商業も社會的地位も、すべて米によつて左右せられるのである。米は泰人の主食物といふよりは、寧ろ唯一の食物で、上は王侯から下は庶民に至るまで皆な之によつて生活する。馬、牛、犬、猫、其他の家畜も皆な之を食物とする。泰に於ける米の重要性は、殆ど外國人には理解出來ないほどだ。

泰國に於ける米の平地耕作には二種の方法がある。一は米の育つ土地へ廣く種子を蒔き散らすもの、他は豫め準備された苗代に種子を下し、尋いでそれを田に栽ゑ替へるものである。前者は古制で、原始的な山地耕作法を平地に應用したもので、之に對する水の供給は只だ自然の降雨があるばかりである。然るに後者は灌漑が必要で、或期間中は灌漑することの出來る土地でなければ行はれぬ耕作法である。

第一の方法をナ・ワンといふ。ナは米田の義、ワンは種子蒔の義で、又ナ・ムアングともいふ、同じ言葉の訛つたものだといはれる。雨が降つて土地が濕ると、直ぐ鍬入が行はれる。それは毎年六月頃で、地面は馬鍬で鋤き返され、雜草を除いた後種子を下すが、其後は雨水任せである。

第二の方法をナ・ヅムといふ。ナは米田の意、ヅムは潜る義、從つて手で以て軟い泥の中へ栽ゑる意である。一名をナ・スアンといふが、やはり同じ語原である。鋤入はナ・ワンと同じであるが、鋤返しは降雨又は灌漑で水が十分田に入つて地面を蔽ひ盡してから後に始める。苗代田で芽を出した稻は土地が膏腴な爲めに急速に發育するから、手頃に伸びると直ぐ移植される。此方法はナ・ワンよりも面倒だが、其代り收穫は豐かなので、一般に東亞の米作國では採用されることになつてゐる。日本の如きもやはり、此ナ・ヅム式耕作法が行はれてゐる。

泰の平原に培はれる稻は、カオ・バオと、カオ・ナクとの二色である。前者は輕い粒、後者は重い粒の義である。然るに山地の住民は變種の稻を栽培し、印度、緬甸、支那、其他東方諸國に共通の原始形式を以て耕作する。此耕作法は恐らく先史時代以來のもので、只だ伐採或は

焚燒によつて叢林を清め、さて尖つた棒で地面に孔を穿ち、其孔の中へ米粒を挿し入れるに過ぎないもので、我邦ではそれを『火田』といふものと同じである。かうしたわけで、泰には今日雛段耕作がないやうだが、隣りの緬甸や印度や南支那にはそれが見られるから、昔は泰にもそれが存在した筈だといふので、ジェー・マッカァシイといふ人は內地を普く調査して、處々にムアング・ガンといふものの存在してゐるのを發見した。ムアング・ガンは『雛段』或は『段丘』とでも譯すべきもので、丘腹の傾斜面に雛段を作り、そこに水を滿たして稻を栽ゑたものである。之に依つて泰でも昔は、堰を設けて流水を塞ぎ、溝渠によつてそれを段田に導いたことがあつたといふ事實が發見されたわけである。

して見ると、泰も亦たやはり雛段耕作の分布地域の中であつて、前述のインドネシヤ地域と同一文化圈だといふことが出來るのである。

六、『日子文化』と雛段耕作

グラフトン・エリオット・スミス博士は、曾てエジプトからアメリカまで、太平洋を通して文化が移動した間に、種々の文化要素が加はつて、一種の陽石文化複合體が形成せられたと說いたが、ペアリイ博士は調査の重心をインドネシヤに置いて、そこの文化を克明に研究した結果、それは(一)巨石建造物、(二)石墓、(三)供饌石壇、(四)石座、(五)石壁、(六)石造家屋、(七)聖石、(八)石像創世說話、(九)太陽禮拜、(一〇)人祖岩石說話、(一一)雛段耕作、(一二)金礦精練の諸要素から成ることを知つたが、中でも雛段耕作と巨石建造との交聯は甚だ密緊であり、多くの場合、それらの二つは共存してゐるのを發見し、さてこそ巨石記念物建造者が金屬礦及び寶玉を求めて移動した爲めに、其文明が行く先々へ擴がつたといふ結論に到達したのだ。

ペアリイ博士は雛段耕作と巨石建造との交聯を十七地域に於いて調査し、それを次ぎの如く表示した。

地域	雛段耕作	巨石建造
スムバ	+	+

ロチ	+	+	+	+	+	+	?	−	−	−	+	+
カイ	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
セラン	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ハールマヘラ	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ボントック	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
イゴロット	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
イフガオ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
臺灣	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ミナハッサ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
バダ・ベソア・ナプ、トラジヤ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
サダング・トラジヤ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ヅスン	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ニヤス	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
カーシ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ナーガ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
カレン	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

瞥見してもわかる通り、此表は巨石建造と雛段耕作とは双關的のもので、それらが共存しないのは除外例である。そこでペアリイ博士は、用石民衆がインドネシヤに雛段耕作を輸入したことを主張したが、それに伴うて文化の移動した事情は、場所によつて若干づゝ異つてゐた。たとへばチモール島では、移住者は『日子』即ち太陽の子であつたが、雛段耕作を輸入しなかつたのに、スムバ島では雛段耕作を輸入したものが、太陽の末裔だと信ずる首長を其子孫に有つてゐないといつてゐる。

しかし原則としては日子民衆が雛段灌漑を齎らしたことは事實で、インドネシヤ人の大部分は、皆な稻作を高天原から敎へられたと信じ、ミナハッサ島でも、トラジヤ族でも、ボルネオのオロ・ガジュ族でも、高天原乃至神子から稻作を敎へられたといふ說話を有つてゐる。かるが故に、雛段耕作は『日子文化』の一構素だと考へても差支へない。

七、結言——共榮圈の紐帶

以上、思ひついたまゝを述べ來つたが、まだ述べ足りないにも拘はらず、與へられた紙數が盡きてしまつたから、こゝらで打ち切つて結言を作らねばならぬ破目に陷つた。

しかし、讀者諸君は恐らく如上の記述によつても、忘れられた古代に存外廣い地域に亘つて人種移動があり、それには必らず文化傳播も伴つて、或廣域に共同文化——たとへば雛段耕作だの、巨石建造だのが存在してゐたといふこと、そして今日のそれらは皆な過去の遺殘であるといふことに氣づかれたであらう。

雛段耕作の分布してゐる地域は、大體、われわれが今日、大東亞共榮圈と目してゐる地域と一致してゐるから、それの紐帶は古代以來存在し、一時緩んでゐたものを、こんど締め直すのであるといふことにも讀者は想到されたであらう。實に不思議な關係である。

第十三章　腕木附刳舟は南方の文化的特徴

一、はしがき

日本が今建設を取急ぎつゝある大東亞共榮圈は、西はアフリカの東海岸マダガスカル島から東はアメリカの西海岸に及ぶ廣い地域に亘つてゐるので、こんな廣地域が一つになることが出來るだらうかと、取越苦勞をしてゐる老人もあるやうだが、それは必らずしも未來の存在ではなくて、既に〳〵一種の共通文化がそこに存在してゐると私達には考へられる。

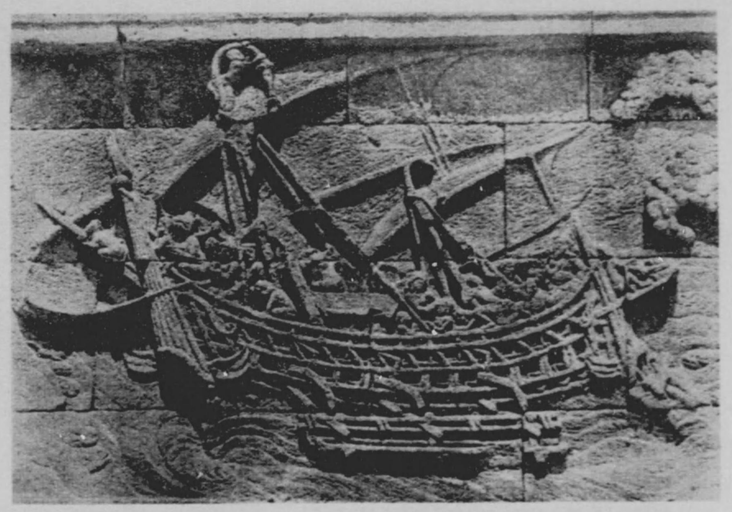
佛教が傳播してゐるとか、米食をしてゐるとか、其外色々の事實を持ち出して、それを東亞共榮圈に共通する文化だと主張するものがあるけれども、嚴密な意味に於いては、佛教も米食も大東亞全體に擴がつてゐるわけではない。本當に字義通り、大東亞共榮圈だけに限つて見ら

れる文化的特徴として擧げられるものは、私に云はすれば腕木附刳舟（うでぎつくりぶね）――それを西洋人がアウトリッガード・カヌー（Outriggered Canoe）と呼んでゐる水上運搬具だけである。實際、此刳舟の分布は、不思議にも大東亞共榮圏内に限られてゐるが、其事こそは此圏が文化的・政治的・經濟的に一つのブロックになれるといふことを立證してゐるのではあるまいか。さう見て來ると、腕木附刳舟といふものは極めて大切な文化現象の一つといはなければならぬ。で、以下少しくそれの種類、分布などについて語つて見よう。

二、ボロブーヅールの浮彫

民族學者の中には腕木附刳舟を、今オセアニヤ地方に行はれてゐる原始的水上運搬具に過ぎないものと考へてゐる向きもあるやうだが、實はさうでなくて、それの歴史は極めて古いのである。

ジャヴのボロブーヅール寺院は、建築年代について色々の說があるが、いくら新らしく見積



ジャヴのボロブーヅール寺院の石彫に現はれた昔の腕木附大船

フイジイ島の荷物を積む竹筏

立つて漕ぐゴーリバリ部落の軍船（腕木のないが特徴）

つても紀元八百年代、即ち今からざつと千百年ぐらゐ前のものである。然るに其石壁の浮彫には、七通りの水上運搬具が表はされて居り、其中少くも五つだけは腕木の附いた船である。腕木の附いた船ではあるが、今日のオセアニヤに擴がつてゐる腕木附刳舟とは異つて、實に立派な構造船であつたやうに見られる。

試みに其中の一つ（第一圖）を檢討して見ると、船體は可也に大く、檣は二本で、三角帆を張り、前部には舳材が突き出し、それには遣出し（やりだ）の帆が張られてゐる。後部は方形を呈してゐるが、尻が少し捻れて左舷が高く昂り、そこに大きな長い舵櫂（Steering Oar）が取りつけられ、それによつて針路を正したやうである。左舷を見ると、船體の上に格子狀欄干をつけ、其下から三本の腕木がつき出し、其末端は曲つて直接に浮木（フロート）に挿し込まれてゐる、これは直接腕木挿込型といはれる型だ。今日の浮木は大抵丸太一本であるが、此浮彫に現はれてゐるのは筏で、少くとも四本以上の丸太が組み合はされてゐたらしい。右舷の狀態は分らないけれども、欄干は取りつけられてあつたに相違ない。但し腕木は恐らくつけられてゐなかつたらう。

此浮彫で注意すべき點は、左舷に浮木を有つてゐる事と、後部に普通の舵ではなく、いはゆ

る『舵櫂』を有つてゐる事とである。浮木のことは後で話すから、こゝでは舵櫂のことだけをいはうに、これは大昔のエジプトの船に見られたもので、本來は船を推進する櫂の役目と同時に、方向を正す舵の役目をも勤めてゐたので、『舵櫂』といふ妙な名前をつけられたのである。此舵櫂は長くなければ功果がない故、出來るだけそれを長くしたが、長ければそれを操縱する事が出來ないので、艫部をねぢらせて高く昂げ、剩へ高い操縱臺を設けて其上に舵手が乘り、遠近を見守りつゝ舵櫂を操ることにした。艫部がねぢれ、舵櫂を操つてゐる型の船は、印度のマドラス、支那の福州などにもあり、形が如何にも奇妙なところから『尻捻り舟』（Crooked Ship）と歐人に呼ばれてゐるが、それが實は我朝鮮半島の大同江にもあり、邦人には『松葉舟』鮮人には『水上船』と呼ばれてゐる。いつ、どうして、そんな廣い地域にエジプトの船型が擴がつていつたか、歴史は本當に不思議なものさ。

三、腕木附刳舟の歴史

ボロブーヅールの浮彫に見られるやうな腕木附船舶は、一朝一夕にして生れるものではなく、進化の上に進化をかさねて、追々立派な構造を有つに至つたことはいふまでもない。然らばどんな過程を經て、さうした形態を具へるに至つたか。

一體水上運搬具といふものが、今日の船舶になるまでには、五つの段階を經たといはれる。第一には浮の段階、第二には筏の段階、第三には刳舟の段階、第四には縫合船の段階、第五には構造船の段階――これらの五段階を經過しの今日の水運が發達したことは、一般の認めるところであるが、然らば腕木附刳舟はどういふ進化過程を經て來たか。

第一に浮（うき）の段階には色々の物資が材料として選ばれた。フィリッピン群島のマニラへゆくと、其川々に椰子の實をどつさり浮べ、其上に人が乘つて漕いでゆくのが見られる。これなどは最も原始的な浮である。木材の多い場所では、大抵、丸太を浮となし、人が其上に乘つて河や海を渡る。印度では水牛の皮を胴拔きにして浮に用ひ、西藏やオルドスでは胴拔きにした動物の皮へ羊毛をつめて浮としてゐる。

第二には筏の段階が來た。一本の丸太では、くる〳〵廻つて轉覆するので、それを二本も三

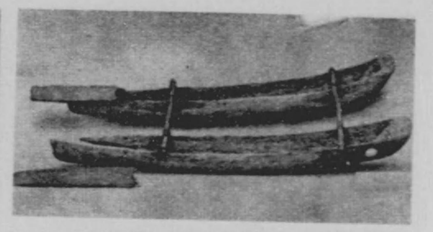
本も寄せれば安定する。幅も廣くなり積載力も増す。そこで材木の多い處では丸太を幾本も編んで筏に造り、竹材の多い處では竹を編んで筏に造る。前者には日本や支那の木筏が所屬し、後者には臺灣のテクパイやフィジイ島の竹筏（第二圖）が所屬する。葦を編んだものは葦筏、或は葦舟といふ。

第三の段階は刳舟で、大きな木材を刳り拔いて窪みを造る。一本の木だから縱通力はあるが、横張力は少い。それ故に梁を張つたり、梁を刳し殘したりする。ニュー・ギニヤ島のゴーリバリ部落の軍船（第三圖）は、一本の大丸太を刳つたもので、幾本もの梁を張り、漕ぐ時には皆立つて櫂を操る。

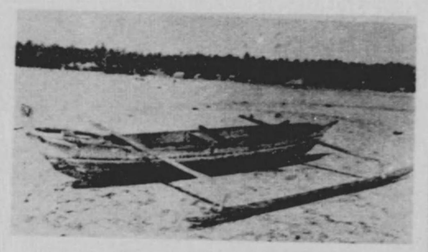
何しろ材料が丸太であるから、長さは十分でも、廣さが足りないのみならず高波に逢ふと轉覆する虞れがあるので、刳舟を二つ並べて、木の棒でそれらを絡める。それが即ち双子舟（ふたご）である。ソサイエチイ島の双子舟（第四圖）は、腕木附刳舟の多い太平洋中で珍らしいもので、一艘の舟は浮木の代りをつとめてゐるのだ。

これらの刳舟は鐵器で刳るのではなく、ミクロネシヤでは貝斧を用ひ、インドネシヤでは石

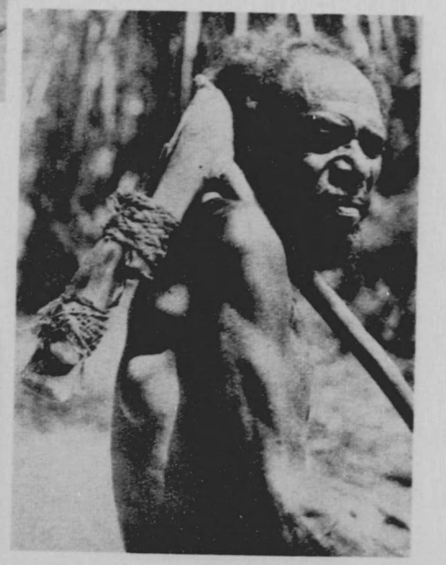
エリス群島の湖沼用刳舟・其名をパオパオといふ直接腕木裝備（腕木は三本）ハルマヘラ型



ソサイエチイ群島の双子舟腕木舟の發達形（舟に浮木の代りに）



ツアモツ群島の漁舟艫が高く昇る・腕木が船外につき出る浮木へ腕木を直接に挿込む（ギルベルト型）



石斧・でいかつを舟刳人アアパ造りにゆくを

ツアモツ群島の大型刳舟腕木直接裝備型（バリ型）・一定の敷の上に櫂を縫ひつけるもので・日本のヤマト型と造船技術が似てゐる・

斧を用ひる。ニュー・ギニヤでは、パプア人が大きな石斧をかついで、刳舟を刳りに造船所へゆくのを屢〻見受ける(第五圖)。

第四段階の縫合船、第五段階の構造船については後に述べよう。

四、腕木裝備の二種類

船體から腕木を突き出し、それを浮木に取りつける方法に二色ある。一つは直接裝備で他は間接裝備である。エリス群島の湖沼用刳舟パオパオ(**第六圖**)は、直接に上から腕木を腕木に絡めつける。これはハルマヘラ型といふ型式だ。ツアモツ群島の漁舟(**第七圖**)は、上から腕木を浮木に挿し込むもので、ギルベルト型といふ。そこの大型刳舟(**第八圖**)の腕木裝備はバリ型である。

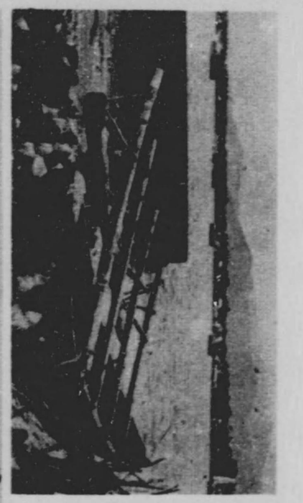
次ぎに間接裝備のものを見ると、トンガン群島の刳舟(**第九圖**)は細桿を十字に組んで、腕木を間接に浮木につける。これを十字型といふ。此處の刳舟(**第一〇圖**)には、細桿をX字形

に組んだものもある。それはX字型だ。然るに今一つ細桿をU字形に曲げたもの（**第一一圖**）があるので、それをU字型といつてゐる。

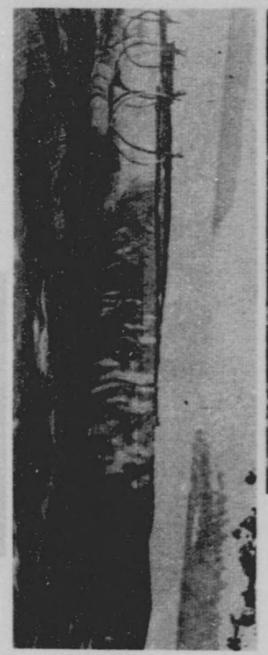
腕木は最少限が二本で、多いものになるとニュー・ギニヤのパプア灣沿岸に見られる刳舟（**第一二圖**）のやうに、七本の腕木を有つたものさへある　サモア島の新式刳舟（**第一三圖**）は、腕木が四本である。つまり土着民衆の知識が進むにつれて、色々と改良を施す結果變化が起るので、フィジイ島土着民の如きは、其刳舟（**第一四圖**）に三角帆（ラチーン）を張り、船體も腕木も殆ど水中に浸るほどの速力を出して航海する。

太平洋の一番東の端といつてもよいマルクェサス島の新式刳舟（**第一五圖**）は、腕木がたつた二本である。すべて末梢地の文化は古いといはれるから、これも古い型かといふと、さうではなくて、腕木の間接裝備方法は全く新らしいものである。此島には昔艦が高く昂り、それから後部の井樓へ繩を張り、それに人の毛髮をつけた刳舟（**第一六圖**）があつた。スチワートの研究に從ふと、これはもと戰利品たる敵の首を縛りつけたものだつたといふ。

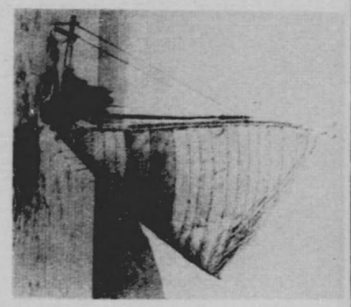
末梢地ほど文化が古いといふのは本當で、クック群島のマンガイヤ刳舟（**第一七圖**）は、艦



サモア島の腕木の新式刳舟

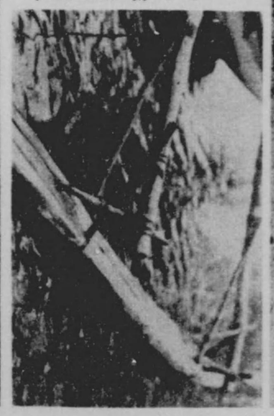


トンガン群島の腕木間接裝備の刳舟

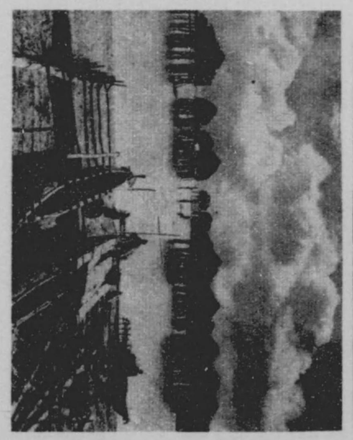


ジイ島の腕木に浸つて殆んど全く水中に浸つてゐる

トンガン群島の腕木間接裝備の刳舟



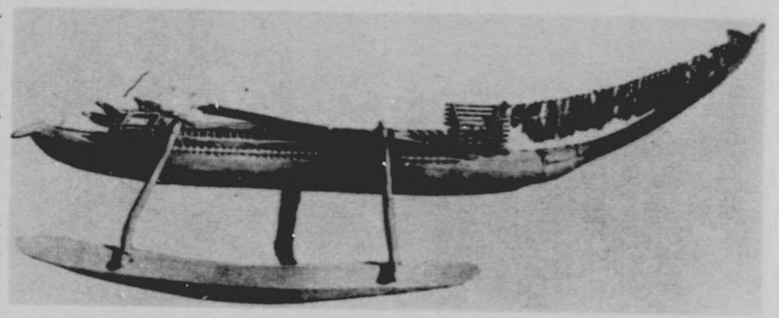
トンガン群島の腕木間接裝備の刳舟



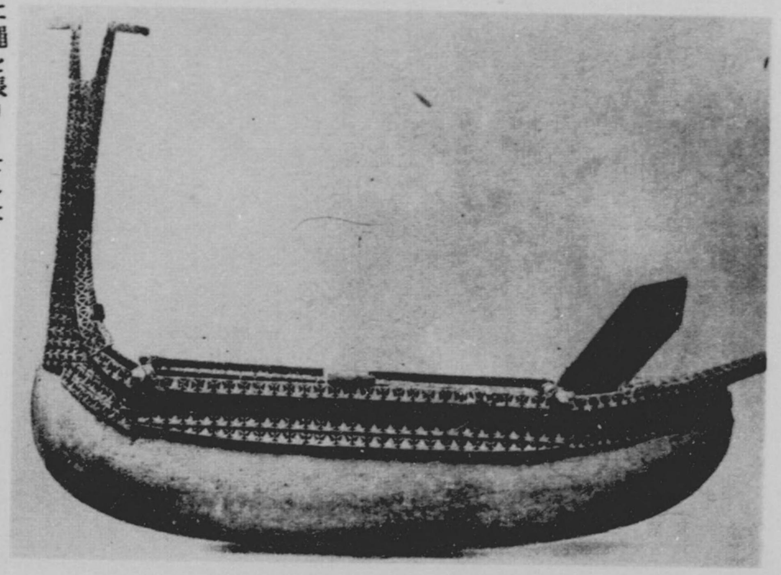
ニューギニヤの村落と刳舟

大三角帆を張つたフィジイ島の腕木附刳舟

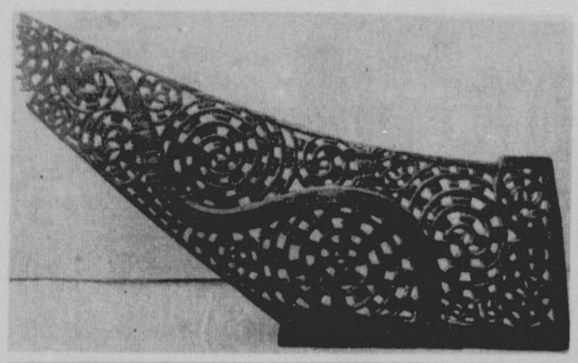
マルクエサス群島の新式刳舟（縫合船）
浮木に板を立てかけ其板に腕木をさし込んだ點が全く新式

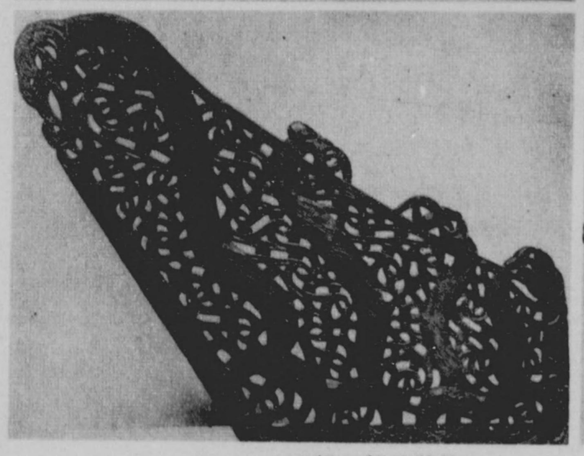


マルクエサス島の本來刳舟・ハワイの直接挿込と似てゐる
高く昂つてゐるのは艫で・井樓と艫との間に繩を張り・それに人毛をつけた勝利の記念・スチワートに從へば昔は頭蓋を縛りつけたことがあつたらしい

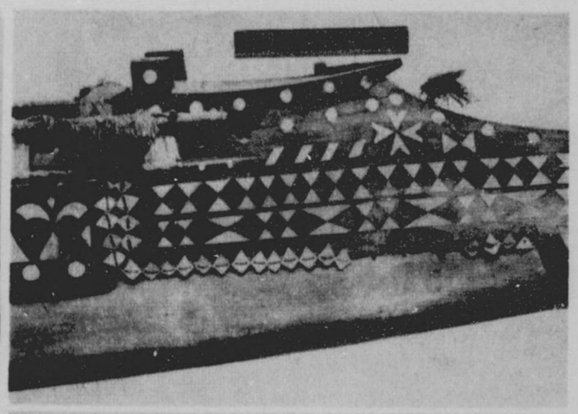


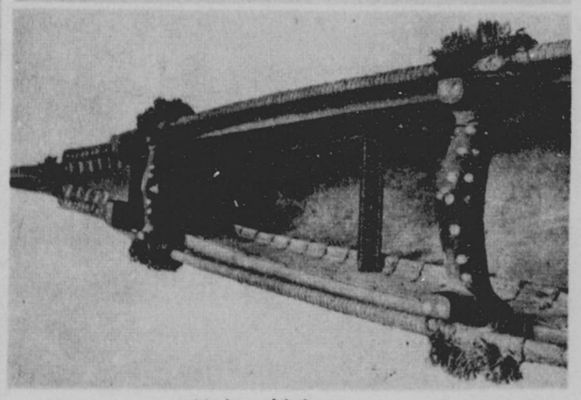
クツク群島のマンガイヤ刳舟
艉部に兩頭艫飾がある・櫂は型式的のものである





ニユージイランド軍船の船首裝飾





マニヒキ地方の刳舟

（上）船體艉部　（下）艏部・いづれにも三角形の座席あり

部に高く突き出した船尾裝飾があり、其末端が二つに岐れて兩頭になつてゐる。此船尾裝飾も舷側裝飾も皆精巧緻密な彫刻で、剩へ白、丹、黑などの彩色も施される。裝飾で最も著名なのはニュージーランドの軍舟(**第一八圖**)で、其船首裝飾は文明國民にも出來かねる程の螺旋文、唐草文、龍蛇文の透彫である。マニヒキ地方の刳舟(**第一九圖**)には、前後部に監視の座席が一つづゝあり、舷側其他は彫刻と彩色とを以て裝飾せられ、普通の腕木附刳舟などより美的價値に富んでゐる。つまり昔の物は美くしかつたが、白人が侵入して來てから餘裕がなくなり、段々さうした好尚が衰へ、技術も亦た低下したものと考へなければ說明がつかない。

五、縫合段階と遠距離航海

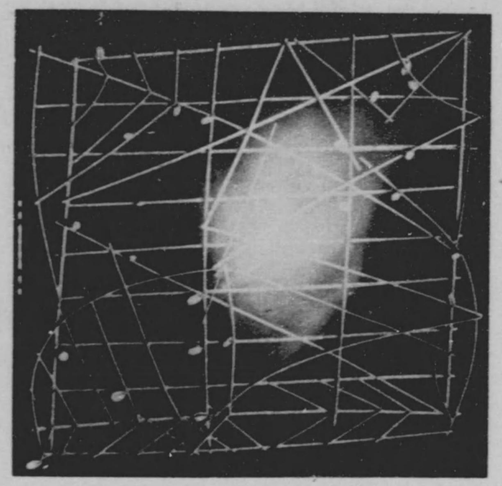
今まで述べた刳舟の中にも、本來船體の上へ補助的木板を添へて、船の高さと强さとを增したものがあるが、二材以上を接合するのに如何なる方法を用ふるかといふことが、造船學的に極めて興味が深い。

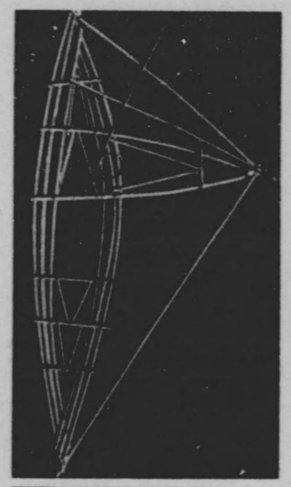
サモア島で鰹漁に用ひる刳舟（第二〇圖）は、前部の造りが進歩してゐるのみならず、敷（即ち龍骨）の上へ一枚、其上へ又一枚の板が接合されてゐる。接合には釘を用ひず、植物性物資を用ひる。一番上の板は上槌（うはたな）といひ、其下の板は中槌といふ。此造り方は日本の大和型船舶と同一手法で面白い。かうして接合された船を造船家の間では『縫合船』（Stitched Boat）といひ、それを進化史上の第四段階に屬せしめてゐる。

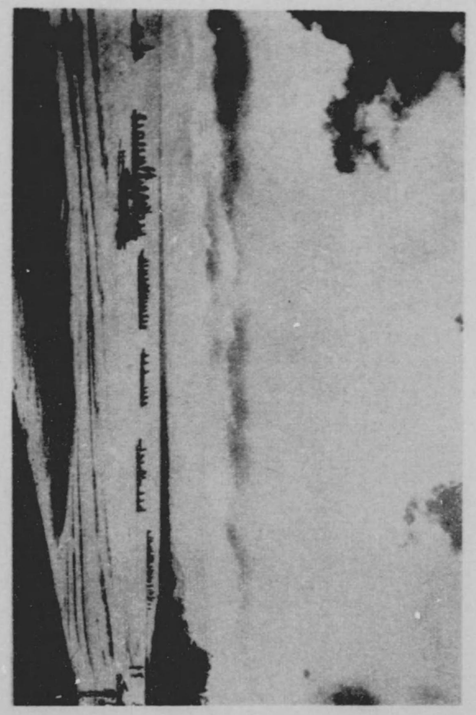
然らば第五段階の構造船（Built-up-Ship）は、どんなものかといふと、植物纖維の代りに鐵釘を用ひて釘着したものである。鐵釘の前に木釘を使つたものがあるが、それも釘着の中だから構造船へ入れて差支なからう。

太平洋上の島々に見られる腕木附刳舟は、すべて第三段階たる『刳舟』には相違ないが、前述の如く補強工作を加へたり、帆具其他の裝備を加へたりしてゐるので、同時に第四段階にも屬してゐるものが多く、場合によつては原始的構造船といつても差支ないものさへある。

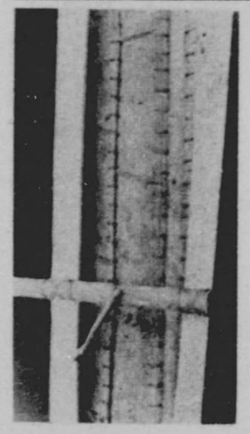
それだからオセアニヤでは、比較的海難が少い。勿論、赤道近くに無風地帶があり、波浪もさほど激しくないといふこともあるが、時々は颱風が襲ふのであるから、文明國人が見れば、







北西の恒信風を利用して珊瑚礁に圍まれるパプア灣を出で立つ漁船隊



サモア島の鰹漁刳舟・其造船段階は縫合船に屬する

マージャル群島の海圖
（上）群島の一部・子安貝は點々の位置を示してゐる
（下）ヤルート・エボン・メモリクへの航路方位を示す

よくあんな刳舟で遠距離航海が出來たものだなどゝいふが、刳舟の操縦者たちは在外進んだ天文、地文の知識を有ち、平氣で長途の航海を續けることが出來る。

ニュー・ギニヤのパプア灣は、いはゆる『珊瑚海』の北に位し、灣外の水面下には珊瑚礁が沈潛してゐるが、パプア人はいつも北西の恒信風を利用して、何らの被害を受くることもなく灣外に出る。其漁船隊（第二一圖）が舳艫相啣んで出漁する有樣は　實に美絶、快絶、勇絶、壯絶である。

オセアニヤの諸民衆が、毎年定期的に遠洋航海を行つて貿易に從事することは、經濟史家を悅ばしてゐる現象であるが、素人から觀れば如何にも危險であるのに、其實彼等は平氣でそれを斷行する。それは彼等に十分の自信があるからである。彼等が如何に海事知識に富んでゐるかは、マーシャル群島のいはゆる『海圖』（第二二圖）を見れば直ぐ分る。海圖は細い木枝を組み合はして造るが、それには二色あつて、一は群島の一部分を現はし、嶋々の位置は子安貝をぶら下げて示す。他は航路方位を示すもので、ヤルート島、エボン島、ナモリクヘ島などへゆくには、どちらへ進めばよいかを敎へる。

六、むすびの言葉

これまで述べたところを綜合して、今一度大東亞共榮圏の腕木附刳舟のことを考へ直して見ると、ボロブーヅールの浮彫のやうな進んだ形式の船が昔はあつたが、海中の孤島に住んでゐる間に刺戟を失つて、次第に其文化が衰へていつた事、白人が侵入し來つて其自然生産と人間勞力とを奪取した結果、島民の精神的伸展を止めてしまつた事、これらの二つが主たる動因となつて、造船の工夫及び技術が後退して、現在のやうな狀態に達したといふことが推想せられる。

腕木附刳舟の分布を見ると、西はマダガスカル島から印度洋を經て、インドネシヤ、ミクロネシヤ、ポリネシヤ、ネラネシヤに分布し、東はアメリカ沿岸に達し、北は日本の八丈島に達してゐる。

如上の廣い地域は實に腕木附刳舟の分布範圍で、しかも日本が提唱するところの大東亞共榮圏の圏内である。今に圏内の住民が白人の搾取から免れることになれば、彼等の文化は昔日の盛觀に復し、同じ腕木附刳舟でも、ボロブーヅールの浮彫に見られるやうな立派なものが、太平洋上のあちらこちらに浮ぶことになるであらう。私達は首を長くして、一日も早くさうした日の來るのを待たう。

第三部

第十四章　日本民族の優秀性

一、自らを信ぜよ

今や我日本は利益壟斷主義の聯合國家、ABCDの包圍陣を打ち碎いて、東亞の天地に強力な共存共榮圏を樹立しようと努力してゐるが、敵性諸國家の經濟的、軍事的壓迫は日一日と猛烈になり、氣の小さいものは其成行を心配してゐる。心配するのも無理ではない。事實上、我日本は有史以來未曾有の國難に遭遇してゐるのであるが、徒らに心配してゐるよりは、生命を賭して敢然猛進し、自己の欲する所に到達しなければならぬ。

青年よ、自らを信ぜよ。自信がなければ何物もない。之に反して自信のある所には一切が有る。然らば何故われわれは自信がもてるのか。それはいふまでもなく、われわれ日本民族が肉

體においても精神に於いても、信頼するに足るべき優秀性をもつてゐるからだ。民族的優秀性の有無は、人類學的研究によつて明らかにされるから、私は今其觀點から日本民族を檢討して見ようと思ふ。

二、論より證據此數字を見よ

われわれ日本人が、日本人はえらいといつたら、それは自惚だといはれるかも知れぬから、こゝにはヨーロッパ人の研究の結果を提示することにする。

ボーチウス、ビブコック兩氏の研究の結果によれば、日本人の知能は全體的に發達してゐるから、他國民に比して異常者の數が甚だ少い。試みに異常者の千分率を民族別に列擧して見ると、

ポルトリコ人	一六・〇〇	ハワイ人	二・〇三
ポルトガル人	六・〇六	支那人	一・〇九
フィリッピン人	五・〇三	日本人	〇・六四

であつて、日本人が一番少いのは、日本人が全體的に知能の發達した民族であることを證明するものである。ハワイ大學における大正十二年の特待生記錄を見ると、

支那人	一八・六	第三位
白人	一九・九	第二位
日本人	二一・九	第一位

といふ數字を示してをり、日本人の學力が白人を壓倒してゐることが知られる。日支人を合せて東洋人となし、東洋人對白人の百分比は

日本人 21.9＋支那人 18.6：2＝東洋人 20.25

$$\frac{\text{東洋人 } 20.25\times100}{\text{東洋人 } 20.25+\text{白人 } 19.90}=\text{東洋人 } 50.44$$

$$\frac{\text{白人 } 19.90\times100}{\text{東洋人 } 20.25+\text{白人} 19.90}=\text{白　人 } 49.56$$

といふ運算を經て、東洋人五〇・四四對白人四九・五六といふ結果が得られる。僅かに〇・九

八の差しかないけれども、さつと百分の一だけ東洋人の方が白人よりも優秀なわけである。論より證據、此數字を見て青年よ、自らを信ぜよ。

三、體質的優秀性

如上の優秀性は何によつて得られるかといふと、第一には體質上、第二には文化上の動因がある。まづ體質的動因を窺はう。

(一) 廣頭的傾向

日本民族の頭蓋骨は、長さに對する幅の割合が大きい。頭には狹い頭と廣い頭と中ぐらゐの頭とあるが、普通には長さを一〇〇として、それに對する廣さの割合によつて頭形を定める。即ち七五%以下を狹頭、七五乃至八〇%を中頭、八〇%以上を廣頭とする。

日本人の頭は百人中の一一・八二人が八〇・〇〇乃至八一・〇〇%、一〇・九五人が八一・〇〇乃至八二・〇〇%を示し、一〇・三二人が七八・〇〇乃至七九・〇〇%、一〇・三〇人が七九・〇〇乃至八〇・〇〇%を示してゐるから、廣頭的動因が働らいてゐると見て差支ない。

頭骨が廣ければ大きな腦髓を容れることが出來るから、日本人の智能的優秀さは、これに胚胎してゐるものと考へられる。日本民族の智能の全體的發達の如きも、もちろん教育の普及によることは多いが、根本的には廣頭的動因によるものであらう。かうしたわけで、頭形からいつても日本人は優秀性をもつてゐるといへるのである。

(二) 中位的身長

日本民族は必らずしも長身ではない。其男子一〇〇人の中八・六六人は一六三乃至一六四センチメートルで、これが最も頻數の大きい身長である。此數字からいふと、日本人は丈が高いとはいへないが、さりとて低い方でもない。即ち中身といふ型である。いくら丈が高くても、胸圍が少くては何にもならぬ。日本人は所謂『中肉中背』といふ手頃の體格である。しかし最近の青少年の身長測定表を見ると、年一年と身長が伸び、特に女子の身長の伸び方は驚異的である。これは日本人が本來もつてゐた身長を奪還しつゝあるからで、現在以前の日本人の身長は、江戸時代に座位の姿勢を取らされたため、それが發達を妨げられてゐたといふことがわか

る。

（三）人口增加率

日本民族は上古に於いて、自分達を『天益人（アメノマスヒト）』と呼んでゐた。それは高天原族はどし〳〵と人口の殖ゑる種族だといふ意味である。十數年前の統計を見ると、日本人の人口增加率は、毎年、千人につき、十五人以上といふことであつたが、試みに去る昭和九年度の出生及び死亡を調べて見ると、二百九十一萬一千一百三十一人の出生に對して、一百七十五萬九百八十人の死亡があり、一百十六萬一百五十一人の增加を見たわけである。これを百分率に直すと、

出生 3.08－死亡 1.85＝增加 1.23

といふ數字が出て來る。まあざつと百人中三人生れて二人弱死に、一人强づゝ殖えてゆくことになるから、日本民族は年々百二十三萬人づゝ、十年では、千二百萬人、百年では一億二千萬人殖ゑるわけである。

人口が殖ゑるのは身體の達者なことを意味してゐるから、多產型民族でなければ大事をなすことが不可能だと昔からいはれてゐる。最近、其大切な增加率がやゝ低下したが、目下其原因を芟除することに努力してゐるから、またもとの一・五％に立ち歸ることは不可能でない。

かうした三つの動因が、主として日本民族の體質を優秀ならしめてゐるのであるから、われわれは飽くまでもこれを保持助長することに努力しなければならぬ。然らば其保持、助長は如何にすればよいか。これに對する答へは極めて簡單だ。即ち『心身を錬成せよ』といふ一句に盡きる。

（四）文化的優秀性

次ぎには日本人の優秀性の文化的動因をつきとめて見たい。其文化的動因はいくつもあり、一々それを列擧したら限りがないから、こゝには最も强力なもの三つを其代表として取り上げることにした。

（一）家族國家

日本國家は天祖の啓示によつて、皇祖の肇められた神授國家であるが、つら〳〵其發展の跡

を顧みると、其機構は全く家族を擴充したものであるから、本質的には家族國家であるといふことが出來る。

家族は切つても切れぬ血緣の集團である。其機構が國家に擴充されると、家長が元首に家族が民族に展開する。だから我邦では君臣は父子の關係に立つてゐる。スメラギといふ語の原義は『家の上』であり、タミの原義は『家』であるから、君臣の關係が家長と家族との情義の發展形であることは疑ひの餘地がない。

かうして我日本は無限に發展してゆく運命をもつてゐるから、肇國以來今日までいさゝかの搖ぎも變りもなく、其國家形態を保持し得たのである。今後もまた然りで、此點はたしかに世界における唯一の存在であるといへる。

(二) 神人同格主義

日本民族の本來信仰に於いては、神から人が由來してゐる如く、人はまた神になり得るのである。即ち神人は同格である。日本民族はかうした尊嚴性をもつてゐるが故に、人間ながらも神業をなし得るのである。これは宗教であると同時に科學でもあつて、日本人の日常生活の中に此思想信仰が體現されてゐる。

神人同格の總念は、綜合科學である人類學の結論から觀て、最も進んだ人間觀、世界觀、宇宙觀である。かうした總念をもち得る日本民族は、たしかに精神生活において優秀であり、偉大であるといはねばならぬ。

(三) 四海同胞觀

日本民族の生活態度は前述の如く、家族國家を機構して、民族全體を神人的理想境に到達せしめようとするものであるから、これを民族主義或は國家主義であるともいへる。

しかし日本民族は、腹の大きな、心の廣い民族であつて、其民族主義、國家主義は、單に日本民族のため、日本國家のためにのみ作用するのではない。もちろん、日本を至上の位地に昂揚しようとする意欲はもつが、其上にさらに世界人類のためといふ大きな意欲も持たれてゐるのである。此民族的大意欲を最も簡勁に具體化したものが、即ち皇祖の聖勅にあらはれてゐる『八紘一宇』といふ言葉である。

以上の三つは、日本民族に優秀性を賦與したところの主要動因である。われわれは飽くまで

もこれらを護持し、培養し、醱酵せしめなくてはならぬ。

五、東になつて進まう

如上の記述によつて、日本民族の優秀性といふものが、どんなに深くわれわれの肉體の中精神の中に根を下してゐるかゞ理解されたであらう。

然らば其眼、其頭で、現在の世界情勢を凝視、批判せよ。われわれ日本民族の樹立しようとしてゐる東亞共榮圏の眞義は自ら把握されるだらう。青年よ、日本民族の行くべき處はきまつてゐるのだ。今更、何をかうろたへ、何をか思ひ煩はう。太平洋の波はわれわれの乘り切るのに最も適はしい高波だ。獨り太平洋のみではない。われわれの神業を妨げるものがあつたら、どこの山、どこの野、どこの川、どこの海へもゆかう。飽くまでも日本民族の優秀性を信じ、うぬぼれず、愼ましやかに、しかも力强く、ひた進みに進まう。

いよ〳〵戰爭となつて、昔から日本に勝つた國があるか。負けても勝つのは日本の戰爭だ、勝てぬ戰爭は金輪際ないのだ。傲慢、暴戾、われわれを異種視し、劣等視するものに實力を示すのは、今を措いて好機會がない。さあ東になつて進まう。

これが此小論文のむすびとして、初め心靜かに書き出した私の最後に提示する言葉——それは鬼魂のはたらきである。さほどにわれわれは今、亢奮すべき感激の絶頂に立たされてゐるのだ。

第十五章　八紘一宇

一、世界の中心日本

十數年前までは、日本民族自身で自分たちを卑下して、世界の隅に住んでゐる劣等な——劣等とまではいかずとも、餘り優秀でない民族のやうに思つてゐたものが多かつたが、滿洲事變以來、すつかり其頭を入れ替へて、日本民族は優秀な民族であり、日本群島は世界の眞中である、といふやうな考へを持つたものが少くないやうになつた。

一體、自分の住んでゐる土地を中心にして、世界を見るのが普通であるのに、これまではヨーロッパ風の學問をして、歐米人の考へ方を取り入れるに急であつたため、ヨーロッパやアメリカを世界の中心と考へるやうになり、したがつて日本を末梢と思ふやうになつてしまつたのである。

今一つ、イギリスを中心としたがる癖は、地球の經度を勘定するのに、グリニッチを起點として、東へ東經百八十度まで、西へ西經百八十度までを計へることが行はれ、日本本土は此計へ方では、東經百四十度の線を中心として太平洋上に横はつてゐることになるから起つたものであるが、グリニッチを零度としたのは便宜上のもので、それ以外にはなんらの根據もないのである。しかるに歐米に留學して歐米風の學問をしたものは、いつのまにか歐米崇拜に陷り、さも歐米が世界文化の中心ででもあるやうに思ふ。

しつかりした信念さへあれば、決して、こんな錯覺を起すわけはないが、明治以來、歐米文化の攝取に餘念がなかつたため、つい歐米にかぶれてしまつて、彼れを崇拜し、自らを卑下する氣風を馴致してしまつたのだ。

明治時代の人々は、屢〻攘夷論者の向不見を非難して、幕末には、世界の情勢がわからなかつたから、日本をえらいと考へ、歐米をつまらない夷共と考へたのであつて、事情が分つて見ると、事實は推考の反對だつたことに氣づき、あわてゝ開國論者になつたといふ風に說いた。

もちろん、物質文明は歐米に及ばないところがあつたが、精神文明においては、日本の方がむしろ優つてゐたと見るべきで、あの幕末に、無理矢理に開港を迫り、やゝもすれば大砲を放ちかねまじい態度をさへ示した諸外國が、印度や支那のやうに日本を侵し得なかつたのは、攘夷論に代表せられる日本民族の自尊心に、畏怖の念を懷いてゐた結果に外ならぬ。

高橋景保といへば、幕府の測量方を勤めてゐた人で、かのシーボルトに、日本地圖を貸した廉で投獄せられ、獄中で病死した後、死刑の宣告を受けたが、それとてもシーボルトの有つてゐる書物を手に入れたら、國家のために有益であると考へた結果やつたことで、かならずしも利益のための犯法ではなかつた。

其高橋が文化四年に製圖し、同七年に開板上梓した世界地圖は、本圖こそ普通のものであるが、別圖は日本京都を中心として世界を觀たもので、京都を零度として東に經度を計へ、三百六十度に至つて終つてゐる。これなどは、外國を中心とすることに慊らず、一つ日本を中心に製圖して見ようと思ひ、さてどこを起點とするかといふ段になつて、江戸、京都、二つの中いづれを選ぶべきかと煩悶した結果、遂に京都を起點とすることに決したものであらう。幕臣ならば江戸を起點としさうなものであるが、高橋は此地圖で京都を選んでゐる。もはや、こゝに勤王主義の思想のあらはれがあるのは、大に注意すべきことである。

二、皇祖の聖勅

此日本中心の考へは、實は肇國當初からあつたのであつて、私は神武天皇の聖勅の中にある『八紘一宇』の觀念は、やはり、さうした世界觀から來てゐるものと拜察する。

天皇が日向を立たれる前、諸王臣僚を集へて宣はれた御言は、日本國家の本質、日本民族の理想を啓示されたもので、それを要約して見ると『天孫降臨以來長い間西偏に居つて、正を養ひ、慶を積み、暉を重ねられた』といふことになる。此勅旨は、意味が深長で、猥りに、それを忖度し難いが、養正といふのは『眞』を追ふことであり、積慶といふのは『善』を求めることであり、重暉といふのは『美』に憧れることである。つまり、日本民族は、眞・善・美を追求することを、其生活理想とする旨を明かにされたものである。

また、橿原宮に即位せられようとした時の聖勅にも『上は天つ神の國を授けたまへる德に答へ、下は皇孫の正を養ひたまへる心を弘め奉つて、六合（クニスヂ）を兼ねて都を開き、八紘（アメノシタ）を掩ひて宇と爲さう』といふ意味の御言がある。こゝで問題になるのは、六合とはなんであり、八紘とはなんであるかといふことである。これに關する解釋は色々あるが、一番妥當と思はれるのは『六合を兼ねて都を開き』といふのは、國中を統一して都城を經營する意味であり、また『八紘を掩ひて宇と爲さう』といふのは、世界を包擁して一家とする意味である。

滿洲事變以後、特に國際聯盟脱退以後、日滿支を一つの協同體にしようとする叫びが高くなり、やがて協同體といふ語が、共榮圈といふ語に置き換へられるに及んで、一つの國家と他の國家とが協同して、一個の複合體をなすことが望ましいといふことが、一般國民の間に認識されるやうになつて、其概念をいひ表はすために、皇祖の勅語から『八紘一宇』といふ句を組み立てたのである。

しかるに、かういふと、日本が世界を征服して、一國家にするやうに誤解されるとでも思つたのか、或は聖勅の用語を更へるのは不敬だとでも思つたのか、近頃は『八紘爲宇』と改めてゐるものも少くない。しかし嚴密には『八紘を掩ひて一宇と爲さう』といふ義で、これには征服とか、侵略とかの意は毛頭も含まれてゐない。いふまでもなく『四海同胞』または『世界一家』の同義語で、諸國家或は諸民族の文化的結合を意味するものであり、今日のいはゆる共存共榮圈に相當してゐる。

今、我邦が現に從事しつゝある大東亞戰爭、建設に努力してゐる大東亞共榮圈は、共に行き詰つた舊秩序を崩壞せしめて、新秩序を發生せしめようとするものであるが、同時にそれは肇國以來の民族理想を完遂しようとするものでもあつて、極めて有意義であり、ぜひとも成し遂げなくてはならぬものである。

客歳十二月八日の對米英宣戰の大詔を拜して、われわれは聖旨の在る所を窺ふことが出來、畏くも詔書に宣うたところは、皇祖の聖勅にあらはれた『八紘一宇』の大精神に一致するものであることを知つた。此大精神こそは、即ち、大東亞戰爭および大東亞共榮圈を規定するところの統制的原動力であり、一切の企畫、行動は、それの發動したものであることをわれわれは銘記しなければならぬ。

三、共榮圈の理念

共榮圈といふ中には共存の義も含まれてゐるから、こまかく表現すれば共存共榮圈といはなければならない。すでに『共存』といふ以上は、其協同體に加はる諸國家の自主獨立を確認保障することは勿論であり、『共榮』といふ以上は、其平和繁榮を企圖實行することは勿論である。

然るに諸國家は地理的環境が異り、人種的位地が異り、文化的情勢が異り、經濟的狀態が異つてゐて、それらを劃一的、平等的に取扱ふことが出來ない筈である。それにもかゝはらず共榮圈では共存共榮を可能とする。いかにしてそれを可能ならしめるかといふことがなか〳〵むづかしい問題である。けれども『物は考へやう』の諺通り、各個人はそれ〴〵體質も性能も異つてゐるのに、まづ血屬といふ關係を辿つて、一個の家族に結合せられる。いくつもの家族が一個の氏族に結合せられる。そして異血屬の氏族がいくつも寄つて、一個の國家に結合せられる。これは血屬でもないものを血屬と見做して家族內に收容するところの準家族制、それをさらに大きくして異血屬の氏族を氏族と見做して氏族內に收容するところの準氏族制の原則に基づいて、それを、さらに一層大きな範圍に擴充したものである。かるがゆゑに、家族は即ち國家であるといふ理論が成り立つのである。此理論が成り立てば、いくつもの利害を異にし、感情を異にする國家が、或目的の爲めに協同するといふ理論が成り立つわけである。

極めて簡單な例を擧げれば、五人から成る家族があるとして、そこに五個の蜜柑がある場合、其中の一人は火の傍にゐて咽喉がひどく乾いてゐるから、其蜜柑を二つ食べたいのであるが、皆が一つづゝ食べることにすれば自分も一つしか食べることが出來ない。まだ頑是ない子供が『どうしても坊やはもう半分食べたい』と云ひ出したとすると、其母親は半分だけ自分で食べて、殘る半分を坊やに食べさせるといふやうな事もある。母親が自分の食料を悅んで坊やに與へるやうな尊い精神を國民全體が有てば、人口が一億あらうが、二億あらうが、それは完全に國家といふ一協同體をなし得る。我日本國家は正にかうした家族國家の代表的のものである。そこで此原理を諸國家から成る協同體、即ち共榮圈に應用すれば、共存共榮のために諸民族が

互助、輯讓することが出來るといふ新秩序に到達するのである。

舊秩序に在つては各國がそれ〴〵自國の繁榮を希ひ、他の國を犧牲に供しても、自分の國だけは利益を得ようとした。かうした利己主義は新秩序が絶對に否認するところで、己をも利し、他をも利しようとする互助主義、いはゞ相利共棲主義こそ、新秩序に依る共榮圈の原則でなければならぬ。それが即ち皇祖の聖勅にある『八紘一宇』の眞精神であるのだ。

四、自己完成の必要

かうした點から考へると、人はたゞ他のために働き、一民族は他民族のために繁榮を願べばそれでよきか。即ち自己は完成しなくてもよいか、また、國民は國民全體を進めることに專念し、國民の各個を進めることを考へなくてもよいかといふ問題が起つて來る。

しかし、さう簡單に考へてしまつては困る。人類の社會は進んで止まないものである。それはそれの屬する宇宙それ自身が、進んで止まないものであるからである。たとへば國民學校生徒を例に引くと、十人が十人悉く八の得點であるとすれば、八さへ得ればそれで十人並であるから、其上努力する必要がないやうにも思はれる。けれども八は飽くまでも八であつて、皆が八で滿足すれば八以上には進むことが出來ない。然るに一人の生徒がうんと發憤して、努力精進を續け、錬成に錬成をかさねて九に達したとすれば、彼れは一だけ他を抜いたことになる。他を抜くことはたしかに劃一主義を破るものであるが、それでも構はぬかといふに、そこが心の持ち方、目的の置き所一つで、善ともなり、惡ともなる。一だけ他より進むのは、他をすべて同じ水準九に引き上げることによつて、彼等を幸福にしようとする場合に在つては許されるが、自分の利益を得るために他を犧牲に供するがごときこと、たとへば自分だけは一進んで何らかの利益を得たから、他は元のまゝ八であるやうにして、其利益を獨占しようとするが如きことは、到底新秩序においては許されないのである。

五、相利共棲的指導

自分の利益を他の利益に一致せしめる、他の利益に自分も均霑するといふのが共榮圏の原則であるが、しからば、諸國家の共同利益といふこと、また其反對の場合を何者が決定するかといふことが問題である。此場合に在つては指導者が必要で、たとへば家族に老練、親切、公平な家族長があつて家族を指導するやうに、諸國家の中に老練、親切、公平な指導國家があつて諸國家を指導することが必要である。

此指導國は被指導國を超えて、優秀な性能をもつたものでなければならぬが、さうした優秀性能を國家に與ふるものは、其國家を構成するところの民族であり、さうした優秀性能を民族に與ふるものは、其民族を構成するところの各家族、各個人であるから、所詮は『個性の完成』といふことが基本的重要性を帶んで來るのである。八しか有たない諸國家は、到底九を有つた國家の指導を免れないから、各國家もまた九を有たうと努力しなければならない。それでは舊體制と同じく、生存競爭が絶えないではないかといふものがあるだらうが、舊體制にあつては自己の生存のために競爭しようとしたに反し、新秩序においては全體の生存のために競爭しようとするのであるから、結局は生存のための協同と同一義になるわけである。

こゝでちよつと注意しなければならぬことは、新秩序は共存共榮を目的とする、即ち圏內國家の自主獨立と平和繁榮とを目的とするが、これは無抵抗といふ意義ではない。無抵抗どころか、自己の目的達成を妨げ、理想完遂を害するものに向つては、むしろ、積極的に抗爭してゆく熱意と純情とを有するものでなくてはならぬのである。

在來の抗爭は個人に在つては私慾のためであつた。國家に在つては領土慾のためであつた。それらは共に純粹利己的であつて、飽くまでも新秩序の立場から否認せられる。新秩序においては個人の私慾、國家の領土慾といふやうな純粹利己主義を排し、利他的であることを要請するが、同時に純粹利他的であることもまた排せられる。しからば、何を要請するかといふに、利己・利他主義、即ち自己を利すると共に他をも利するといふ相互利益を瞰的とするものである。一番簡單な例は、地的寰界の結果である物資の過不足のごとき、過はこれを自己の生存に必要なだけ消費し、其餘剩を悉く他の不足に廻すといふ風にして、自他が共に幸福な狀態を保ち得るやうな相互利益を瞰的とするものである。

六、統制的原動力

如上の相互利益は、舊來の『互惠』といはれたものに似てゐることを指摘するものがあるかも知れないが、互惠は多くの場合優者が劣者に對して恩惠を施すことである。互惠よりはむしろ互助の概念に近いが、それも強者對弱者の場合を連想することが多いとすれば、生物學的用語を借りて、相利共棲的といふがよからうと思ふ。

自己を抑へて他に利益を與へることは、見す〳〵自分の得分を他人に提供することになるから、慾望の充足を生命とする人類、民族、個人に、そんなことが出來よう筈がないといふものがあるかも知れない。

そこで共榮圏においては指導國の指導に統制力を與へ、それの發動によつて一切の行動を規定する事にする。それでは在來の屬領、保護國、植民地など〻同じではないかといふ者があるかも知れないが、在來のそれらは侵略主義、搾取主義——引括めていへば片務共棲主義であつたに反し、新秩序における共榮圏は協同主義、互助主義——引括めて云へば相利共棲主義である。兩者は表面似たところがあるが、裏面は丸で異つてゐる。鬼と佛との差である。

第十六章　古代文化に於ける外來文化の影響

一、固有文化の意義

私に與へられた題目は、古代文化に於ける外來文化の影響如何といふことである。こゝで古代といふのは、先史時代から原史時代へかけての漠然たる期間と假りに定めることが出來る。さうした時代の文化は、多くの人々に固有文化と解せられてゐるやうであるが、それは日本人を單種型と見做し、日本文化を單系型と見做せばこそ考へつかれることであつて、反對に多種型、複系型と見做す場合には、固有文化を單數では呼べない性質のものだと考へなくては辻褄が合はなくなるであらう。

私一己の考へでは、原史時代に於ける多系的文化成素を打して一丸としたものを、日本固有文化と見做せば一番都合がよい。しかし、普通に考へられるやうに『古事記』に現はれてゐる文化的姿相を日本固有文化と見做すにしても、それに嚴密な科學的檢討を加へたならば、それが一系の起源を有つてゐるものでなく、幾系かの要素によつて構成せられてゐるといふことを認めずには居られないだらう。さうした多系的要素を有つたものを固有文化と見做して置くことは、文獻學的には必らずしも不都合ではなからうけれども、考古學的、言語學的、神話學的、社會學的、工藝學的、等々、文化人類學の諸側面から考察して來ると、固有文化をいくつかの起源に分割しなくては收りがつかないことに氣づくだらう。

しかしながら、多系的要素を認めるにしても、諸要素が等價的、等數的、等量的であるか否かといふことは問題である。多くの場合、數量や價値の等しいことはあり得ないとすれば、其中心になるもの、指導的地位に立つものがあつたと考へなくてはならぬ。そして、さうした中心的なもの、指導的なものは、當然人種的要素と一致すべきであるから、日本人の體質人類學的研究さへ進めば、此問題は解決の曙光を見る事が出來るのであるが、化石學的側面、測定學的側面しか研究されてゐない今日に於いては、其諸要素の數量的、質價的地位を判斷すること

が容易でない。從つて固有文化を構成する各要素の交聯といふものが全くわからないわけである。

乏しい資料に過ぎないけれども、私達は原日本人ともいふべき中心的人種要素をツングース種であると假定するから、中心的文化要素をもやはりツングース系であると考へなくてはならぬと信じてゐる。かうした考へ方を、化石學的資料に據つて立言する人々は、恐らく否定するであらうが、石器時代人からアイヌと日本人とが分岐したといふやうな考へ方は、人種學的に觀ても、生物學的に觀ても首肯せられることでないのみならず、謂ふところの『石器時代人』の人種學的系統が一向明らかにされてゐないから、其文化的系統もまた闡明されることにはならぬのである。かうしたわけで、外來文化に影響を與へられたところの古代文化——固有文化といふものゝ性格がはつきりしなければ、それを感化したところの外來文化が何々かといふことも亦はつきりしないわけである。從つて私に與へられた問題は、嚴正な科學的意義に於いては、解決のつかぬものだといふことがいへるである。そこで私は便宜上、私が『固有文化』と呼んでゐる原史時代の複合文化を、いくつかの要素に分析する工作に從事し、其間に中心的、指導的位地を占めてゐたツングース系文化の性格を明らかにしたいと思ふ。

二、文化的諸要素の分析

『古事記』や『日本書紀』に現はれてゐる古代文化は、常識的に考へて見ても、一つの原型的、中心的要素へ、いくつかの異型的、末梢的要素が加はつて、漸次的に融和を遂げたといふことが看取出來るであらう。誰れにも氣づくのは蝦夷的要素、熊襲的要素、隼人的要素、小人的要素があり、それらは古く原日本的要素に吸收せられて、一つの日本文化に錬成されようとしてゐた時、韓的要素、支那的要素が新らしく入つて來て、渾然たる一複合體を作り上げるに至つたものが、ヤマト文化と呼ばれるものであるといふことである。

考古學的證據の示す限りに於いては、蝦夷的要素と原日本的要素とは、先史時代から此群島に存在して、共に石器時代的文化相を有つてゐた。前者は繩文土器、打製及び磨製石器、母神像、漁獵型生活を其徴表とし、後者は彌生式土器、磨製石器、漁獵型生活を其徴表とするから、

共に先農段階に於ける原始生活を營爲してゐたといはなければならぬ。これら二系の文化遺物が同一處に發見せられる場合に於いては、大體、繩文型が下層、彌生型が上層を占めてゐるから、層位的に繩文文化が彌生文化に先行してゐたことは明らかである。又若し近くはあるが異つた地域に存在してゐる場合に於いては、たとへば溪谷ならば繩文文化は其北側、彌生文化は其南側を占めて居り、高低で云へば高所に繩文、低所に彌生が據つたことは疑ふべからざる事實である。

繩文型遺物は殆ど全國的に發見せられるけれども、大まかに云へば南よりも北の方が濃厚であるから、古代意識に於ける『アヅマ』即ち東方が其分布地域であつたことは分る。之に反して彌生型遺物は北よりも南の方が頻數に富んでゐるから、ヤマトと其近周を中心として西方一帶を其分布地域と見做すことが出來るのである。繩文型文化の進行方位は不明であるが、彌生型文化のそれは明瞭で、西方から追々東方に進んだことに疑ひがない。此事は神話學的にも亦た證明出來る。

彌生式土器は原始形から完好形へ次第に技術的進歩を見せてゐるが、其祖型は大陸の遺物に類似をもつといふ理由から、これを大陸的系統のものだと一般には解せられてゐる。それを南方系統のものとする人もあるにはあるが、極めて少數である。然るに在來、繩文式土器は其姉妹形を近周に發見しないといふ理由から、それを系統不明のものとする人が多かつた。尤も初めにはそれを北方、たとへばエスキモー族などに結びつけようとする傾向もあつたが、次第にそれを孤立したもの、自發したものと考へる動向が強くなつた。しかし、繩文土器は大陸にも存在してゐるのであつて、遠い昔にそれが日本群島に輸入されたが、後續がなかつた爲め孤立してゐるやうに見えるだけで、實際的には兩大陸につながつてゐたものと私達は考へる。

以上の二つは古代文化の重要な成素であるが、其外に木盾や木梓に代表される隼人文化が南西隅に分布してゐたといふことが考古學的には擲石で、工藝學的にはタフサギで、神話學的には海幸山幸交換説話で立證せられる。

更に入墨や潜水や鉢卷や貫頭衣や銅鐸や稻作りやで、痕づけられるところの印度支那系文化が、古代文化を構成する重要な一要素であつたことも想像せられる。如上の文化はいはばコレクチーヴなもので、それらを一々の要素に分けてしまつては意義をなさない。然るに我邦には

進歩型文化は支那から輸入せられたといふ偏見が濃厚にはたらいてゐる爲め、たとへば銅鐸の如きを朝鮮發見の扁鐘に關係させて、それを支那系のものと見ようとする人がないではない。稻作の如きも隼人が齎らしたと考へられぬこともないが、倭人が夙に其耕種に從事してゐたことから考へると、それを倭人系のものと考へなくてはならぬ。私は倭人をクマソと同一視し、クマソを印度支那族に關係させようと思ふが故に、隼人をクマソから切り離して、臺灣の高砂族など〻同系のインドネシヤ族に關係せしめようと思ふものである。

本州中部以西、四國、及び九州に於いて、多數の銅劍、銅鉾、銅鏡が發見せられるが、これらの青銅製品は朝鮮半島に於いても發見せられて、それが半島を經由して日本に入つた足取がわかり、支那系統のものであるといふことも明らかである。原史時代に於いて支那文化が漢族と共に我邦に入り來り、我邦の文化に影響を與へたことは誰れしも認めてゐるところである。

然るに朝鮮半島からは銅鐸が發見せられてゐない。尤も慶尙北道慶州郡から一個の類銅鐸が發見されたことは事實だが、それは銅鐸よりは鐘鉦につながる性質のものである。若し銅鐸が支那系のものならば、鏡、劍、鉾と共に半島を經由して然るべき筈であるが、半島からそれが出土しないのは、全く印度支那から直接に日本に入つたことを證明するものだといひ得る。銅鐸の發見地は一四七箇所に及び、其分布範圍は可也に廣いけれども、大體、畿內を中心として其東西に限られてゐる。四國について云へば、阿波と土佐とが其主たる分布地であるが、土佐について見ると、銅鐸は物部川以東に限られ、以西では銅鉾が出土してゐる。東は物部氏の勢力範圍であり、西は秦氏の勢力範圍であるといふことを考へれば、銅鐸と物部との間、銅鉾と秦氏との間に交聯があるといふことが、土佐に關する限りでは云ひ得るのである。たゞ一つ私達に取つて都合の悪いのは、印度支那的文化の中心地と思はれる九州に於いて、銅鐸が一つも發見せられてゐないといふことである。

銅鐸は多くの學者によつて日本で製せられたものと信ぜられてゐるが、それに表はされてゐる文樣から見れば、農耕型生活、葦舟型水上運搬具、梯子附高床の家屋、水鳥などによつて、印度支那的香氣を嗅ぎわけることが出來るのみならず、銅錫合金率が南方發見の銅鼓と類似して居り、日本發見の銅鐸が Cu 82 : Sn 18 であるのに、銅鼓は Cu 81 : Sn 19 で、兩者が甚しき類似を有つてゐるにも拘らず、日本の青銅には 97 : 3 といふやうな銅錫合金率があつて、

銅鐸の日本製であることに懐疑的であらしめる。

これらの金屬器が原日本文化――石器時代的漁獵型生活を、いふところの『固有文化』――金屬時代的農耕型生活に昂揚したことはいふまでもないが、しかし原日本人を優勝せしめて、ツングース系文化に指導的位地を賦與するに至つたのは、何といつても漢北に起つた鐵文化が輸入されたことに基づくといはなければならぬ。

原史時代から歴史時代早期へかけて、韓半島から日本の中國地方に亘る地域に於いて、砂鐵製錬が行はれ、鋭利なる直刀、刀子を始め、他の利器、農具類が鍛成されたことが、原日本を昂揚する動力になつた。支那では尚ほ銅製利器の用ひられてゐる間に、日本では鐵器が用ひられた。そして其精錬及び鍛冶の技術は加速度的に進んで、岩鐵を精錬し、鋼を鍛成するまでに至つた。日本内地の各部から多くの鑛滓が發掘されるが、それは砂鐵にはないものであるし、砂鐵に含まれてゐるところのチタニゥムがなくて、鑛滓に含まれてゐるマンガンが含有されてゐることが分析の結果知られたので、日本の製鐵事業が存外早く進歩してゐたことを承認せずには居れなくなつたのである。古墳の中には存外新らしいものもあるが、多くは原史時代の文化相を示してゐるのに、それから出土した刀子の内部構造を檢鏡して見ると、其縱斷面に著しきフロウ・ラインのあることを認める。これは全く日本特有の折返式鍛冶によつて現はれるものであり、我邦に於いて製鐵事業が特異の發達を遂げたことを私達に語つてゐる。

以上の外、神話學的には、若干の小人文化の要素を認めるけれども、それの動力は甚だ微弱で、固有文化の構成にあづかるほどの資格を有たなかつたとも考へられる。

三、異系文化の採用と改善

如上の諸要素を打つて一丸としたものが『古事記』や『日本書紀』に現はれてゐる固有日本文化なのである。それの構成には可也長い年月を費したであらうが、其實年代はちよつとやはつとでは還元が出來ない。古く見積れば上限を紀元前二旬世紀まで溯らせることが出來よう。新らしく見積つても紀元前一旬世紀と推定することは不可能でない。

歴史時代以後、第二次的な大陸文化の輸入が行はれた。それが記紀に現はれてゐる朝鮮經由

の支那文化であつて、機織、農耕、學問、藝術、法制、宗教、等々、多側的、多角的に新文化の攝取を行つた。其攝取、吸收の速さは、殆どたとへるに例がないほどの成績を擧げしめた。さうした成績を擧げるには、無論古代日本人の努力にもよつたが、一つには其天禀にもよつたのである。日本人の現在有つてゐる民族性格の中で、最も著しい適應性、可動性、包容性といふものが、今と同じく昔も盛んにはたらいて、見事な採用と改善とを行つたのであつた。

飛鳥寧樂時代に於ける支那文化消化の實例に徵しても、安土桃山時代に於ける南歐文化攝取の實例に徵しても、東京時代早期に於ける歐米文化輸入の實例に徵しても、略〻見當がつくやうに、日本民族は其豐かな包容性を働かせて何物をも取り入れ、取り入れると同時に適應性を働かせてそれを改善し、ぴつたりと自分達の身に合つたものに作りかへてしまふのである。作りかへには勿論若干の年月はかゝるが、しかし、それを他國民に比べると頗る速いのである。

異系的文化の取り入れを、文化人類學者は『借用』或は『採取』と呼ぶ。所詮、文化觸接といふ影響に外ならない。文化は決して孤立してゐるものではなく、また離反してゐるものでもない。それは觸接によつて繼續し、世界を帶し、古今を結び、彼我を融和し、自他を互助して己まぬものである。

私達日本民族の三千年にわたる文化的展開過程を顧みる時、これから後もやはり同一動向、同一傾向があらうことを否定するわけには行かない。しかしながら、外來文化を出來るだけ攝取し、吸收し、いつの間にかそれをよりよい物に仕上げていつた改善力こそは、やがて創造力ともなるのである。嚴密な意義に於いては『創造』といふことはあり得ない。それは『改新』であり、『再結合』である。しかも、今、世界はひとり日本のみならず、舊體制の崩壞に直面して立ち、改新や再結合では滿足せず、全く新らしい『創造』に向つて待望してゐる。

それの可能、不可能は、ひとり宇宙の秘密を、少くとも地球の秘密を知つてゐる科學のみが判斷し得る。文化の科學的研究——即ち眞の史學を發達せしめることによつてのみ、民族の文化といふものは初めて闡明せられるのであるから、それを沮害するやうな一切の行動は、科學時代の今日に於いて極力排除せられねばならぬ。膨脹、擴充の途上にある日本民族に於いては尙更のことだ。

第十七章　船型進化と海外發展との交聯

一、船型と國勢との相互關係

人類の生活は常に環境に支配せられる。原始生活に於いては環境は絶對的に支配力を有つて居り、それを超えて生活は不可能であるが、文化の進展に伴うて生活力が強化すると、環境の力が弱くなるといふわけではないが、動〻もすれば生活が環境を制馭する場合が現はれる。若し此現象が見られなかつたら、人類文化の發達といふものはなく、今日も尙ほわれわれは原人のまゝの生活を營爲して居らなければならなかつたであらう。

原始時代に於ける人類が利用したところの環境は、地理的にも物理的にも化學的にも、限局された小範圍に止まつたが、經驗は知識を產み、知識は推論を產み、推論は發見發明を產んで、人類の生活を次第に豐化し、かくして漸次文化時代を迎へるに至つたものである。されば文化時代に於ける人類が利用したところの環境は、地理的には距離の大きな範圍にまで、物理的には地下の深き埋藏物の處理にまで、化學的には多樣の物質の性能の變化にまで、次第に其數・量・質を增加改變して、原始時代のそれとは比較にならぬほどの價値を發揮した。そして、それは偏へに文化の進步に由るのである。

文化の進步は技術によつて代表せられるが、技術はまた其中の一つ何かによつて代表せられる。嶋嶼、或は海岸の住民の文化を代表するのに適はしい技術は造船術である。造船術の進むにつれて船舶の型式は色々と變るが、船型の變化は常に國勢の强弱と一致するから、船型の變化さへわかれば國勢の消長の理もわかり、國勢の消長さへわかれば船型の變化の理もわかる筈である。

私は今日本民族が海外に發展した歷史を、船舶との相互關係の中に見出したいと思ふが、其最も容易い方法は、先づ船型の進化的過程を見出し、然る後に、其各段階に於ける船舶と民族活動とを比較して見ることである。大體に於いて船舶の發達段階は、先史時代、古代、中代、

近代、現代の五時代に分けられる。今、それらについて前掲の相互關係を窺つて見ることにする。

二、先史時代——刳舟

先史時代は一に『石器時代』ともいはれ、記錄歷史の初まる前のことであるが、其時間時代は大體紀元前二〇〇〇年ぐらゐまで溯れるやうである。かうした古い時代には水上運搬具も一般に幼稚で、種類も少く、性能も取るに足らぬものゝやうに思はれるだらうが、事實は之に反して、種類が頗る多く、性能もまた相當に立派だつたと判斷しなければならぬ證據が多々あるのである。此事實は現にさういふところの私にも驚異であるぐらゐだから、讀者には一層の驚異であるべき筈だ。

先づ注目すべきは近代日本人を構成してゐる要素は多種的であること、從つて其文化起源も多系的であること、更に人や文化がそんなに此群島に押し寄せて來たのは、そこが昔から甚だ吸引的であつたことで、これらの三つを理解しなければ、日本人の優秀さも、日本文化の性格も、日本國家の本質も理解出來ないのである。

(1) 日本人の成立は大體紀元前後に完了したが、其人種的要素としては舊アイヌ、ツングース、印度支那族、インドネシヤ族、漢族の五つ、それに蒙古族と若干のネグリトーの血液も混つてゐると思はれる。日本は島國で、これらの諸人種が渡來するのには、船舶が絶對的に必要であるから、五種乃至七種の船型が日本に入つたことは誰れにも推想せられるのである。

(2) 日本文化は如上の諸人種に伴つたところの諸文化から成り立つたものであるが、今それらを前述の船舶に代表させることにすれば、先史時代から原史時代へかけての船舶型式も知られることになつて便宜である。表日本、主として關東地方の貝塚乃至石器時代遺跡から發見せられた水上運搬具は、大方いふところの『刳舟』であり、關西地方、特に大阪附近から出土した先・原史時代の水上運搬具も亦た刳舟であるから、先原史時代の船舶は刳舟が代表的であつたといふことが出來る。關東の刳舟は、考古學者の分類に從へば、ローベンハウゼン型に近いものであるが、動くもすれば前部に三角形の刳殘しのある點が異つてゐる。これらが大體海

洋型で、舊アイヌの遺物であることは注目に値する。之に反して、裏日本に殘存してゐる刳舟を見ると、大方メーリンゲン型で、どちらかといふと湖沼用であつたと思はれる。此型はまだ遺物が多く發見されてゐないが、仁科三湖、野尻湖、山中湖、八郎潟などの殘物に徵せられる型式で、ツングース系のものであることは瞠目に値する。大阪發見の刳舟は大部分楠材から造られ、中央部に於いて二材が結合されてゐる。それだから刳舟から構造船への中間過程、いはゆる『縫合船』の段階に近いものともいへる。これは口碑史で『天磐樟樟船』といはれるもので、原史時代から歴史時代早期までも引續き用ひられてゐる。系統は尙ほ不明であるが、インドネシヤ系、又は印度支那系に屬するであらう。此外、無間籠（マナシカタマ）は竹籠舟で、印度支那系であり、葦舟（アレブネ）は蘆葦の莖葉を絡めて中央に凹處を造つたもので、インドネシヤ系であり、埴土舟（ハニブネ）は粘土を燒いて作つたもので、印度系に屬してゐる。如上の五系統の船型は同時に日本文化の組成要素をも示唆するのであつて、如何に我邦の文化が淵源の遠い、系統の複雜なものであるかをわかるのである。

以上を歴史的事實に復原すると、日本へは先原史時代に、北方大陸から、滿鮮半島から、印度支那（印度を含む）から、インドネシヤから、それ〴〵の水上運搬具によつて、それ〴〵の民衆が渡來したといふ事になる。在來學者の說では、南方から日本への北上が强調されたけれども、日本から南方への南下は、一部の沖繩學徒を除く外、あまり唱道せられなかつた。然るに最近インドネシヤの考古學の進捗に伴つて、セレベス島の舊石器時代洞穴から發見せられた有莖石鏃は、フィリッピン群島を通して、日本の新石器時代に多い有莖石鏃の影響を受けたものである事が闡明せられ、恐らく日本民衆は先史時代から南方に航海したであらうことをわれわれに示唆してゐる。日本の先史時代民衆は、實に廣濶なる觸接面――それは大體今日の『大東亞共榮圈』と目されてゐる地域――を有つてゐたのであつて、今日の燦爛たる日本民族の活動が、實は忘れられた先史時代のそれを再現したものであることに氣づかずには居られない。

（3）叙上の日本民族の成立、日本文化の構成を容易ならしめた動力として、われわれは多くの地理的動因、たとへば季節風だの、北赤道海流だの、リマン海流だのを擧げることが出來るけれど、もつと〳〵大きな、力强い動因は、日本群島の有つてゐた吸引力であらうと思はれる。此吸引力は複合的なもので、單に氣候がよいとか、水蒸氣が多いとか、風光が明媚だとか、

山海の産物が豊かだとかいふだけでなく、そこに住んでゐた人群の生活振りが主成素となり、他は副成素となつて出來上つてゐた。かうした吸引力は、それだから、古代支那人に『東方の君子國』、或は『蓬萊島』、或は『扶桑國』など、道德的・呪敎的稱呼を以て呼ばれてゐたのである。

三、古代――新羅、高麗、百濟

歷史時代早期の記錄から見ると、日本と朝鮮・滿洲地域との交通は頻繁で、そこは我邦の『屯倉』たる性格を有つてゐた。さうした日本の國勢は、先史時代以來引續き築き上げられたものであるが、其間に我邦の船舶は、新羅型、高麗型、及び百濟型の三主要型式を有つに至つた。

新羅型といふのは神話の『熊野諸手船』に代表せられ、また裏日本地域に殘存するメーリンゲン型刳舟に代表せられる型式で、湖沼や河川の航行には適するが、海洋の航行には都合のよくない直線型のものであつた。それだから、いつの間にか曲線型の、浪を切ることの出來る百濟型船舶が重用せられた。新羅型の名殘は伊勢の大湊を中心として、伊勢灣の各地で造られた『伊勢船』或は『箱作り』といはれた型式であり、百濟型は主として安藝の倉橋島を中心とした諸造船地で造られたが、其名殘をわれわれは後の『大和船』に求めることが出來ると信じてゐる。此型には支那の造船技術が若干入つてゐると思はれる。高麗型ははつきり分らないが、それは文獻的に闡明せられないといふだけで、テクノロジイの上からは朝鮮大同江に殘つてゐる『水上船』或は『松葉船』と呼ばれるものが其名殘だと考へられる。此型は支那の福州、印度のマドラスなどに其姉妹型を見出すものであつて、エジプト・印度的手法が傳播したものに相違ない。

古代晩期に於いて、朝鮮半島は我邦の『屯倉』たる位地を喪つたが、それは全く白村江の水戰に於いて我軍が唐軍に擊破された爲めに起つた現象である。そしてさうした悲しき現象は、主として新羅型船舶を用ひたから惹起したのであるから、勢ひ船型の改善が工夫されなければならなかつた。百濟型船舶の採用は其結果であるが、此型には前述の如く漢族の造船技術が採

り入れられ、弧線を帶んだことと厚材を用ひたことゝが、其主たる特徴であつたと思はれる。當時の海外交通は概ね唐と渤海とに限られ、主として支那行きは支那船に依り、渤海行きは日本船を用ひた。平安時代晩期までに日本の對外威力の漸衰したのは、全く造船技術が創造力を失つてしまつたことゝ一致してゐる。

四、中代——大和型船の完成

古代晩期から中代早期へかけて、我邦は殆ど封鎖的位地を保ち、海外との交通は稀になつてしまつたが、其代り中期以後には政治經濟が次第に國內的發達を遂げ、それに伴つて造船技術も追々特殊化して、百濟型へ新羅型を加へたところの新形式が醱酵した。此新形式は鎌倉時代早期から晩期までに漸次的發達を遂げ、元寇の際には既に今日の『大和型』船と大差ないほどの完好形を獲得した。

若しわれわれが克明に『源平盛衰記』や『平家物語』を繙いたならば、大和型船の中世早期に於ける樣態を知り、『蒙古襲來繪詞』を開いたならば、それの晩期に於ける樣態を知り得るであらう。試みに『源平盛衰記』の壇浦海戰の條を見ると、『平家は船を二三重に構へたり。唐船には軍將の乘りたる體にて軍兵を乘せたり。兵船には大臣殿已下然るべき人々乘られたり』とあるし、義經の八萬に渡つた條を見ると、『五艘の船に馬乘せ、兵粮米積む。それに從ふ下部步走なんど乘りければ、一百餘騎には過ぎず』とあるから、大體、どんな船を用ひたかといふ見當はつく。

壇浦海戰では、平軍は普通の日本船と唐船とを用ひ、二重、三重に船を構へて圓陣を造つたらしい。日本船は赤間宮に秘藏せられてゐる屏風——それは少し時代の下つたものだが——に依ると、大體、元寇時代のものと大差ない。八萬浦へ義經の渡つた條で、船一隻は平均二十人しか收容しないが、其代り馬と兵粮とを積んだとあるから、おほよそ其積載量がいくらあつたかといふ推量はつく。船の細部構造は『蒙古襲來繪詞』を見ればはつきりわかる通り、舳艫共に方形で、舷側には艣を漕ぐ爲め水手の乘る板二枚、乃至三枚を据ゑる爲めに張出框があり、艫には屋形があり、舵は今日のものと同じ遊離舵であり、艣のおし方は蒙古船の方が今日の日

本のそれに似て居り、日本の水夫のそれは前方に背を向け、艫の方を向いて押してゐる。此おし方から見ると、其艪は今日のものと異ひ、萬葉集にあらはれてゐる『眞楫繁貫』くといふカヂの一種であつたと思はれる。但し小船は、今日のと同じ艪を操つてゐるから、艪には二色あつたことが推知せられる。

此時代の中頃から末頃まで、盛んに朝鮮、支那に向つた船は『八幡大菩薩』と書いた旗を押し立てゝゐたので、支那人はそれを『八幡船』と呼んだ。八幡船の構造は詳しくわかつてゐないが、此時代の初めに室町將軍が明へ仕向けた遣明船と略〻同じもの、或は少し小さい型であつたらうと思はれる。遣明船は大抵千石内外で、それより大きいものは實際に役立たなかつたといはれる。船名の下に『丸』をつけたのも此頃が初めで、それからずつと後々まで踏襲されたから、其造船型式も『大和型』であつたに相違ない。かうして中代晩期には、大和型船舶はもはや立派に完成して、江戸時代のものと殆んど全く大差のないものになつてゐたと考へて差支ない。

五、近代——ミスツイス造り

近代早期は國史の中最も花やかな海外發展時代で、文祿元年、豐臣秀吉は貿易の爲め海外に渡航する船舶に御朱印狀を下附したが、初め御朱印を下附したものが九艘あつたから、世間ではそれらを『九艘船』と呼んだ。九艘船の渡航先きは、ルゾン、マカオ、安南、東京、チャムパ、カムボヂヤ、シャム、パタニイの八箇所で、御朱印狀の下附を受けたものは、長崎で末次平藏(二艘)、船本彌平次、荒木宗太郎、絲屋隨右衞門の四人、堺で伊豫屋長千、京都で茶屋四郎次郎、角倉與一、伏見屋の三人、都合八人(九艘)であつた。これらは皆な當時の代表的貿易家で、其所有船舶は大形であつた。

德川家康に政權が移つてからも、御朱印の制度は依然として殘り、慶長九年に御朱印狀を交附されたものは二十九人で、其船の仕向先は安南、占城、呂宋、信州、暹羅、東埔塞、東京、西洋、太泥(パタニ)、順化、迦知安であつた。寛永元年までに交附した御朱印の總數は百七十九通で、

其仕向地は十八箇國に及んだといふのを見ても、當時我邦の南方貿易が如何に盛んであつたかといふことはわかる。

御朱印船の構造は、それを描いた繪馬が、京都の清水寺其他に殘つてゐるので、大略それを知る事が出來る。それに依ると御朱印船は持主によつて型式を異にし、一定した型式といふものがなかつたらしい。茶屋船は純日本式で、角倉船は支那式の分子が多く、末次船は全くヨーロッパ式であつた。『華夷通商考』の記載に依ると、船の長さは十五間乃至二十間あり、大形のものは荷物二百萬斤、中形は百五、六十萬斤、小形は百二、三十萬斤を載せることが出來た。角倉船について云へば、長さ二十間、幅九間、人數は三百八十人を搭載する力を有つて居り、茶屋船は長さ二十五間、廣さ四間半、人數は三百餘人を搭載し得たとある。

當時の人々は、これらの御朱印船を『ミスツイス造り』と呼んだ。此名稱は多分地中海に行はれたミスチコ型から由來したものであらう。ミスチコ型はジーベック型とフェラッカ型との中間型式で、三角帆と四角帆とを混用したが、御朱印船もまたさうであつた。即ち本帆、彌帆は四角帆で、遣出の帆は三角帆であつた。これらの帆の颱げ下しには『黑ん坊』を使用したが、其多くはジャヴ人であつたといはれる。又末吉船の圖を見ると、甲板の上では本を讀んでゐるもの、三味線をひいてゐるもの、雙六を弄んでゐるものなどがあり、乘員がいづれも航海を樂しみ、大洋の波を蹴つて異域に赴くのを、隣家でも訪ねるやうな氣分でゐたことが知れる。それだからこそ、江戸時代早期の海運は著しき發達を遂げて、東印度から印度に亘る廣い地域に我商船の姿を見ない處はなく、商船の行く處には日本町が建ち並び、そこには多數の兩刀を佩びた紳商が漫歩してゐたのであつた。マニラやアユチヤやヒュエやジャカトラの日本町は、わけても盛んで、中には八千乃至三千の日本人が居留してゐるところもあつたといふ。かうした日本貿易の發展ぶりは、一に『ミスツイス造り』といふ御朱印船の一船型によつて象徴せられるのであつた。

六、現代――ヨーロッパ型艦船

叙上の盛大な御朱印船は、寛永以後、俄然として西南洋から其姿を消した。それは日本が支

那と暹羅と和蘭とを除く外、外國との交通は一切之を禁じたのみならず、五百石以上の船舶を造ることをすら禁じた結果で、折角伸びかけた我國力は之が爲めに萎縮し、ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリスは心の儘にアジヤを横行して、そこを植民地化し、屬領化するに至つた。其時はちやうど我造船術が衰へ、日本海岸でも、太平洋岸でも、小船の外は見ることが出來なくなつた時であつた。

然るに江戸時代晩期に、ロシヤが北から、イギリスが南から、仔りに我邊海を窺窺し、嘉永六年にはアメリカのペリイが浦賀を訪問して開國を迫つたので、幕府は一面海防に意を用ひ、他面大船製造の禁を解き、翌年七月には日章旗を我邦の物船印と定めるなど、漸を逐うて艦船の建造を發達せしめる計畫を立つるに至つた。

かくて文久二年には砲艦二十隻の建造を計畫し、先づ其一隻の試造に着手したが、間もなく江戸幕府瓦解して、明治政府起り、我海軍は初めて愈〻確立したが、造艦工事は或は外人の設計、指導を受け、或は海外に注文して購入の手續を取るなどしてゐた。ところが明治二十三年から軍艦の設計及び工事監督を邦人の手に收め、其後更に建造をも內地に於いて施行することになり、先づ『秋津洲』級を建造し、次ぎに巡洋戰艦『比叡』の如き巨艦を建造するに至つた。これらの工事は、當初海軍工廠に之を命じたが、後には民間工場にも委托することになり、製艦事業は明治晩期に於いて外國に優るとも劣らない成績を擧げ得るに至つた。日露戰役中であつたとはいへ、一四、五〇〇噸の巡洋艦『伊吹』を、僅々六箇月で進水せしめた手際は、我邦の造船術の進歩を象徵するものといつてよい。

商船建造も亦た漸次進歩の跡を示したが、材料の獲得が容易でなく、技術もまた不熟練であつたから、初めは大抵外國から老朽船を購入して、一時的要求を充たしてゐた。しかし之ではたらぬといふので、日清戰役後、造船航海の二奬勵法を發布して、船舶の改良を計り、航路の擴張を行ひ、商船の維持發達に努めた結果、日露戰役には海運業の前進に比例して、造船業の繁榮を見ることが出來た。

大正、昭和の兩期に於ける艦船建造事業の發展は異常であつたが、それに伴ふ學術方面の發明も亦た顯著で、之を世界の學界に持ち出しても比倫を絕つたほどのものが多かつた。たとへば横山教授のコラデ式インテグラフ輸入の如き、末廣教授の船舶傾斜測定裝置及び船舶の動搖

に關する理論の如き、元良博士の同型船運行の場合後續船に蒙る影響の研究、山本教授の特殊船型の抵抗試驗の如き、近藤、平賀兩海軍造船中將の艦船の設計の如き、いづれも世界を動かした發明で、我邦の造船學術の進歩を證明するものであつた。

叙上の現象こそは、世界第一次大戰及び今回の大東亞戰爭に於いて、我海軍が絶大の成果を擧げ得たことを說明するもので、同時にそれは我國力の充實と勢圏の擴大とを反映するものでもあるといへるのである。

七、結言——日本型の創造

今や、我艦船建造事業は、ヨーロッパ的軌道を逸脫して、日本的獨創の域內に進入してゐるものといふことが出來る。さうでなければ現下の大戰爭に於ける捷利を見ることは出來ない筈であり、又あの廣地域に於ける軍需輸送を果すことが出來ない筈である。

日本が初め計畫したところの大東亞共榮圏の建設は、既に其半以上の成立を見た。濠洲や印度は勿論のこと、大西洋への進出も決して夢ではなくなつて來た。さうした我邦の實力は、大部分秘密に附せられてゐる我艦艇、航空機の型式によつて、これを象徴することが出來るものと考へられる。

我日本民族の歷史に暗い人々は、大東亞共榮圏の建設を曠古の大業として驚歎してゐるやうだが、朧ろげながらも先史時代に於いて既にさうした廣域に共榮の生活を營み、近くは近代早期に於いても、われわれの祖先は略〻南方共榮圏に等しい地域に其活動の痕を殘したのであつた。あらゆる條件が進み且つ備はつてゐる現代に在つては、われわれはもつと〳〵大規模の計畫を立てゝ、皇祖の『八紘一宇』の御遺訓を實現することに努力しなければならぬ。

第十八章　日本船の南方進出

一、三百年前の南方

今や日本軍は御稜威の下に、海、陸、空の大戰果を擧げて、大東亞共榮圏の建設が日々に實現に近づきつつあるが、今日皇軍の活躍しつつある南洋一帶は、三百年前に日本船が進出して貿易を營み、そこここに日本町を打ち建ててゐた場所である。勿論、さうした昔の南方共榮圏も、一朝一夕で出來たものではなく、われわれの祖先が長い間かかつて握りしめた努力の結晶であつた。しかもそれが忽然として南洋の天地から消えたのは、全く江戸幕府の間違つた政策のためで、もし鎖國さへしなかつたら、今日われわれが建設のために血みどろになつてゐる大東亞共榮圏は、遲くとも二百年前には成り立つてゐたと思はれる。

一體、日本と南洋とは地續きなのだが、太平洋の波に低いところが洗はれてゐるため、ちやうど江のやうに見えるのであつて、其地理的關係は切つても切れぬ同胞の間柄だから、打ち捨てゝ置いても自ら結ばれるものを、邪魔がはいつて姑らく別れてゐたのである。それをこんど撚りを戻して、元の鞘に納めるばかりではなく、以前にも增して固い契り、廣い交りを結ばうといふのである。

此際、日本と南洋との關係を歷史的に眺めて見ることは決して無駄ではなく、大東亞共榮圏がどうでも樹立せられねばならぬものだといふ考へを一層固からしめるだらう。

二、八幡船の活躍

太古から我邦の船が大陸や南洋に出かけていつたことは疑ひのない事實だが、あまり遠いことだからここでは述べないことにする。

平安時代までの貿易は大體官營で、輸出入は政府の手で行はれてゐたが、遣唐使廢止以後、

こちらからは船を出さず、支那から來る船ばかりをたよりにしたので、自づと物資が不足し、特に藥品は缺乏して不安を感ずるやうになつて來た。それで平安時代晩期には少からぬ密航者があり、密貿易がしばしば行はれた形跡がある。鎌倉時代に三代將軍實朝が由比ケ濱で大船を造り、それに乘つて宋に行かうとしたが、どうしても船が動かないので斷念し、船は到頭砂上で朽ちたといひ傳へる。これなども日本人の慣海性が時たま現はれたのを、周圍の者が邪魔して、わざわざ船を出させなかつたのだと見れば見られぬこともない。

鎌倉時代末に元寇があり、壹岐や對馬は相當に敵に荒され、博多沿岸へは一時敵が上陸したこともあり、日本人はつくづくと蒙古軍の殘忍暴虐なのを見て、むらむらと復讐心の起つたのも一つの契機となつたが、また確かに有無を相通しようといふ經濟的動因も手傳つて、元寇後には九州あたりの船が朝鮮や元の沿岸に出かけた。一番早く元に赴いたのは正應五年で、役後十一年目であつた。

其頃瀬戸内海には、もはや組織ある水軍が蟠踞してゐたが、何れも河野黨に屬したから、世間ではそれを『河野十八家』と呼んだ。此外、紀伊の熊野には安宅氏、志摩には橘氏、伊勢には向井氏などがあり、それぞれ手持ちの軍船を備へてゐた。これらを初め、九州の水軍は、吉野時代から次第に數多く朝鮮、支那の沿岸に出かけて貿易に從事し、場合によつては手荒いこともしたが、後にはだんだんと海賊的性格を帶び來り、室町時代の末期には南支那にまで其觸手を擴げた。彼等は支那人に『倭寇』と呼ばれたが、皆『八幡大菩薩』の旗を押し立てゝゐたので、其仇名を『八幡船』とも呼ばれた。一說では『八幡船』は抄略船の意ある『パファン・チュナン』の音譯だともいふ。初めは小規模のものであつたが、明の王直が我邦に流寓して、彼等を利用してから大規模になつたことは事實だから、本當の海賊は支那の不逞の徒であつたらしいといふ。

三、九艘船の進出

室町將軍も天龍寺船を初め、遣明使船をしばしば送つたが、堂々たる幕府の遣明使僧の中にさへ、こちらの思ふ通りの値段に明が貨物、主に刀を買ひ上げないと、『此儘では歸られぬ』

といつて威嚇したものがあつたほどだから、他の八幡船の行動は推して知るべきである。で、明では度々使節を出して、倭寇の禁遏を室町幕府に請うたが、幕府は無力だつたから禁令を出しても何の效果もなかつた。明では防備に力を竭し、それが國帑を空しうして、明朝衰亡の遠因をなした。

豐臣秀吉が全國を統一するにおよんで、明との貿易を復舊しようと思ひ、明の信用を得る手段として、まづ倭寇を禁じたので、倭寇はだんだん南下して印度支那方面に赴き、南洋の天地に其驥足を伸ばした。しかし、戰爭が熄んで國内が鎖まると、國民の氣風もおひおひ變り、これまでは半賊半商的性格をもつてゐた倭寇が自から二つに分れて、一つは水軍となり、他は通商となり、前者は朝鮮征伐の形を取り、後者は九艘船に展開した。

『九艘船』の名は文祿元年に秀吉が南洋に渡航する船舶九艘に對して、免許の朱印狀を與へたことに基づいてゐるが、此時御朱印狀を受けたものは長崎の末次平藏、船本彌平次、荒木宗太郎、絲屋隨右衛門、泉州堺の伊豫屋良千、京都の茶屋四郎次郎、角倉與市、伏見屋の八名で、末次だけは二艘、他は皆一艘づつであつたから都合九艘である。それらの船の仕向地は支那の媽港（マカオ）、印度支那の安南、東京（トンキン）、占城（チャムパ）、東埔寨（カムボヂヤ）、今の泰國である暹羅（シヤム）、太泥（パタニイ）、それからフィリッピン諸島中の呂宋（ルソン）島の八ケ所であつた。

さあ行けと命令したところで、準備がなければ出帆出來るものでないから、ただ文祿元年に朱印制度が創まつたといふだけで、それより以前にも貿易船はどしどしと南洋方面に仕向けられてゐたと見なければならぬ。

四、御朱印船と其構造

徳川家康に政權が移つてから、御朱印を豐光寺、圓光寺、金地院の三寺院に管掌させ、そこから朱印狀を交附した。家康名義で初めて朱印狀を出したのは慶長九年で、其發行數は合計二十九通であつた。『安當仁』とあるのはアントニオ・ファン・ヂーメンといふ外人であるが、それもやはり家康から朱印狀を受けてゐる。

寛永元年に上記の三寺院から幕府に差出した報告によると、總下附數は百七十九通、仕向地

は十八箇國に及んでゐる。それを國別にして見ると、一番多いのがシャムで三十五通、次ぎがルソンで三十通、交趾は二十六通、柬埔寨は二十三通、西洋は十八通、安南は十四通、東京は十通、占城は五通、太泥は五通、信州は二通、密西耶二通、芟萊二、田彈二、摩利迦一、摩陸一、臺灣一、迦知安一、順化一であるが、安南や東京などを合はせると、今日の印度支那が八十一通となる。

『芟萊』はボルネオのこと、『密西耶』はフィリピッン諸島のヴィサヤ島のこと、『摩利迦』はマラッカだらうし、『摩陸』はモルッカだらうし、『西洋』は印度及び其以西であらうと思はれる。今日の印度支那、泰、フィリッピン、東印度などが、それらの日に日本と盛んに通商したことは、兩地が地理的にも人文的にも、不可分離の關係にあることを示すものでなくてはならぬ。

然らば當時の御朱印船はどんな構造をもち、どれほどの積載量をもつてゐたか。幸にも當時の繪畫や記錄が殘つてゐるが、其中の多數はこまかいことがわからない。

角倉船は支那ジャンクに似た形をしてゐるが、長さは二十間、幅は九間で、三百八十人を載せることが出來たといふ。

茶屋船は純粹の日本型であるが、長さは二十五間、幅は四間半で、三百人餘を積むことが出來たといふ。

末次船は全くヨーロッパ型であるから、外船を購入したとも考へられる。後期の御朱印船についていつたものだらうが、長崎の西川求林齋が著はした『華夷通商考』といふ書物に、御朱印船のことを摘記して、長さは十五間乃至二十間、勝載は大型で二百萬斤、中型で百五六十萬斤、小型で百二三十萬斤であつたとある。

同書の記載で最も問題になるのは、御朱印船の造りを『ミスツイス造り』といふとあることで、初めは何のことだかわからなかつたが、だんだん調べてみるとスペイン語のミスチコの轉訛であるらしい。中世、地中海で用ひられた海賊船にジィベックといふ型があつたが、それと今一つのフェルッカといふ型との間の子型ができた。兩型はそれぞれ四角帆と、三角帆とを特徴としてゐるが、ミスチコ型は四角帆と三角帆とを混用してゐた。今、御朱印船の圖を見ると、本帆、彌帆は笹帆で四角形を呈し、遣出しの帆は木綿帆で三角形を呈してゐる。ことによると

高帆も四角形らしい。笹帆はいふまでもなく支那ジャンク式だが、遣出しの帆はヨーロッパ式である。

末吉船の航海の描いた清水寺の繪馬を見ると、其甲板上で双六を弄んでゐるもの、三味線を彈いてゐるもの、書物を繙いてゐるものなどが表はされ、乘員がいかに航海を享樂してゐたかといふことがわかる。桃山時代から江戸時代早期へかけての日本人は多分の慣海性をもつてをり、南洋へ行くことを遊山ぐらゐにしか思つてゐなかつたらしい。それだからあれほど航海が榮えたのであつた。海洋國としての日本は、航海が盛んでなければ立つてゆかない。航海が盛んになるのには、造船技術が秀でゝゐなければならない。御朱印船はどこで造られたか知れないが、よほどの堅牢さをもち、かつ十二分の耐波性をもつてゐたと考へられる。さうした歴史がなければ、明治以後の造船界における急速度的進歩が理解できない。

五、南洋の日本町

かうした御朱印船の行く先々には、ちやんと日本町が建つてゐて、商店もあり、住居もあり、店主の代理人も住み、其妻子も住んでゐた。一番はつきりと日本町の様子の知れるのは交趾のそれで、海岸に近く兩側町があつて、ずら〳〵と檜皮葺の日本家屋が立ち並んでゐる。

シャムの日本町はアユチヤにあり、メナム河に沿うた一區劃であつた。先年東溫納寛淳氏が其遺址を發掘されたさうであるが、どんな結果を獲たか、それについてはまだ聞いてゐない。何しろ古いことではあり、其遺址が川中島のやうなところにあり、河身も變つたかも知れないが、位置だけは推定がつくから、克明に發掘して見たら、必ず何らかの收穫があらうと思ふ。私も近い中に一度出かけてゆくつもりではゐるが、いつのことだかわかりはしない。

ルソンのマニラ日本町については『スケソス』といふ書物に大分詳しく述べてある。『日本人の居留地と其家屋とは、マニラの市外にある。其位置はラギオとグレー・パリアンとの中間である。日本人は皆フランシスカン派の僧侶の指揮を受けてゐた。日本人は性質が善良であるが、勇敢で元氣が溢れ、固有の服裝を廢しようとしない。木綿或は絹布のキモノを着け、革製の半靴——名をタビといふものを穿ち、藁を編んだサンダルを履き、二本のカ

タンを腰に帶んでゐる。人格、風采、共に氣高く、式典を重んずるが、一旦緩急あれば剛毅果斷の天性を發揮する。』

それでマニラ太守は特に日本人を優遇し、宛ら腫れ物に觸るやうな取扱ひをしてゐた。少しでも輕蔑されたやうに感ずると、日本人は直に憤慨し、場合によつては腕力を用ひることさへあつたから、慶長十四年、三代目の太守ドン・ゴンサロ・ロンギロは榜示を出して、フィリッピンの太守及び艦隊司令官は、日本皇帝と友情、平和、靜謐を保持することに努力する故に、日本皇帝もまた此目的に誠意をあらはし、平和的手段を取つて、我軍隊と政府との名譽を毀損せられないやうに冀ふ旨を述べた。慶長六年以來、家康はしばしば書をマニラ太守に送つて、亂暴を働らく日本人があつたら、そちらの國法に照らして處分してもらひたいといつたが、日本人はなかなか太守の命令を奉じなかつたから、遂に如上の榜示を出すに至つたのである。此一事を見ても、日本人が如何に尊敬されてゐたか、否寧ろ如何に畏怖されてゐたかといふことがわかる。

マニラには信仰を改めないで國外に放逐されたいはゆる『クリスチャン・ダイミヤウ』、內藤如安、高山南坊などもゐたから、一層儀式張つてをり、外出の時には毛槍を立て、行列を作つて歩いたといふ。寶永のころには、日本人の人口はかれこれ三千人からあつたといふが、それが絶えてしまふはずがないから、其血は今のフィリッピン人の血管の中に濃厚に流れてゐるに相違ない。フィリッピン獨立運動の志士アギナルドや、今回執政になつたカルバスには、日本人の血が多分混つてゐはすまいかといふ下馬評もあるくらゐだ。

何しろ大小の差こそあれ、南洋に數十箇所の日本町があつたと推定して差支ない。みれらの遺址はおひおひ明かにされるであらう。

六、太平洋を横斷した日本船

徳川家康の信賴厚かつたイギリス人三浦安針、即ちウィリヤム・アダムスは、家康の命令によつて、伊豆の伊東で西洋型船舶二隻を造つたが、其一隻は百二十噸、他の一隻は八十噸であつた。共に江戸に回航して淺草川（隅田川）に繫いであつたが、上總の岸和田海岸で難破した

前ルソン太守ドンロドリゴ・デ・ヴイヴェーロが、メキシコ經由でスペインに歸りたい由を申し出たので、大型の方をロドリゴに交附した。と、彼れは船名を『サン・ブェナベンツーラ』と命じ、船員約八十名とそれに乘つてメキシコに向つた。それは慶長十五年のことで、日本で造られた船が初めて太平洋を横斷したわけである。

ところが、此船はメキシコで買ひ取り、日本へは回航しなかつた。もし回航したならばそれに乘つてまたメキシコに來り、スペイン人の手を借らず、直接に貿易を始めるかも知れぬといふことを懸念した爲めであつた。

サン・ブェナベンツーラ號に同乘してメキシコに行つた京都の商人田中勝介は、歸途、メキシコの司令官とサン・フランシスコ號に乘つたが、同船は勝介を上陸させ、買上船舶の代金を支拂つた後、日本近海にあるといふ金銀島を探檢した。ところが、其船が難破したので、どうしようかと苦慮中、仙臺の伊達政宗が新船を建造してメキシコに渡航せしめようとしてゐることを聞き、造船を引受けて月ノ浦で新船を造り、慶長十八年、支倉常長らを載せてアカプルコに向つた。これが日本船の第二回太平洋横斷である。ところがメキシコ政府の使節が、此船で元和元年に浦賀に來り、翌年メキシコに歸つた。これが日本船の第三、第四回太平洋横斷である。

かうして江戸時代早期には、日本の船は南方のみならず、米洲にまでも仕向けられたのであつた。其活動範圍は略〻今日の大東亞戰の帝國海軍のそれと似てゐる。もとより數、質、量は異つてゐるが、時代差を引くと似てゐるといへようか。

七、日本民族の發展力

以上の記述は極めて簡略であるが、日本人が慣海性に富み、海外に發展し得る能力をもつてゐる事を十分證示すると同時に、三百年も前、かほどまで南方共榮圈を建てかけてゐたから、今日のわれわれ日本民族ならば、萬難を排して、或期間の後には必ず理想的な大東亞共榮圈を成就し得ることをもまた推論せしめるのである。

われわれは今ひた進みに進むべき時であるが、かうした歴史の回顧は、われわれに自信と勇

氣とを與へこそすれ、決して諸詛や逡巡をもたらさないのである。傳統なき民族は基礎なき家屋の如く、一搖れすれば直ちに覆るが、傳統ある民族は、基礎固き家屋がどんなに搖れても覆らぬごとく、千難萬艱にあつても微塵だも動じない。日本の眞の力はむしろ今後に發現するのである。

第十九章　大東亞共榮圈の歷史的背景

一、生存協同の新原理

これまでの人類の進化は生存協同によつて大成せられたものであるから、今後と雖も世界の諸民族は、生存協同によらなければ其共存共榮を計ることが出來ないのである。人類とても生物である以上は、生物學の原則を離れて其生存、繁榮が望まれない。かほどの事は生物學者は勿論、人類學者の間には疾くに知れ渡つてゐたにも拘はらず、物資の少いツンドラ地帶に住んで、ツンドラ文化を造就したヨーロッパ人は、古い生存鬪爭の原則によつて、軍艦と大砲とで醇眞朴茂の世界諸民衆を威嚇し、彼等を自分達の脚下に後服せしめて、其土地と產物と勞力とを搾取し續けたのである。古いところではポルトガル人、イスパニヤ人、それからオランダ人、

イギリス人が取つて代り、續いて後れ馳せにアメリカ人がのさばり出した。

南北アメリカもかうしてラテン系、アングロサクソン系白人のものとなり、アフリカもオーストラリヤも白人に占められ、古い文化を有つたアジヤすらも、長い間イギリス人、アメリカ人、オランダ人、フランス人の統治の下に立つてゐた。英米人はかうして彼等の富を作り、富の力によつて一層其勢圏を擴げようとしてゐた。彼等の毒牙は先づ支那に立てられ、こゝ百年ほどの間にぼつ〳〵と支那の要處を占領して、そこを基地として手を八方に延ばし、南アジヤに於ける唯一の獨立國タイをも奪取しようとしてゐた。否、支那、タイばかりではない。我邦をも舐めてしまはうとしてゐたのである。

ところが、さうはいかない。日本は『神國』であり、日本人は『神人』であり、アメリカやイギリスの力ではどうすることも出來なかつた。然るに不明なる歐洲人は、日本を無力な國、日本人を幼稚な國民と思ひ込み、江戸時代晩期以來、日本人に接觸してゐながら、其えらさを發見することが出來なかつた。しかし、光つた眼の底、默つてゐる腹の中に、何となく恐ろしいところがあつたと見えて、支那に對するやうに沒義道なことをなし得なかつたのは事實である。ことに依ると、老獪なイギリス人は、日本の將來を恐れて、日本がまだ十分發展しない中に叩きのめさなければならぬと思つてゐたのかも知れない。

二、日清戰爭と日露戰爭

日清戰爭などいふものは、日本人と同種である朝鮮人を自分の附庸にしようとして、支那が朝鮮半島に出兵したから、どつこいさうはいかぬと、日本がそれを遮つたから起つたことになつてゐるが、實はイギリスあたりが李鴻章を煽動して事を起さしめ、隙を覘つて火事場泥棒を稼がうといふ魂膽でなかつたとは保證が出來ない。現に日本が戰勝の結果、遼東半島を割讓せしめたら、ロシヤ、ドイツ、フランスがぐるになつて茶を入れ、東洋の平和に害があるといつて、日本に遼東を還附させ、其謝禮にロシヤはダルニイ、旅順を租借し、ドイツは膠州灣を租借し、フランスは廣州灣を租借し、遼東還附に直接關係しなかつたイギリスは威海衞を租借し、アメリカさへも支那の門戸開放を要請した。之から觀ても歐米の侵略主義は立派な事實だ。

これをきつかけにロシヤは滿洲と朝鮮にのさばり始め、支那とは祕密に軍事同盟を結んで北方から日本を壓迫した。ちやうど其時、支那に義和團事件が起り、北京の各國公使館が攻圍されたので、各國聯合軍は救援の爲め北京に向ひ、北京は遂に陷落した。聯合軍は我國を初め英米露佛伊獨墺、八箇國の軍隊から成り、それ〴〵戰鬪に從事したが、最も勇敢な振舞をしたのは日本軍で、それを各國軍は面り見て、日本人の侮るべからざることを感づいたのは事實である。否、日本恐るべしとさへ考へたものもあつた。

イギリスが日本と同盟を結ぶことになつたのは、滿洲に積極政策を採るロシヤを食ひ止めることも一目的であつたが、實は日本とロシヤとを戰はしめて、東亞に於けるロシヤ勢力を削ぐと同時に、日本の國力をも消耗せしめようと考へたのである。しかし尊大なイギリスともあらうものが、日本と同盟を結ぶに至つた裏面には、日本の實力を認めたといふ事實が潜んでゐたのだ。

日露戰爭は日本の大勝利に終り、ロシヤは到頭冐を脱いで滿洲と東清鐵道の一部とを日本に引渡したが、こんどはアメリカが邪魔をして滿洲に於ける戰利を横奪しようとした。それにも拘はらず日本は滿洲の經營に當り、朝鮮をも併合して、東亞にはもはや風雲の起るべき種が失せた。滿洲人、朝鮮人は日本人と共にツーングス系血液が基調をなして居り、遠古に於いては一箇の人種・文化圏を作つてゐたのに、色々の事情から次第に分裂し、其間に諸小國家が絶えず起仆した。然るにそれが日露戰爭の結果として、本來の政治的・文化的姿相を再現することになつたので、虎視眈々たる歐米列强は其侵略主義の立場からそれを快らず思ひ、祕かに日本を制壓しようとする機運が動いてゐた。

三、第一次世界大戰

日清戰役及び北清事變の後に於いて、後れ馳せ乍ら東亞に利權を獲得しようとした獨逸は、歐洲に於いてもやはり制覇の野心を有つて居り、其軍備を充實して列國を呑まうとする概があり、いはゆる『一觸即發』の情勢にあつた。そしてサラエヴォに於ける墺匈國王嗣の狙擊が導火線となつて、ドイツ・墺匈國側と、ロシヤ・セルビヤ・フランス・イギリス側との間に戰爭

が起り、遂にはアメリカも、イタリーも、日本も、支那も聯合國側に立つて參戰することになつた。かうなつては勇敢なドイツも如何ともする能はず、袋叩きの憂き目に逢つて休戰條約を成立せしめざるを得ざるに至つた。

日本は東亞に於いてドイツの勢力を驅逐するに努め、先づ青島を攻略し、內南洋諸島を占領し、支那とは所謂二十一箇條の日支條約を結んで、南滿洲及び東蒙古に於ける經濟關係を發達せしめようとした。東亞の平和を保障することが出來れば、ヨーロッパの戰爭にまで手を出す必要がなかつたのであるが、日英同盟の手前もあり、イギリスからの要請もあつて、日本は地中海にまで軍艦を派遣して聯合國側の船舶護送の任に當り、又シベリヤに出兵してチェッコ・スロバキヤ軍を救出する等の大活躍をした。

しかも五箇年間の大戰爭が終り、大正八年一月からヴェルサイユで平和會議が開かれた際、日本は內南洋を委任統治領とし、山東問題を解決したといふ以外には、參戰の賠償金を取つただけで、何ら酬ひられるところがなかつた。日本代表の提出した人類平等の要求の如きは、國際問題として重要のものであつたにも拘はらず、イギリスやアメリカの反對に逢つて不採擇に終つたのは、如何にも遺憾なことであつた。とにもかくにもヴェルサイユ條約は成立して、ドイツは殆んど再起の望みがないまでに叩きつけられ、英米に都合のよい國際聯盟會議、經濟會議、軍縮會議が相尋いで開かれ、我邦は常に英米二國から不利の立場に置かれる事になつた。

四、滿洲事變から日支事變へ

何にしても第一次世界大戰中、歐洲列國は戰爭に忙がしくて、他を顧る遑がなかつたから、日本の商權は自から東亞全體に伸び、此儘に放置すれば我邦は東亞から英米を驅逐して、東亞全體を支配する實力を有つことになるかも知れぬといふ恐怖心を起し、英米二國はあらゆる機會に於いて支那をして日本に反對せしめ、日本の東亞に於ける國際地位を漸次削剝することに努めた。支那は日本と握手して歐米人の毒手から免れ、東亞の平和と繁榮とを圖らねばならぬ位地にありながら、英米に依存して日本に楯つき、排日、侮日から抗日に轉向し、あらゆる手段を講じて抗日思想を民間に漲溢せしめ、小幡公使のアグレマン問題、萬寶山事件、中村大尉

虐殺事件、等々、我國民の血を湧かしめる不祥事件が頻發した。

日本國民は隱忍自重して、姑らく事の成行を見詰めてゐたが、昭和六年九月十八日、柳條溝に於ける滿鐵爆發事件に端を發して、張學良軍の驅逐、滿洲國の獨立を見るに至つたが、他方、天津事件があり、上海事變があり、昭和十二年七月七日に蘆溝橋事件が勃發して、遂に日支事變に發展し、南京陷落、蔣介石政府の重慶逃入、汪兆銘の新共和政府樹立にまで進展した。

此間、國際聯盟は滿洲國を承認せず、日本を以て侵略國としたので、我邦は遂に聯盟を脱退して獨自の立場を取ることになり、それ以來、我邦は擧國一致の態勢を以て、其理想とするところの東亞共榮圏を樹立すべき準備工作として、先づ日滿支三國の政治・經濟・文化的協同體を確立すべき方策を立てた。元來、日支間の紛爭は東亞の問題である。英米二國は之に容喙すべき權利がない。然るに英米二國は蔣介石政府を援助して、彼れを飽くまでも日本に抵抗せしめ、日本が其討伐によつて物資と人命とを損耗し、勃興しつゝある其國力を消失してしまふのを心待ちに待つてゐた。つまり英米二國は自ら戰はず、支那をして日本と戰はしめ、其間に漁夫の利を占めようと計畫してゐたのである。

五、第二次世界大戰と大東亞戰

かうした東亞に於ける日本の活動がドイツを刺戟し、歐洲に於いて獨伊の樞軸側と英佛の反樞軸側との間に第二次大戰爭が勃發し、ドイツ側は殆どヨーロッパ中部を席卷し、イギリスに上陸作戰を試み、ロシヤに進出し、反樞軸側に敗色が見え初めたので、イギリスはアメリカを抱き込み、蔣介石の助けをさへ借りようとするまで墮落した。日本はかねてから獨伊側と同盟を結んでゐるから、英米とは戰爭をこそせざれ、戰爭をしてゐるのと同じ立場に立たされてゐた。

滿洲事變以來十箇年、日支事變以來五箇年の日子を經て、日本はもはや物資及び人力を消耗し盡し、到底英米に齒向ふ實力がないと見くびつた兩國は、威嚇に次ぐに威嚇を以てし、威嚇によつて日本を屈服しようものと、自ら進んで日本との經濟斷交を斷行し、一層露骨に援蔣行爲を繼續した。我邦は出來るだけ我慢して英米との衝突を避け、平和の中に東亞の常態を回復

しようとして、特に大使をアメリカに派遣して樽俎の間に折衝せしめたが、元々東亞の侵略を其政策としてゐるアメリカの事とて、一歩半歩の譲歩をすらしないのみか、ノックス海軍卿は大西、太平兩洋艦隊の裝備完了、ハワイの眞珠灣、フィリッピンのマニラの軍備充實を放送し、ルーズヴェルト大統領も亦富力を見せびらかして、我提言に耳を傾けようとしなかつたから、我邦は昭和十六年十二月八日を以て對米英宣戰を布告し、同時にハワイ、フィリッピンを攻擊し、續いてマレイ半島を南下して、背後からシンガホールを攻略することにした。其戰果の偉大なことはこゝに一々述べるまでもない。

六、傳統的國策としての共榮圏

日本は滿洲事變の當初から、領土的野心のないことをはつきりと言明してゐた。日本の傳統的國策は、歐米の勢力を東亞から驅逐して、彼等に搾取せられた東亞を本然の姿に還し、東亞自體の共存共榮を圖らうとする點にあつた。滿洲事變、支那事變は大東亞共榮圏建設の豫備的作戰であり、大東亞戰爭は其本格的作戰であるのだ。されば飽くまで英米蘭に勝ちぬき、ポリネシヤ諸島、東印度諸島、フィリッピン諸島、マレイ半島、ビルマを占領し、進んではメラネシヤから濠洲に入り、ビルマから印度に入り、若し得べくんばシベリヤ東部も、印度支那の如く、大東亞共榮圏に參加してもらひたいのである。此目的が達成せられるまでは、日本は戰爭を止めないであらう。一たび起てば退くことを知らぬのが日本の傳統精神である。石にかぢりついても目的を完遂するまでは戰ひ抜く決心である。

以上は極めて簡單であるが、ともかくも大東亞共榮圏建設運動の發生、展開の過程を明らかにした。尚ほ此上に胚子ともいふべき歴史が語り殘されてゐるが、それはあまりに長くなるから、こゝには略して述べないことにして、次ぎには日本民族理想と其實現方法とについて語ることにしよう。

第二十章　日本民族理想の實現

一、民族理想は歴史的存在

今日、日本は大東亞戰爭を闘つて血みどろの努力を續け、地球總面積の約四分の一に亘る廣域に於いて、海にも陸にも空にも世界戰役史上未曾有の成績を擧げてゐるが、それは手段であつて、目的ではない。大東亞戰爭の目的は大東亞共榮圏の建設である。然らば大東亞共榮圏の建設は、日本民族の全目的か。否、それは目的の一部に過ぎないものだ。

君民一體であり、君國一致する我日本に於いては、日本國家の目的は日本民族の目的でもあり、そしてそれは同時に畏くも大御心に副ひ奉つたものなのである。我國家の目的は皇祖の聖勅に現はれてゐる通り、これを內外兩側から窺ふことが出來る。即ちこれを內にしては『六合一都』となり、これを外にしては『八紘一宇』となる。六合一都とは日本國家を完成することであり、八紘一宇とは日本國家理想を世界に普及することである。これらは分けて觀れば二つであるが、合せて觀れば一つである。かうした大事業を達成する手段として、皇祖が聖勅に示されたところは、養正、積慶、重暉の三目であるが、其表現が包括的、藝術的である爲め、解釋の質度が拜讀者によつて多少づゝ異ふのは已むを得ないことである。近時一碩學は嚴正なるコムメンタリズムの立場から『周易』を引いて其一部を說かれたが、『周易』に依りながら獨自的な意義を有つてゐるといはれた通り、日本的には如上の三つは『正しさ』、『慶び』、『暉り』であつて、大體今日の眞善美に相當するものであると私達は理解してゐる。

かう理解すると、眞善美を兼ね備へた國家を完成し、さうした理想を世界に普及しようといふのが、日本肇國の精神であり、やがてそれは日本國家の目的ともなり、日本民族の生活理想ともなるものだと觀て來なくてはならぬ。

私達はかうした肇國精神、國家目的、民族理想が、三千年の史的過程に於いて如何に展開し來り、今日如何に展開しつゝあるかといふことを考へたいのである。日本は天祖が天孫に賜は

つた神勅に於いて宣はせた通り、『天地のむた窮りなかるべき』國家であり、無限發展の性格を有つてゐながら、其基盤に横はるところの根本的目的及びそれの達成手段は不可動的、不改變的であるとしても、時代に順應し、寰界に適處して、それを擴充し、精化してゆかなくてはならない。それが即ち日本民族理想である。かるが故に、日本民族理想は歴史的存在であつて、絶えず發展しつゝあるものだと私達は信ずる。

二、民族理想の生物學的理據

私は曾て『日本民族理想』と題する小著に於いて、日本民族理想の輪郭を把握し、生命論的立場からそれを進取主義、多産主義、協力主義の三つに分け、一つに統べれば積極主義であると論じたが、此考へ方は今日に於いても少しも異つてゐない。

國家は生物である。それは生物である民族によつて構成せられてゐるからだ。生物である民族は生命を有つ。生命はそれ自體に活きようとする慾求を有つてゐる。其慾求は色々あるが、第一には生命を支持しようとし、第二には生命を增殖しようとし、第三には生命を協同しようとする。これらの三慾求は觀方によつては層位的發展を遂げたやうでもあり、また等時的存在であるやうにも考へられる。生物學乃至人類學では、小異を捨てゝ大同を取る立場から、苟くも人類である限りは、どんな民族でも皆な以上の三慾求を有つてゐるといふが、民族史的立場から觀ると、それらの慾求を充足せしめる態度、行動、意圖がそれ〴〵異つてゐて、其各〻が生物の動向、人類の約束に背いてゐるものは衰亡し、合つてゐるものは興隆する。民族の興亡は僅に數千年間に成形するが、人類又はそれよりも更に大きい生物といふ立場から觀ると、其消長興亡は、何萬年、何十萬年、何百萬年といふが如き長年月を經過しなければわからないもので、瞥見では甲乙の間に大差がないやうに觀えるけれども、諦觀すれば民族に似た消長興亡を有つてゐるのである。民族史も亦た所詮は生物學乃至人類學の立場から觀られなければならぬ理由がこゝに在る。

そこで日本民族の生命慾求充足過程が如何に展開されたかといふことが問題になるのだが、私は民族史的檢討の結果、生命支持の慾求に於いては進取的であり、增殖の慾求に於いては多

産的であり、協同の慾求に於いては協力的であり、それらを總括すれば日本民族の生命慾求の態度は積極的であつたといひ得ることを確めたのである。

生命支持の慾求は個人的のもので、どんな民族でも之を有つてゐるが、活きよう爲めに金を溜め、金さへ溜まれば、他の事はどうでもよい、義理や人情は一切顧みないといふユダヤ主義などは、生命支持の眞義に背いたものである。それだからユダヤは滅んだのだ。生命增殖の慾求は集團的のもので、夫婦、家族、氏族、部族、種族の形を取るが、フランス民族の間には之を忌む風習があり、それが爲めに漸次衰頽の色を見せつゝあつたことは掩へない事實である。生命協同の慾求は一番スケールが大きいもので、國家は實に之に由つて成るのであり、之が旺盛でなければどんな仕事も出來るものではない。

これらの三慾求は其各々が離れ〴〵になつてゐては、民族的生活を成全する事が出來ない。即ち生命を支持すると同時に增殖し、增殖すると同時に協同してこそ、民族生活を昂揚することが出來るのであるが、日本民族の場合にはそれらの三つが一束になつて充足されて來た。其充足の意圖、態度、行動の上から、私は日本民族の生命に對する支持、增殖、協同の三慾求を順々に、進取主義、多産主義、協力主義であると觀じ、それらを引括めたものが積極主義の生活理想であると斷じたのである。以下、順々に三つの生活理想について述べよう。

三、進取主義

日本民族の生命支持慾求は頗る旺盛で、先史時代以來、生活資源の獲得に努力し、どし〴〵と異系技術を取り入れて、それを改善し、豐化し、優化した成績は、世界史上の一偉觀といふことが出來る。

こゝには其過程を逐一述べる自由をもたないが、先史時代には漁撈と狩獵とによつて食料を獲得するに過ぎなかつたものが、原史時代に於いて耕作を攝取し、短年月間に漁獵生活を農耕生活に乘り換へてしまつた。住居の如きも竪穴式地下家屋を、構架式地上家屋に改め、衣裝も亦た窄袖、狹袴、草履を寬濶な上衣、下衣、草鞋又は木履に更へた。かうした物質的生活の三大特徴を容易に改變したことは、日本民族の基幹をなす原日本人の適應性と可動性とに基づく

もので、同時に受容性が如何に強かつたかをも示唆するのである。之は日本民族の第一次文化改造で、これに依つて大體日本民族の運命が定まつたといつても差支ない。

第二次文化改造は、飛鳥寧樂時代以後、漸次的に支那を通して世界文化を吸收したことによつて行はれたが、これは政治・藝術的成績に於いて著大な進歩を見たけれど、經濟的生産過程では目覺ましい變化を見出すことが出來なかつた。此時代は室町時代まで續いたと見て差支へない。

第三次文化改造は安土桃山時代から江戸時代早期に亙つて行はれ、食住衣に於いて驚くべき躍進を示したが、それはヨーロッパ的、オセアニア的影響の結果であつた。しかし間もなく鎖國令が下つた爲め、江戸時代三百年間は殆ど停頓狀態に陷つた。

第四次文化改造は東京時代に行はれ、生産過程が著しく改變して、日本民族の經濟生活營爲に於ける能力が、全く進取主義の結果であることを的確に示した。此改造は第一次改造以來、日本民族の國是となし來つた農業立國政策を工業立國政策に改めさせ、其自給自足的立場を搖がしたやう公觀を呈したので、識者は直ちに之を止揚して農・工業的政策を執ることに決意した。これが現在の生命支持慾求の充足方途である。

しかし何といつても、日本民族の生活理想は、其傳統的規定力を有つた農業立國主義の制約を免れることが出來ない。農業主義は實は生産主義で、生活資源の豊かさを翼求するものに外ならない。いつもよくいふ事であるが、『祈年祭祝詞』や『六月月次祭祝詞』に現はれてゐる思想こそ、日本民族の生活に對する慾求を示すものである。

『皇神の見はるかします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲の棚引く極み、白雲の向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至る極み、大海原は舟滿ち續けて、陸より行く道は荷の緒結ひ堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至る限り、長道間なく立ち續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠國は八十綱打ちかけて、引寄する事の如く、皇大御神の寄さしまつらむ荷前は、皇大御神の前に横山のごと打ち積み置き……』

といふ一節は、『手肱に水沫かき垂り、向股に泥かきよせて』といふ一句と共に、民族生活の願望と手段とを示した古代的表現であるが、今日も尙ほ續いてゐる進取的生活理想と見て差支へない。

四、多産主義

日本民族の生命增殖慾求についての共同的動向は、古語の『天の益人』といふ思想に現はれてゐる通り、多産主義である。『天の益人』とは、高天原族は人口が自然に增加する人群だといふ意で、死を代表するイザナミの命が『一日に千頭づゝ縊り殺さう』と仰言つたら、生を代表するイザナギの命が『然らば一日に千五百産屋を建てよう』と仰言つたので、一日に五百人づゝ殖ゑるといふ神話に基づいたもので、これは古代日本人が人口の自然增加を信じてゐたことの證據となるものである。『古事記』や『日本書紀』にあらはれてゐる日本神話の組立を觀ると、ギリシャやローマのそれは勿論、支那崇拜者が日本神話の源と考へてゐる支那のそれにも優つて、整然たる秩序と體系とを有つてゐて、生産即創造の系統發生史である。アメノミナカヌシの神は生命の根源であり、それが作用して生産の神であるムスビの神二柱があれまし、人の住むべき土地源があらはれ、陰陽が分岐し、人態が形成して、謂ふところのアントロポモルフスを有たれたイザナギ、イザナミの對偶神が生成し、二神によつて萬物が創造されたといふ筋は、實に立派なもので、日本民族が遠古から多産に重點を描いてゐた事の明證となる。

多産主義は人的と物的との二つに分けられる。物資の生産は農業と工業とによるが、農業生産については前述の通り、國初以來それを國本とする政策を立てゝ來た。然るに輓近になつて工業進歩の世界的風潮に伴ひ、我邦も亦た工業立國の方針を立て、現下では輕工業、重工業共に活潑なる成績を擧げ、其機械製作の如きは質量共に世界列國を凌いで、現に大東亞戰爭に於いて世界の耳目を驚かす實績を示してゐる。藝術上の成效も之に伴ふもので、日本民族の技術性能が其生活理想である多産主義と表裏の關係にあることを私達に語つてゐる。

五、協力主義

日本民族の生命協同慾求は、古代以來ずつと持續して、其歴史的展開過程に旺盛な痕跡を殘したが、今日に於いては前古未曾有の活躍を見せてゐる。此慾求の動向を私は協力主義と命名

する。

日本民族は昔から血屬を紐帶とする堅固な家族を結成したが、其家族が膨張して氏族となり、氏族が膨張して民族となつたのである。然らば日本民族は理論的には同一血屬である筈だが、實は先住民の血液も、後來民の血液も混つてゐて、嚴密に言へば、混血民衆であることは否定が出來ない。本來、同一血屬でなければ家氏族をなさない習俗であるのに、何故、異血屬が加はることが出來たかといふと、それは異家族、異氏族を同家族、同氏族と見做して、それを家族又は氏族の內に收容する準血屬制があつたからである。

日本國家は社會學的に觀れば、かうした家族の基礎の上に立つた上層構築であるが故に、いかほど時間を累ねても、いかほど空間を擴げても、崩壞すべき罅隙を見出さないのである。つまり日本國家は『家族國家』といふ唯一の國家型式なのである。國家學者は往々にして『家族は基本社會であり、國家は利益社會である。家族はいくら膨張しても國家にならぬ』といふけれど、日本民族の結成する日本國家の場合は別である。

スメラギとは『家の上』の義であり、タミとは『家の人』の義である。日本國家機構が飽くまで家族的なものであることは、語原學的に明瞭で、些の疑を挿むべき餘地がない。これは日本民族の生命を協同する意慾が強く、其生活理想が協力主義に傾いてゐる結果あらはれたもので、日本民族の包容の大きさ、平和性の强さに基づくものと觀ることが出來る。だからこそ日本民族は隣人を愛し、異邦人を愛し、四海を同胞とし、世界を一家とすることが出來るのである。

六、大東亞共榮圈の實現近し

如上の民族理想を有つた日本民族が、遠古以來、實現しようと努力し續け、古代に於いては稍〻其希望を滿たし、近代に於いても亦た其夢想を半ば實現したところの大東亞共榮圈の建設を今現に急いでゐることは、寔に當然中の當然である。

日本の提唱する大東亞共榮圈は、英米の侵略主義と異り、他國家と協力して有無を相通し、過缺を調節し、共存共榮の實を擧げようとするもので、それの成就するのは火を見るよりも明

らかである。現に滿洲國、蒙疆自治政府、中華民國國民政府、佛印政府、泰國は之に參加し、今將に比律賓も、緬甸も之に參加しようとしてゐる。蘭印でも濠洲でも若し投ずるならば敢て辭することはない。

日本は今、此大東亞共榮圏の實現を促進する爲めに、貪婪飽くなき米英及びそれらに依存する重慶政府と戰つて、アジヤを米英の毒手から解放し、アジヤ人のアジヤに復原しようとしてゐるのだ。其意圖の達成はもう間もない事と信ずる。かくして大東亞共榮圏成らば、更に大きな共榮圏を建設して『八紘一宇』の大理想を實現することに邁進しよう。其實現の可能性は、日本の理想と實力とが之を裏書する。

第二十一章　日本語を醇化し日本字を創造せよ

一、はしがき——止揚か創造か

歴史の研究にたづさはつてゐる私達からいふと、日本は技術の國、日本人は技術の民族で、實用的方面も、審美的方面も、二つながら優秀の成績を擧げ得る能力を有つて居り、過去に於いても相當な結實を見せてゐるが、實力の大きい割合に小さい仕事しか出來なかつたのは、どちらかといへば審美的方面に走り過ぎて、實用的方面に傾かなかつた爲め、いはゆる藝術では世界的逸品といはれるやうなものをも遺したに拘はらず、物質生活に必須の技術では、これならばと感心するやうな世界的發明は殆ど全く見られなかつた結果、今日、此未曾有の國難に際して、自分達の周圍を振返つて見ると、如何にも心細いやうな感じが起るのである。

しかしながら、日本民族が生産性、從つて工藝性に富んでゐることは、歴史的事實の上からも、統計的數字の上からも、十分證明し得るのであるから、機械工業の側に於いて先進圏を凌ぎ得ない憾みが現在ではあるにしても、軈て其憾みを拂拭してしまふやうな大發明、大工夫、大設計、大企圖が續々とあらはれて、ワットやウォーカァやマードックやエヂスンやネイルソンやベスマァやジャッカールやステフェンソンやフルトンやリリエンタールやガリレオやマルコニイや、かうした多數の發明家に並んで、日本人の名の列擧せられる日が來ることは明らかである。

何故今までさうした日が來なかつたかといふと、日本は藪林地帶に屬し、凍原地帶で暮らしてゐる諸民族のやうに、物質的生活に苦められることがなかつた事、日本人が傳統を重んじ過ぎて、當來世界を見透かさうとすることよりも、過去世界を振り返ることに偏する癖のあつた事が主要な原因であつたと私は考へる。

技術・工藝といふ廣い視野に於いては、機械工業も、音樂、舞踊、繪畫、彫刻、演劇、文學のやうな審美藝術も、等價的、等質的に見られるのであるから、日本技術の將來は、實用の側も審美の側も共に甚だ有望であるといはねばならぬ。

其有望な將來はいつ來るか。今日、日本民族は其到來を一日も速めようとして、單に工業の方面、軍事の方面、産業の方面に於いて努力してゐるのみならず、狹い意味の文化事業に携はつてゐる人々も、それ〴〵必死の努力を續けてゐる。さうした人々の頭に描いてゐるスローガンに『日本文化の新建』、『日本文學の再建』、『日本藝術の創造』などいふのがある。新建といひ、再建といひ、創造といひ、言葉はそれ〴〵異つてゐても內容は皆同じものを目ざしてゐるのであつて、今までにない日本的な大文化を造り上げようといふ意圖をもつてゐることは確かである。

けれども此意圖の生起が過去の否定に促がされたことは注意すべきである。過去の缺陷に目ざめたからこそ、當來を成全しようといふ欲求が湧いたのだ。然らば過去を止揚して當來を成全せしめるか、或は過去を委棄して當來を創造するか。これら二つの中一つを選ぶより外に道がない。

二、文學の基礎は言語

私はこゝで文化の中、文學を取り上げて其再建乃至創造について考へるところを述べようとする。

いくら聲を大きくして日本文學を再建せよと叫んだところで、文學の基礎が固まつてゐなくては、其上には何物をも建てることが出來ない。文學の基礎は言語であることはいふまでもなく、從つて日本文學は日本語の上に築かれるところの上層構造に外ならないから、先づ日本語を完成して眞の日本語にすることが絶對に必要である。

一體、今日の日本語は言語學上どんな位地を占めてゐるか。本質的に觀て日本語は純粹なものであるか、立派な價値を有つてゐるものであるか。たとへ現在はよくなからうとも將來はよくなり得る見込があるか。これらの問に答へようとすると私は聊か心細く感ぜざるを得ない。何故なれば今日の日本語は餘りにも雜駁で、系統が亂れ、形式が壞れ、甚だしきに至つては、日本人でありながら日本語を書いてゐても何の事だか意味のわからないことがある程度までそれが墮落し切つてゐるからである。

先日、科學文化協會發會式が文相官邸で擧げられた後、席上の懇談に移つて、紀平正美博士がいふには、橋田文相が學問を愛せられるのは誠に結構であるが、『科學する心』といふ語を屢〻使はれるのは困りものである。科學は名詞であつて動詞ではない。然るに名詞を直ちに動詞並みに働かせるといふのは、日本の語法に背いたものである。文部大臣が日本語法をぶちこわすなどいふことは聞き捨てにならぬ。今後注意せられたいと、後はは〻〻〻の哄笑に紛らしてしまはれた。

それは素より一場の笑話に過ぎぬものであるけれども、しかしながら、深く考へて見ると一場の笑話として不問に附するわけにはいかない。傳統を重んずる點から觀れば、文相の『科學する心』は破格的であり、反則的であり、日本語法を無視したもの〻やうに一往は思はれる。しかし、傳統を超えて創造しようとする熱意をもつた者からいふと、文相の『科學する心』は創造的であり、新試的であり、日本語法を在來よりも豐かにしようとする運動の片鱗が示され

たものとも解せられる。現に文相に同じて、其後我邦の言論界では『哲學する』とか『藝術する』とかいふ言葉が續々あらはれた。これは生硬な新造語には過ぎないが、でも、そこに一道の新らしい光りが搖曳してゐる。

原始日本へ高級文化が輸入せられた時、攝取力の豐かな古代日本人はどし〳〵と外國語を採り入れて、それらを日本化した。名詞を動詞化した例は甚だ多い。ツグナフ（贖）はツングヘナフがついたもの、ハカル（量）はパク（匏）ヘルがついたもの、ワタル（渡）はパタ（海）ヘルがついたもので、いづれも名詞へ動詞語尾をくつつけたものである。かうして貧しい日本語は豐かになり、だん〳〵醇化されて、語呂のよい、耳なつこい、美くしい日本語に改善せられ、今日では本來の日本語であつて、輸入外國語でないとしか思へなくなつたのである。日本人はかうした風に攝取の力、改善の力を多量にもつてゐるのである。それは私達が包容性、適應性といふ日本民族性のはたらきに由るもので、過去に於けるさうした作用は當來に於いてもやはりさうした作用をなし得るに相異ない。文相のふとした試みも或は如上の民族性の偶發的發現であつたといへるかも知れない。

とはいふものゝ今日の日本語をまじめに考へて見ると、決して立派なものとはいへないのである。先月私達の住んでゐる町では、中野のさる廣つ場で防火訓練があり、私も其見學に赴いたが、訓示や說明の中にどうしてもわかりかねる言葉が相當に數多くあつて、先づ一般人よりは教養が高いと思つてゐる自分さへ、かほどわからないのであるから、一般人、特に婦人や子供には何が何だかわからなかつたらうと思つた。勿論、私が研究に沒頭してゐて、隣組だの、町會だの、防空演習だのに携はることが少い爲め、誰れもが知つてゐることを私が知らないでゐたといふやうな嫌ひもあらう。しかし顧みて可笑しくなるのは、ジュンカンチュースイといふことがどう考へてもわからず、何だらうかと思ひ煩つてゐる中、訓練に移り、婦人の一團が環を作つて、水を滿たしたバケツから、燃え上る火に水をかけては退き〳〵したので、漢字で書けば『循環注水』とあるべきものであることがやつと分つた。チュウスキなどは可笑しい、水をかけるで澤山だ。此漢語を濫用することが、實は我邦に於ける現在の國語墮落に拍車をかけてゐるのである。

此間、家内が買物に外へ出かけてゐる中、私が留守居をしてゐると、隣組の回覽板が廻つて

來た。先を急ぐので早速讀んで見ると、こんど日頃買ひ入れてゐる魚屋から魚を買ひ取るやうにしたから、購買券へ住所氏名を書いて、捺印して、隣組長へ差出せ。隣組長はそれを町會長へ持つて行け。すると町會長はそれを點檢して人數を書き込んで隣組長に返す、云々といふことが書いてあつた。廻りくどくて難解で、二三度讀み返して見たが、なか〳〵頭へ入らなかつた。こんな風では女學校を出たばかりの若い奥さん、小學校しか出てゐない主婦などには、明瞭的確に理解される筈がない。私は此時つく〴〵とやさしい言葉を使ふことが日本現下の最大急務であると考へた。

役所の文書などは出來るだけやさしく書いて、誰れにもわかるやうにするのが親切であるのに、難解な漢語、しかも下手な新造語などを使つてゐるのが多い。勿論、社會は日進月歩で、昨日までなかつた事態が今日は發生してゐるのだから、在來語だけでは間に合はぬこともあらうが、それならば解し易い言葉を選ぶことにしてもらひたい。あまり頭のよくない學生のレポートのやうな文句は使つてもらひたくない。役所の出す文章がかうむづかしくては、いくら國民學校で國語教育に骨を折つて、なるべく純粹の國語を用ひさせよう、漢語を制限させようとしても、それは效果を奏するわけがない。國民學校を出ても回覽板が讀めなかつたり、防空防火訓練の訓示が分らなかつたりするだらう。もつと誇大的に云へば、生活が不可能にならう。これは由々しき問題である。

三、日本的な日本語とは何か

皮肉つて云へば、今日の大人、特に高等教育を受けたものは、日本的な日本語を知つてゐない。彼等の知つてゐるのは、古い支那語即ち漢語、新らしいヨーロッパ語の片言であるとさへ云ひ得る。さうした大人に比べると、第二學年以下の國民學校の生徒の方が、ずつと本當の日本語を知つてゐる。

かういつたら大人達は怒るかも知れぬが、其怒る人々は次ぎの手紙を讀んで何と感ずるであらう。

『おぢいちやま、おばあちやま。おげんきですか。ぼくは二年生になりました。バンコック

には、きたない家がたくさんあります。きれいな家もたくさんあります。ぼくの家は前に宮様がすんでゐた家です。とてもきれいな家です。自動車のうんてんしゆはサワットといひます。とてもいたづらがすきです。毎日いたづらばかりしてゐます。ぼくの學校は前に尋常小學校といひました。いまは國民學校といひます。泰にはかにがたくさんゐます。泰語でかにのことをプウといひます。泰はさるの國です。百ぴきでも千びきでもゐます。てながざるはチャニーといひます。へびもたくさんゐます。町にもゐます。へびは大きらひです。へびはグーといひます。さようなら、おだいじに。』

これはバンコックの國民學校にゐる二年生の兒童のよこした手紙だが、大人の手紙よりも卒直で、解し易く、要領がつかんであつて面白い。一讀すればバンコックの町の様子が手に取つて見るやうに眼前に泛んで來る。文學的價値からいつても、回覽板の文章などより、ずつと上に位するやうに私には思れる。

そこで問題になるのは、國民學校の子供の文章の方が、教養のある大人の文章よりもうまいのはどういふわけかといふ事だ。それは前述の如く、單純、卒直、易解であることなども理由の一つであらうが、私が思ふところでは、宗として兒童の言葉の日本的であることが、其文章をして力強いもの、同感を起させるものにならしめるのである。日本的な言葉こそは本當の日本語であつて、形も質も音も純粹でなくてはならぬ。かうした日本語は正しいものであるばかりでなく、同時に美くしいものでもあらねばならぬ。正しいから的確に理解され、美くしいから容易に同感されるのである。

私は屢〻知人から子煩惱だといはれるが、私は自分の子供ばかり可愛がるのではない。他人の子供も同じやうに可愛いのだ。子供の世界は純眞の世界、純美の世界、純善の世界ですらある。さうした心持を、さうした言葉で表現するから、子供の言葉は朴茂醇眞で、美くしく、善く、なつかしく、從つて效果的である。要するに言葉は心の影であるから、よい言葉を持たうと思ふものは、先づよい心を持たなければならぬとすれば、結局人格の錬成といふことが基本の問題であるが、それは又他日を期することにしよう。

子供の言葉、子供の手紙、子供の作文が何となく懐かしく、人を動かす力のあるのは、前述の如く、一言以て之を蔽へば『日本的』である爲めであるが、日本的といふことを分析して見

たら、漢語が混つてゐないこと、卒直に心を表現することの二つは是非とも計へられなくてはならぬ。從つて私は日本語を日本的ならしめる爲めには、出來るだけ外來語を避ける事と、表現を簡單にする事とが急務であると思ふ。今日のやうに日常の談話、文章、書翰が複雜怪奇を極めてゐては、それの理解だけにでも相當時間が費され、勞力が費され、能率が夥しく上らぬことになる。どうしてもこれは改善しなくてはならぬ。せめては子供のやうな文章を作り、子供のやうな言葉を語るやうにしなければならぬ。

四、日本文字の創造が急務

叙上の口幅ったい私の言を聞いて、如何にも單純な考へだと笑ふものは、まだ現在の日本語の陷つてゐる弊竇を見出し得ない人々である。さうした人々に對しては、私は今一つ日本文字の改造を慫慂したいのである、其理由は外でもない、漢字が日本語を複雜化し、怪奇化し、難澁化、不理解化してゐるのであるから、漢字を制限し、或は廢止することによつて、日本語の惡化を防止することは出來るが、若し日本文字を創造したならば一層其效果が多からうと思はれる。

一部の科學者達は既に漢字の制限を實現し、非常な努力を以て純粹の日本語を用ひることに邁進してゐる。たとへば『度量衡』といふべき場合に、サシ・マス・ハカリといひ、『努力する』といふべき場合に『ほねを折る』といひ、學術的用語ですら『直徑』をサシワタシ、『壓力』をオシ・ヂカラ、『横張力』をヨコノハリヂカラといふ風にいひ表はしてゐるが、却つて此方がよくわかるのである。直譯的な嫌ひはあるが、しかし慣れゝば段々稜がとれて聞きよくなる。

一體、私達が今日やつてゐるやうに、漢文漢詩を讀むことになつたのは新らしい事で、昔の人は日本流に訓んでゐたのである。日本流に讀むことをヤワラゲルといふが、それはやがて日本語がヤワラカであり、漢語がカタサを感じたことを示唆するものである。他國語である漢語は日本人の律呂に合はないから、何となく耳障りである。かるが故に、それを醸して日本的に表現することをヤワラゲルといつたので、ヤワラゲルとは畢竟日本的律呂に改めるといふ意で

ある。撥音、促音などを日本人は好まないから、それらを拗音に改めたのみならず、日本語に飜譯していはゆる訓讀を始めた。此訓讀こそヤワラゲの主體で、これが現はれて後、初めて漢語が日本化されるに至つたのである。

カング、ヒャング、アック、トッなどは、どうも面白くないから、いつの間にか、カウ、ヒヤウ、アク、トツといふ風に拗音を用ひたり、子音語尾を母音語尾に改めたりしたのである。古い『日本書紀』とか『令義解』とかを見ると、私達の祖先が如何に漢語を和らげることに苦心してゐたかゞ知れる。即ち難解の漢語を、少し廻りくどくはあるが、ともかくも日本的に訓讀してゐる。漢文や漢詩は平安時代には　すつかり日本的に訓まれてゐたものらしい。たとへば『日本書紀』卷二十七を取り出して見ると、私達が今日、

『避城者。西北帶以古連旦涇之水。東南據深泥巨堰之防。繚以周田。決渠降雨。華實之毛則三韓之上腹焉。衣食之源則二儀之陿區矣。雖曰地卑。豈不遷歟。』

と反點を施し、送假名を補つて讀むものを、昔の人は、

『避城は戌亥は帶ぶるに古連旦涇の水を以てし、辰巳は深き泥、大なる堰の防ぎに據れり。繚らすに周き田を以てし、渠を決て雨を降らす。花實の國つ物は則ち三つの韓國の上腹焉。衣食の源は則ち二儀のくむしをなり。地卑れりといふとも豈遷らざらんや。』

といふ風に讀んだ。語格はいくらか支那的であるが、語音は全く日本的で、何となく耳障りがよい。『和漢朗詠集』の詩の『東船西舫』の如きも、亦たこれを和らげて、

『あなたの船、こなたの船』

と訓んだりしたので、其味がすつかり日本的になつた。

かうした鹽梅に、日本民族は全く改造に於いて無限の力を有つてゐる。改造には先づ攝取が必要であり、次ぎには變化が必要であるが、日本人にはそれを難なく成し遂げる腕前がある。此腕前は大したもので、いつの時代にもこれで以て自己の運命を開拓して來た。たとへば應神朝に漢字が輸入されると、直ぐこれを日本化することに努力し、聖德太子は隋に與へられた國書に於いて、

『あけのくにのすべらぎ、くれのくにのきみに、ふみをおくる。』

といふことを、

『日出處天子。致書日沒處天子。無恙乎。』

といふ風にものされた。さうかうしてゐる中に、表意文字としての性格をもつた漢字を、單に音標文字として用ひることを工夫し、飛鳥時代から寧樂時代へかけて、すつかり其企圖を實現することに成功した、いはゆる『萬葉假名』は即ちそれで、一に『眞名』ともいつた。眞の字といふほどの義である。萬葉假名が工夫されてからは、どんな日本語でも自由に之を表現することが出來たけれど、漢字は多畫で、如何にも筆寫が煩はしかつたから、遲くとも平安時代早期までには、眞名に對して假名を工夫した。平假名は漢字の草體を簡略化したもの、片假名は其眞書の一部を採つたものだが、其後次第に變化して、今日の如き平假名、片假名が出來上つた。假名といふのは假字ほどの意義で、眞名に對してゐるけれど、僞字の味はなく、たゞ借りものとして用ひる意味である。

假名が現はれてからは、日本語の日本的表現が出來たのみならず、筆寫が早く、表現も一層容易になつた爲めに、我邦の文化は急速の進歩を見て、飛鳥寧樂時代の追隨的文化から平安時代の獨自的文化へと移行した。これは文學を例に取つて見ると一番よくわかる。飛鳥寧樂時代には總べての文書は下手な漢文で書かれたが、平安時代中期になると、和文が現はれ、物語、隨筆、日記、等々、純粹の日本文學を見るに至つた。紫式部の『源氏物語』も、清少納言の『枕草子』も、紀貫之の『土佐日記』もかうして現はれたのである。『本朝無題詩』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『經國集』を初め、絕代の詩傑といはれた菅原道眞の『菅家文草』、『菅家後草』でさへ、支那的臭味の紛々たるものばかり、日本的、本來的の好尙といふものは味へないのに、表現こそ萬葉假名に依存したとはいへ『萬葉集』の諸作は、名も知られぬ東國の一防人のものでさへ惻々として讀む者を動かす力をもつてゐる。それは本來の言葉で、本來の思想感情が言ひ表はされてゐるからで、無學の勞務青年の歌が有識の高位顯官の詩を凌いでゐることは、今日の大人の文章が子供の手紙を越え得ないことゝ一致してゐる。

支那に追隨して發布された飛鳥寧樂時代の律令か、形式ばかり整つてゐて、實際生活に適はしくなかつた爲め、平安時代に半日本化した延喜式となり、遣唐使廢止以後、ひたすらに本來への復歸を急いだ結果、鎌倉時代に至つて漸く純粹日本の姿を現じ、政治に於いて舊形態が崩壞した如く、法制に於いても漢文で書いた律令格式が揚棄せられて、外面は漢文の形をしてゐ

るが、內は面日本文である『御成敗式目』が出現するのを見た。之を文學に觀ても、鎌倉時代のそれは、生硬だとか、教訓主義に墮してゐるとか、色々の批難を加へるものがあるけれど、さうした評者は平安文學に初めから團扇を上げてゐる人々であるから、其批評は當然偏頗にならざるを得ないのであつて、大局から觀れば、日本的な或物をもつてゐることは爭はれない事實である。それはちやうど宗教に於いても、日蓮宗の如き日本的佛教が起つたのと同じことである。

日本法律が純粹な假名交り文で書かれたのは、東京時代明治期以後であるから、明治期を歐化期といふ人もあるけれども、廣く大體を見ると、やはり其時期に日本が眞の日本を把握しようと努力してゐたことは否定が出來ないのである。先般も金子堅太郎伯が鹿鳴館時代のことを物語つて、それが伊藤博文公の外交上の苦心から來たものであることを主張してゐられたが、すべて物には兩面があるから、一面のみを見て判斷を下すことはこれを愼まなければならぬ。

何にしても、これまでいつて來たことを今一度振り返つて見たならば、日本民族は技術性を有つた民族で、改造といふことにはすばらしい手腕があるから、曾て平假名、片假名を發明した如く、これから新日本字を作り出すぐらゐは朝飯前のことである。作りさへすればいつでも作られるものを作らないでゐるだけのことである。

識者の間には横書きを奬勵したり、ローマ字採用を力說したりしてゐるものもあるが、そんな暇があるなら新字を創造したらよいではないか。滿洲でも朝鮮でも文字は作られた、日本で文字が作られないといふことは、全く日本民族の恥である。

若し新文字が出來たならば、日本文化は驚くべき發展を遂げるであらう。假名が工夫された後に日本化運動が起つた以上の大成績を擧げ得るであらう。あゝ、さつぱりした、簡單な、風味のある日本的文字の出來るのはいつの事だらう。

五、むすび——新體制時代

今や世界は行き詰まつて、どこでゝも舊體制が崩壞し、それに代つて新體制が現はれようとして、其產褥の苦しみにもがいてゐる。我邦も亦やはりさうした苦しみにもがいてゐるが、

此もがきの後には輝く旭日の如き光りが照破するに違ひない。

世界に民族は多く、中には創造性に富んでゐるものも多いが、我國民の如く改造の能力をもつたものは多くないであらう。改造の能力を多分に有つてゐる日本民族が、其過去の顯著なる歴史的事實に鑑みて、日本語の醇化と日本字の創造とが、眞の日本を建設する上に必要であることを知つたならば、それらが出來ない筈はないのである。私はこれらの二つを樹立すべき新體制中の急務であるとさへ考へる。これらの二つ、即ち純粹日本語と新創日本字とが出來上つたならば、口を酸ぱくして叫ばなくとも、日本文化は自ら急速的に進歩するであらう。

さすれば文化の象徴だといはれる文學の興起しない筈はない。何となれば、文學は文化の精髄的表現であるからだ。明治期文學はいはば平安文學の如きものであつた。大正期文學は室町文學の如きものであつた。これから起るところの、或は起りつゝあるところの昭和期文學は、江戸文學の如きものであつてはならない。過去に比較を絶つたところの創造的、新制的性格をもつたものでなくてはならない。其本質は日本的なものであるべきだが、それも享樂的、淫蕩的、島國的であつてはならぬ。平和的、協同的、世界的で、しかも力强い、威嚴のある、大きな日本的者——傳統的な表現をすれば、養正的、積慶的、重暉的な六合一都、八紘一宇の性格を有つたものでなくてはならぬ。

かうした文學を誰れが作り得るか。老壯年も頭を轉ずれば青年になれるから、日本的文學の建設者はなれぬことはないが、私達は寧ろ初めから頭の新らしい、年の若い、精力に充ち滿ちた青年の手腕に俟たうとするものである。ありと思へばあり、ないと考へればない。苟もやれると信じたら、どんな事でもやれるのが人間である。人間は神業である。私は日本現在の苦難的情勢の中に育つた青年に、其神業を實現してもらひたいと思ひ續けてゐるものである。私は時々夢にさへ見る、醇化された日本語、創造された日本字、それらの上に構築された日本的日本文學を。（一六、一一、九）

第二十二章　國語圏の擴大と國語質の酵化

一、漢語流行は時代錯語

滿洲事變、聯盟離脱、日支事變、大東亞戰爭と、次々に起つた目まぐるしい事件は、個人主義、利己主義、享樂主義、アメリカ主義の夢を見てゐた國民に、それらをかなぐり捨てゝひた向きに集團主義、國家主義、努力主義、日本主義へ轉向せしめたが、特に大戰以後は一般の氣持が緊張して、アメリカやイギリスに對する買被りを自覺すると同時に、日本自身の有つ眞價を再檢討し始め、萬事出來るだけ日本的に始末しようといふ考へを懷くに至つた。

それにも拘はらず、近頃時代の動向に逆行した甚だ面白からぬ現象がわれわれの眼前に繰りひろげられてゐる。それは何かといへば漢語の流行である。むづかしい漢字をむやみに使ふ傾向が見られることである。日々の新聞に現はれる役所の企劃、月々の雜誌を飾つてゐる諸家の論說、軍の報告にも、隣組の廻覽板にも、其他、何にも彼にも、漢字澤山のむづかしい難解語が載つてゐて、われわれですらわかりかねることが多いのだから、普通の教養しかない人は恐らく半分ぐらゐしかわからないだらうと思はれる。それでは書いてゐる人はわかつてゐるかといふに、それも多分、わかつてゐないのだらうと思ふ。

どうして、かやうの難解語、むづかしい文章が行はれることになつたか。其歷史をざつと調べて見るのも面白からう。先づ第一には哲學者は非一般的な熟語を使ふ。たゞの言葉を用ひてもわかる事を、わざ〳〵むづかしい言葉で言ひ現はす。中學以上の學校では哲學概論といふ課目があつて、其難解語が彼等の間に擴まる。教育當局ではかほどの事を知つてゐなければ、何事をも考へることが出來ない。哲學は思考の基礎であり、根本であるといつて、其事が恐ろしい弊害を釀し出す動因になつてゐることには氣づかなかつたらしい。

第二にはさうした人々が大學を出て、むづかしい用語で、普通のことを表現する。辛うじて讀める外國書を、辭書と睨み合ひつゝ辛うじて飜譯するから、譯語が晦澁で、措辭が非日本的

で、普通の人には何が書いてあるかさへわからない。

第三にはざつと二十年ぐらゐ前、左翼思想が學生の間に擴がり、さうした連中は共産主義思想を譯語の難澁な飜譯書から獲得し、一知半解のまゝそれを周圍に宣傳した。

以上の三つが國語の醇良を損ひ、漢語澤山の、非日本的措辭に滿ちた、いはゞ下手な文章を我邦に流行らしめる動因になつたのである。あまりにも非日本的な言動が彼等の間に見聞されるやうになつた爲め、政府では愈〻彈壓の手段を採り、共産主義者といふものは表面社會の表から消えたが、まだ轉向しきれないもの、それを今尙ほ眞理のやうに思つてゐるものが、役所や會社や學校やの中堅部に巢組つてゐて、それらの人々が文章を立案したり、起草したりするとなれば、それが澁滯、難解であり、まるで片語でも聞いてゐるやうに思はれるのは當然のことである。

今一つ、世間が軍國的に傾くと、むやみに力强いものを歡迎し、醇粹な日本語などでは力が弱いやうに誤信し、佶屈贅牙な漢語を使つて得たり畏しと構へることが流行つた。それも確かに最近日本語を惡化した理由の一つである。例を引くのも畏い極みだけれど、大詔渙發などゝいふよりは、『おほみことのりが降る』といつた方が、われわれにはずつと力强く有難く感ぜられる。漢語でないと響きが弱いやうにいふのは、醇正な日本語の有つてゐる本質的價値を知らないものゝ世迷ひ言であるとわれわれは考へる。

二、文部省の漢字制限

私達は新聞雜誌を見て、最近一、二箇月の間全く憂鬱であつた。こんな風に日本語が惡化していつたら、一年經つか經たぬ中に、まるで解らなくなつてしまふであらうと考へたからである。在來、文部省では國語敎育について苦心し、省內には國語調査會といふやうなものもあつて、國語の醇正を保持すると同時にそれを發展せしめる方法を講じてゐるのに、かうした最近の動向について、何らの處置をしないのはをかしいとさへ考へてゐた。

然るに三月四日、文部省では突然『常用漢字』一一一二字を制定し、其外に『新標準漢字表』を作つて、『準常用漢字』一三四六字、『特別漢字』七一字を並行せしめる旨を發表した。『常用

漢字』とは國民の日常生活に關係が深く、日本人としては自由に讀み書きの出來ねばならぬものであり、『準常用漢字』とは日常生活と關係が薄く、讀めるだけでよいものであり、『特別漢字』とは前二者以外、皇室典範、帝國憲法、歷代天皇の御追號、國定教科書に奉揭の詔勅、宣戰詔書、陸海軍々人に賜はりたる勅諭の文字をさすもので、其總數は二千五百三十九字を計へる。つまりこれだけの漢字を知つてをれば日本國民としては立つてゆけるといふことが標準になつてゐるのだから、之ら以外の漢字は餘計なもの、若しくは普通以上のものといふわけ、われわれは此發表を見て、ともかくもほつとした。文部省としては實に大手柄で、之によつて時代の弊害をいくらでも匡正する事が出來るのは賴母しい。出來るだけ假名の使用を多くし、外國の地名、人名、外來語は原則として假名を使用し、又標準漢字表以外の漢字は、固有名詞以外は假名で押し通すといふ方針であるといふが、假名の使用は實に結構であつて、新聞雜誌關係者、特に兒童教育に關心を有つてゐる人々は、以前から既に難解文字の代りに假名を用ひてゐたやうである。

一體、文部省では夙に漢字制限の意圖を有し、大正十二年五月、其臨時國語調査會で一九一〇字の常用漢字表を發表して、國語問題に一新紀元を劃したが、尋いで昭和六年五月、それを修正して一八五八字を決定し、更に十二年國語審議會を設置し、七十二回の委員會と六回の總會とを開いて、今回公布の常用漢字、準常用漢字、特別漢字を決定するに至つたのだといふ。世間では之を時代に即應した處置だといつてゐるが、私は漢語全盛の時代を指導するものであると思ふ。

當今のやうに漢字が跋扈してゐては、日本語は益〻不醇となり、全く難解となり、それに引摺られ、影響せられて、日本的趣味、日本的好尚、日本的思惟すらも次第に失はれてゆくことは否定出來ないのであつて、識者の間には既に其事が叫ばれてゐたから、文部省の此拔打的公表こそは實に國語の墮落を救濟するもの、國語の醇正を保持するものとして、國語に興味を有つてゐるものを悅ばしめたのであつた。

三、國語圈と國勢圈とは一致す

十六世紀に出たモルガといふ人の『スケソス』を見ると、キモン（着物）だの、カタン（刀）だの、ヒンバロ（雲雀）だの、ビョンボ（屏風）だの、其外色々の日本語が出て來る。これは當時日本人の勢力が南洋に及び、相當廣い範圍に亘つて日本語が分布してゐたから、自然イスパニヤ人、ポルトガル人などの耳にも入つたのであり、又日本文化が獨特で、日本語で表現したければ眞に近くないと考へられたからでもあつて、國語の分布する範圍は國勢の波及してゐる範圍と地理的に一致するものであることを立證するのである。

また室町時代に支那で書かれた『日本風土記』を點檢して見ると、多樣の日本文化を紹介してゐるのみならず、多數の日本語を羅列して其音釋を示し、更に當時行はれてゐた俗謠をすら數十首も紹介してゐる。それらの俗謠は既に我邦では失はれたが、此書に載つてゐる爲めに知られるのであつて、國語の地理的分布といふことが、其歷史的分布と同じく重大であることをわれわれに敎へてゐる。

敍上の日本語分布の事實は、室町時代から安土桃山時代へかけて、八幡船により、九艘船により、御朱印船によつて、日本人がどし〳〵と南方に進出し、到る處に日本町を立て、日本品と同時に日本語を蒔き散らし、日本文化を栽ゑつけてゐた史實と一致するもので、鎖國以前に於ける日本人の活躍が如何に盛んであり、日本國家の勢力が如何に廣域に亘つて認められてゐたかをわれわれに示してゐるのである。

然るに江戸時代中期以後、日本は諸列國に對して國を鎖し、日本人をして國外に活躍せしめなかつたから、日本町も日本品も日本語も皆な歷史的存在となつて、印度から蘭印、フィリッピン、ハワイに至る間は、ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリス、アメリカの勢力範圍に入り、かくしてアジヤは白人の搾取の對象となり、其曾て建設した燦爛たる東洋文明は全く光りを失つてしまつた。若し日本が寬永の鎖國をしなかつたならば、少くとも南洋方面には我邦と共存共榮する若干の邦家があつて、今日われわれが大東亞戰爭をする必要がなかつたと思はれる。かうしたわけで、日本語は全く日本だけのものとなり、どこにでも其使用を見ざるに至つたが、開國後またぼつ〳〵と海外に發展し、ハワイ、フィリッピン、續いてアメリカなどでは、多少日本語を聞くことが出來るやうになつた。今日では朝鮮半島、滿洲國、支那の各地に大分日本語が擴がつてゐるが、今後は更に〳〵廣い範圍に擴がらなくてはならない。

大東亞戰爭は已むを得ない手段であつて、大東亞共榮圏を樹立することこそ、われわれの目的なのであるが、表日本海に於ける作戰は既に殆ど終了し、マニラは落ち、シンガポールは落ち、バタヴィヤも亦陥落ちようとしてゐる。ハワイが我軍の手に入り、オーストラリヤに日の丸の旗の立つのはさう遠い將來ではあるまいから、南方共榮圏の確立はもはや問題でない。只だ問題とするところは、共榮圏に對して、指導者としての日本が如何なる文化工作を施すかといふことである。

誰れしも考へつくのは、文化工作の第一要件として、日本語を共榮圏内に擴げ、それによつて日本文化を理解し、日本國家を理解し、其結果、日本と協同するに非ざればアジヤ人のアジヤを建設することが出來ないといふ認識に到達せしめることである。これは實際一番大切な、根本的なことである。東印度諸島にはオランダ語が擴がり、マレイ半島にはイギリス語が擴がり、フィリッピン群島にはイスパニヤ語や英語が擴がり、チモール島にはポルトガル語が擴がり、印度支那にはフランス語が擴がつて居り、其間に若干のマレイ語や支那語や日本語が用ひられてゐるが、何もこれらを一時的に禁止して、日本語を使用せしめなければならぬといふわけはない。しかし漸を逐うて日本語を通用せしめ、且つ米英蘭佛等のヨーロッパ語を廢止せしめることは要請せられる。南方諸國の土着民衆が若し眞に『アジヤ人のアジヤ』といふことを理解したならば、英語を使へ、蘭語を使へ、佛語を使へと命じたところで、そんなことは眞平だと斷ることは知れてゐる。

四、日本語の南方進出工作

そこで、次ぎに這日本語の南方進出工作如何といふ具體的問題が起る。日本語は複雜で、なか〳〵外國にはひろがらないとか、日本語は難解で、容易に日本人以外には理解せられないとか、日本語は語法が不完全だから、それを改善しなければ流布を見ないであらうとか、色々の點から日本語の分布の可能を疑ふものがあるけれども、われわれ日本人が、生れ落ちると、日本語の間に生活して、いつの間にか何の苦勞もなしに日本語を領解し得るやうに、共榮圏内の諸民族をして、日本的環境の間に生活せしめることが先要條件である。